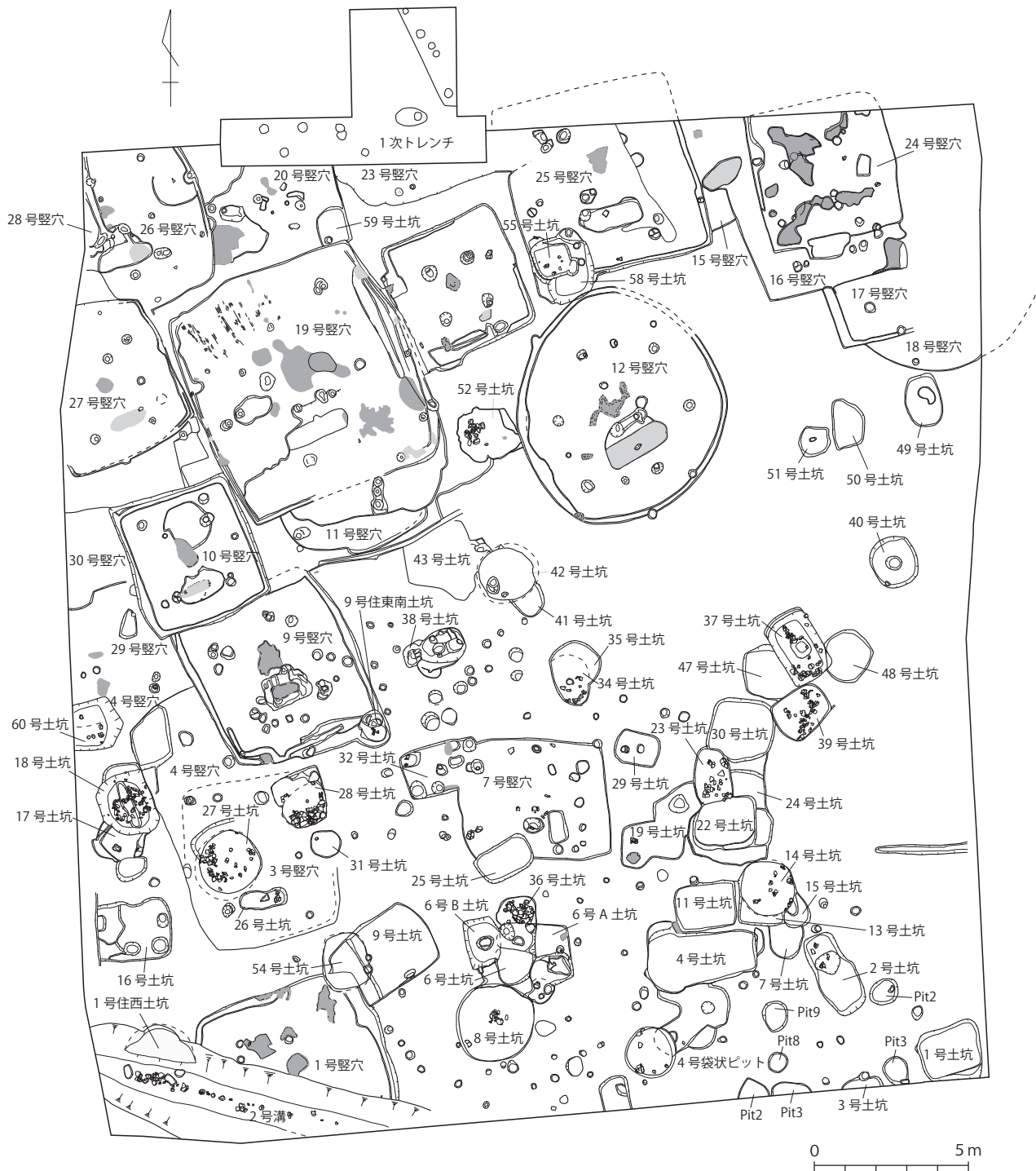


第8節 第7次調査

(1) 調査の概要

台地の中央部やや南側、第1次調査区のすぐ南側約928m²を調査した。もっとも広い調査区である。検出された遺構は竪穴建物24基、土坑62基、溝一条である。



第198図 7次調査区遺構配置図

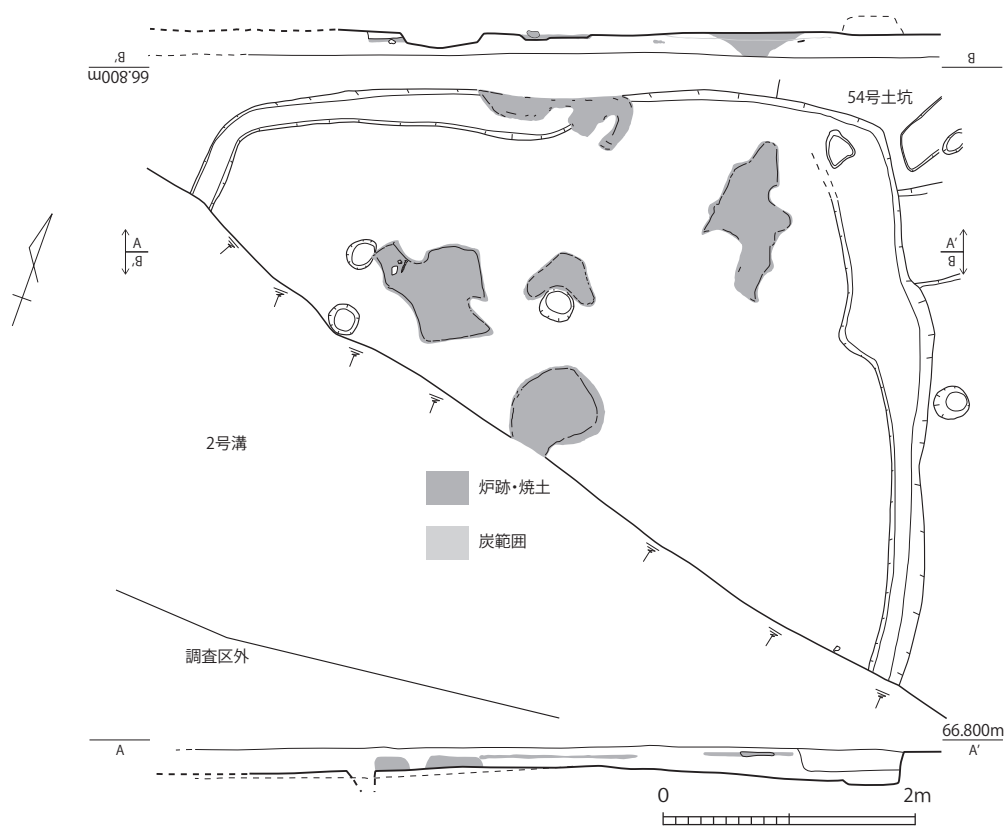
(2) 遺構と遺物

竪穴建物

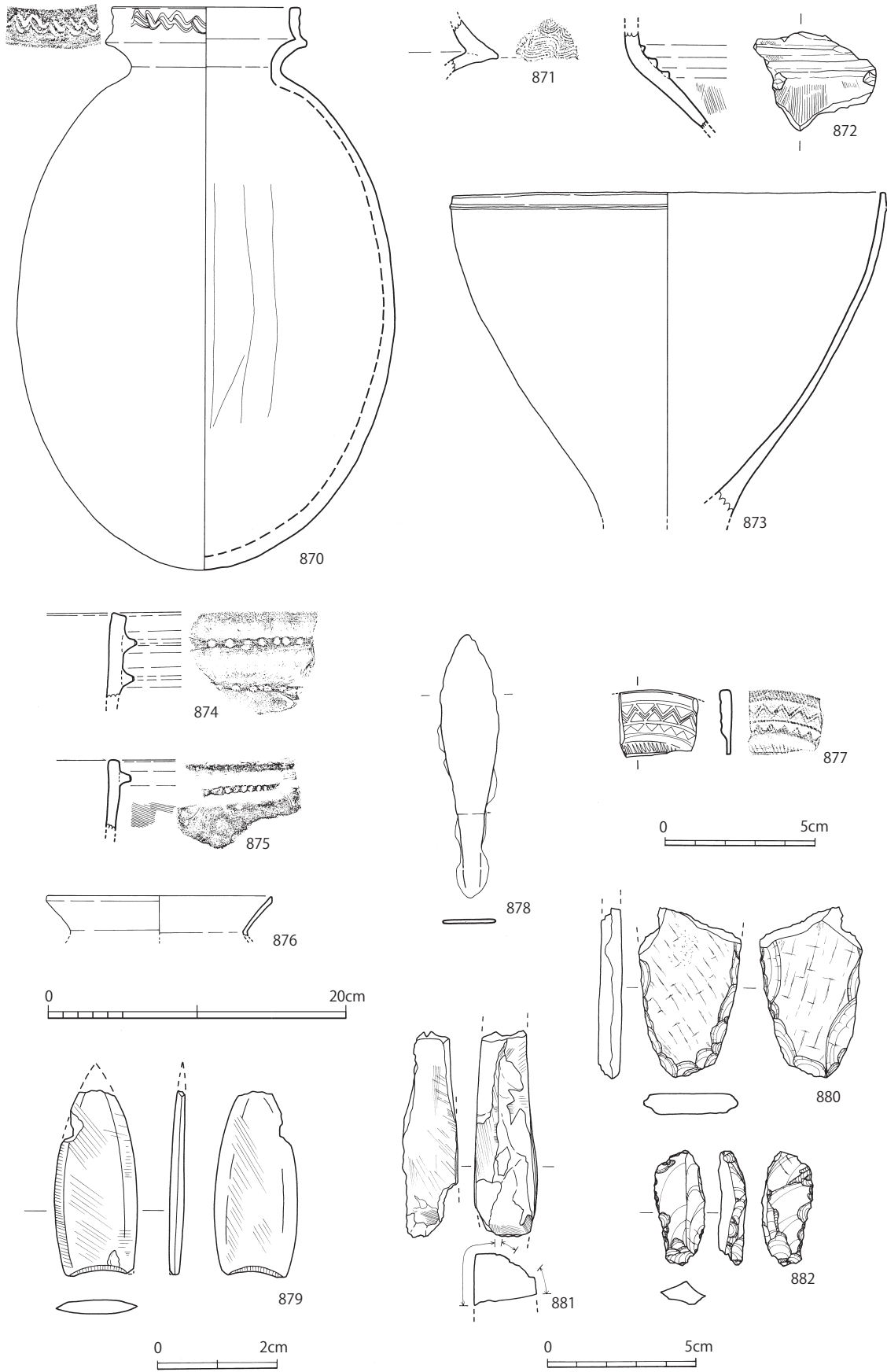
1) 1号竪穴建物 (第199図)

調査区の南西端で確認された竪穴建物で、溝によって南側半分が切られており、北東角部は54号土坑に切られている。東西方向は5.70mで、南北方向は $4.6 + a$ mである。深さは0.20mである。北側壁の西側半分と東壁際には幅約0.3m、深さ数cmの壁溝がある。床面には四カ所で焼土が確認されているが、中央が地床炉である。図示できる出土遺物は16点である。第200図870から872は安国寺式土器壺で、870は口縁部上半があまり伸びないタイプで、櫛描波状文も一条しか施文されないが、体部は長胴の丸底である。872は三条の突帯を廻らせ、その下位に勾玉状浮文を付す。873から876は刻目突帯文を巡らす下城式土器、876は器壁の薄い甕で、内面ヘラケズリである。877は後漢鏡片。方格規矩鏡で、外区に複波文帯—鋸歯文帯を廻らせ、内区の斜行櫛歯文帯まで確認できる。878は鉄鏃、879は緑泥片岩製の磨製石鏃、880は同じく磨製石鏃の未成品、881は砂岩製の砥石、882は姫島産黒曜石製の二次加工剥片、883から885はいずれも安山岩製で、石皿(883)、凹石(884)、敲石(885)である。

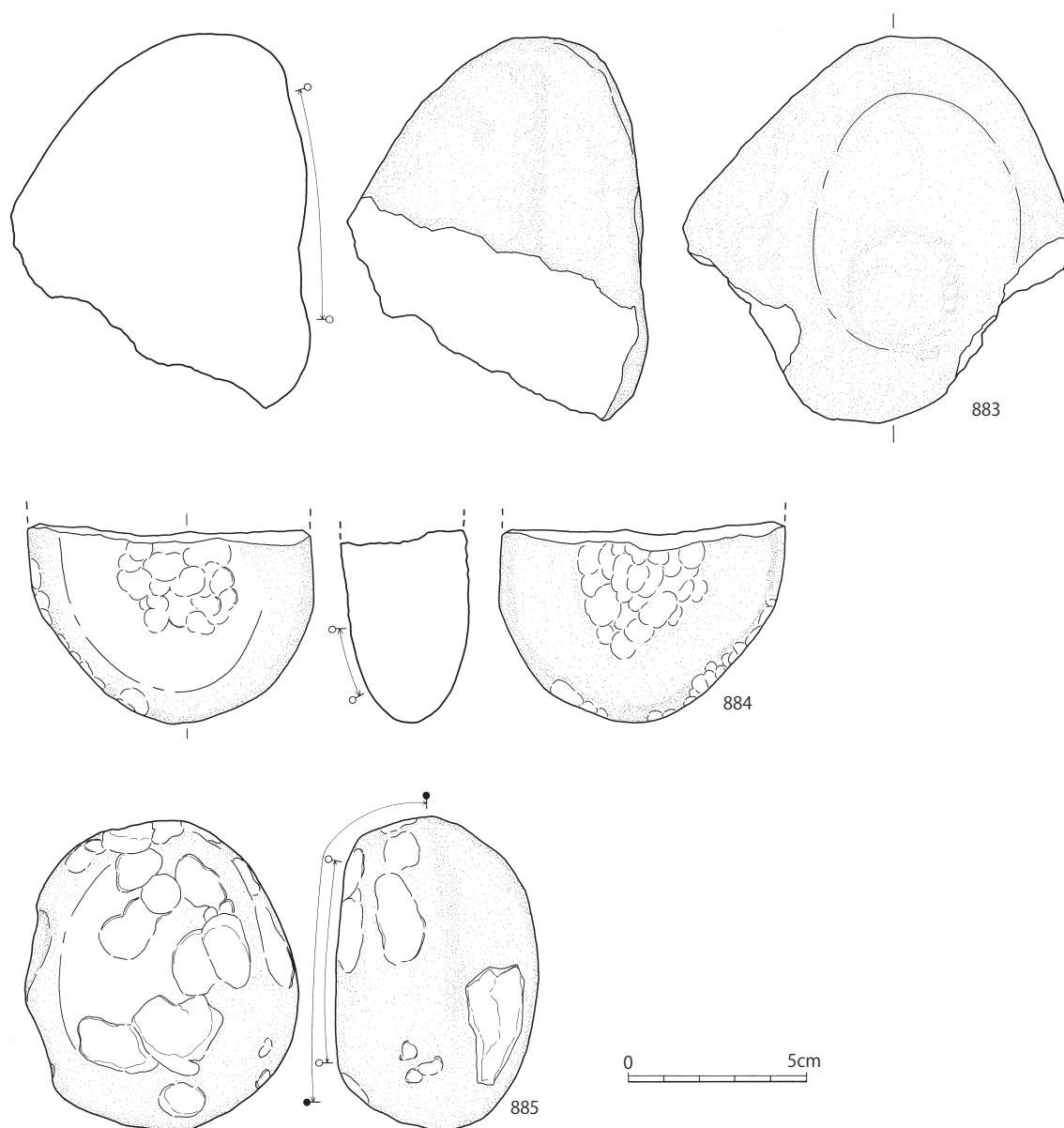
この竪穴建物の時期は、870の存在と、876の口縁部を小さくつまみ上げる薄手の甕の存在からX期(古墳前期)と考えられる。



第199図 7次1号竪穴建物



第200図 7次1号竪穴建物出土遺物①



第201図 7次1号竪穴建物出土遺物②

3) 3号竪穴建物 (第202図)

調査区の南西部で確認された竪穴建物で、4号竪穴建物と切り合い関係を持つが、上部の削平により先後関係は確認できなかった。また、26号、27号、28号、31号土坑を切っている。床面からは数カ所でピットが確認されているが、支柱穴は確認できなかった。炉跡や土坑も確認できなかった。

図示できる出土遺物は8点である。第203図886は鋤先状の口縁部を持つ壺で、上面に円形浮文を付す。887は平行沈線の間を刺突文で埋める壺の肩部、888は一条の突帯の下位に勾玉状の浮文を付す。889と890は刻目突帯文を巡らす下城式土器甕、891と892は平底の甕底部である。893は緑泥片岩製の磨製石鏃である。

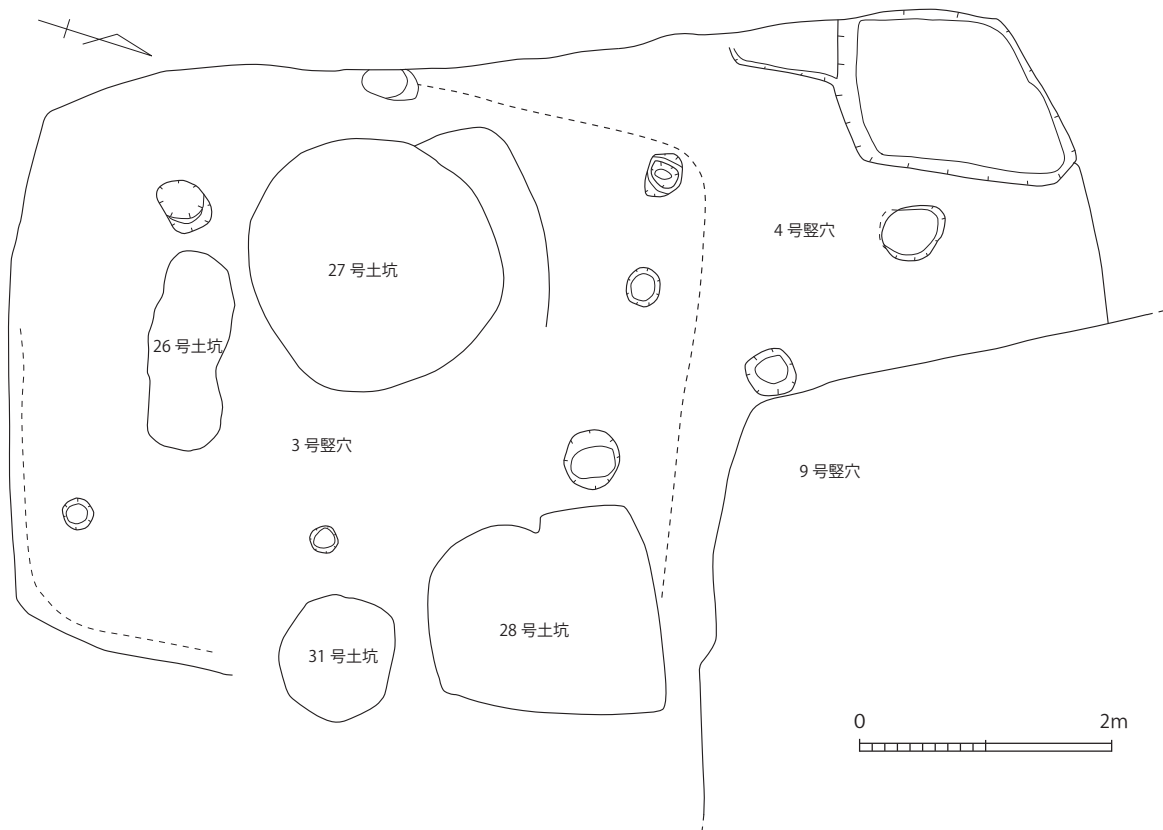
出土遺物は中期のものが多いが、888の存在などから後期に下る。詳細な時期は決められないが、前半の可能性が高い。

4) 4号竪穴建物 (第202図)

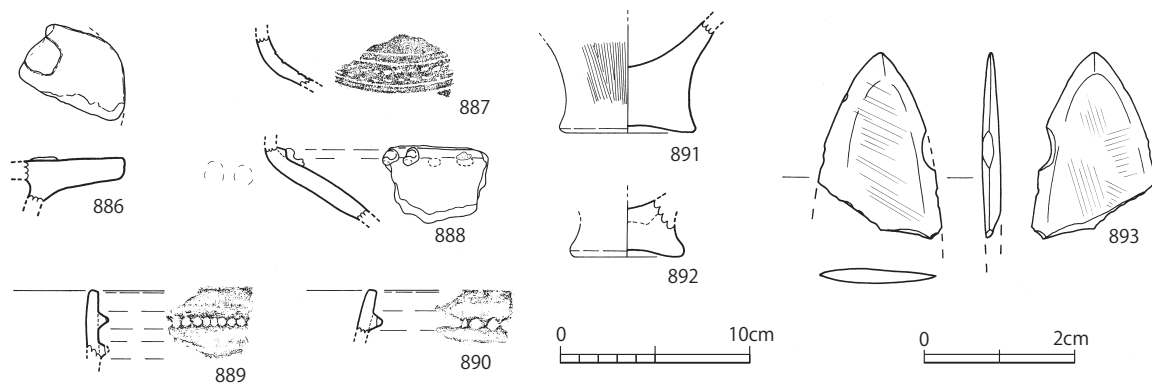
調査区の南西部で確認された竪穴建物で、9号竪穴建物に切られ、3号竪穴建物と切り合い関係を持つが、上部

の削平により先後関係は確認できなかった。床面からはピットが複数検出されているが、支柱穴は確認できなかった。炉跡も確認できなかったが、北西角部では1.6m × 1.2mで深さ0.2mの土坑が確認されている。

出土遺物はなかったため、時期は不明である。



第202図 7次3、4号竪穴建物

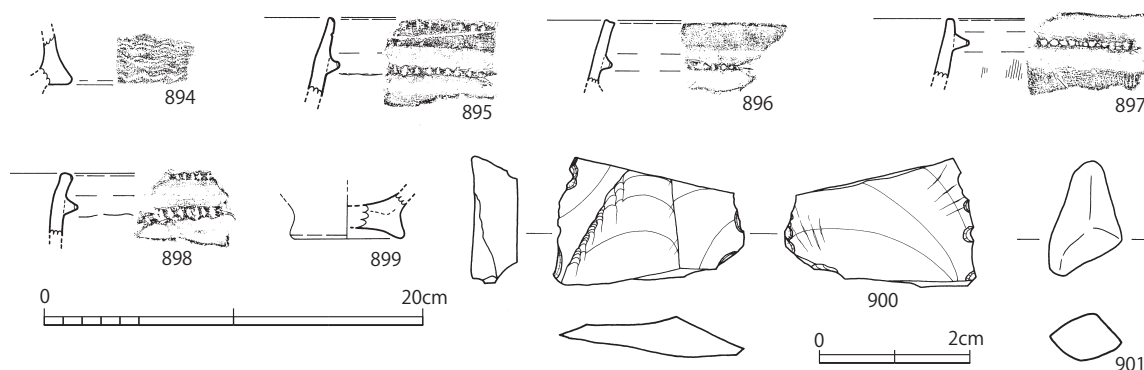


第203図 7次3号竪穴建物出土遺物

4) 6号竪穴建物

「6号住居」出土遺物として一括されたものであるが、図面上では場所が特定できない。調査の途次に遺構でないことが判明したものと考えられるが、ここでは出土時の一括性を尊重し、「6号竪穴建物」出土資料として説明する。

図示できる出土遺物は8点である。第204図894は櫛描波状文を描く安国寺式土器壺、895から898は刻目突帯文を巡らす下城式土器甕、899はやや上げ底の甕底部である。900は姫島産黒曜石製の剥片、901は研磨された蛇紋岩の小礫である。



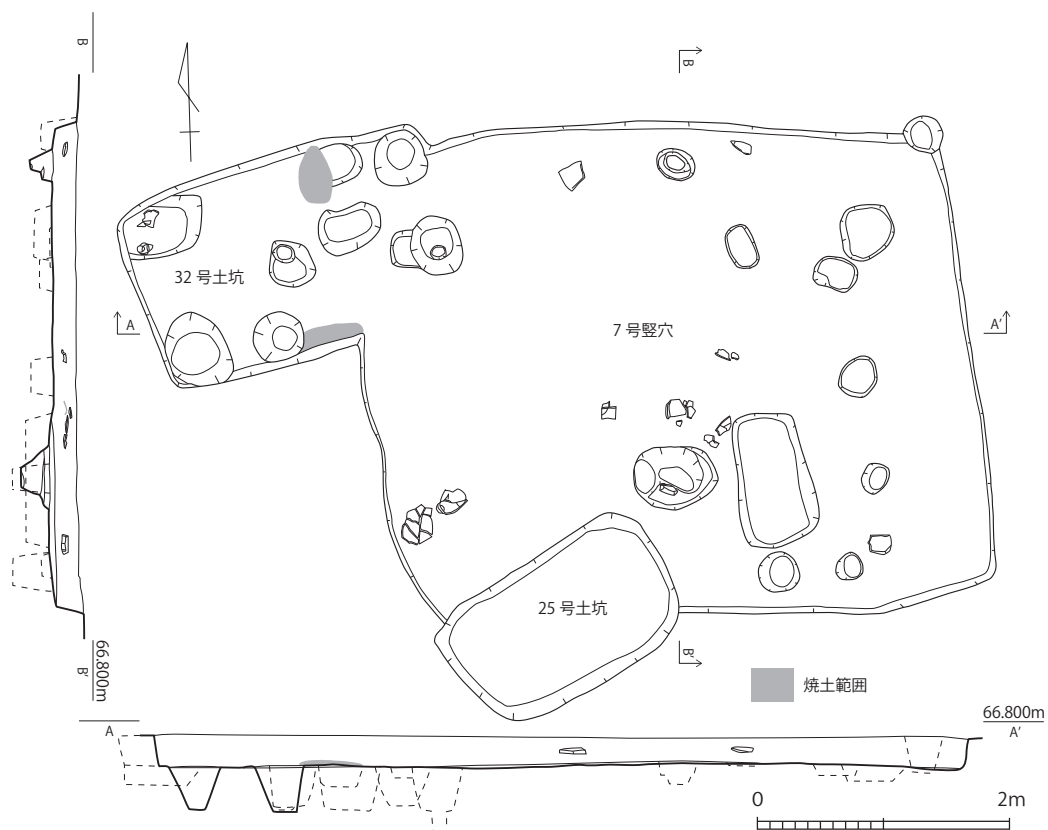
第204図 7次6号竪穴建物出土遺物

5) 7号竪穴建物 (第205図)

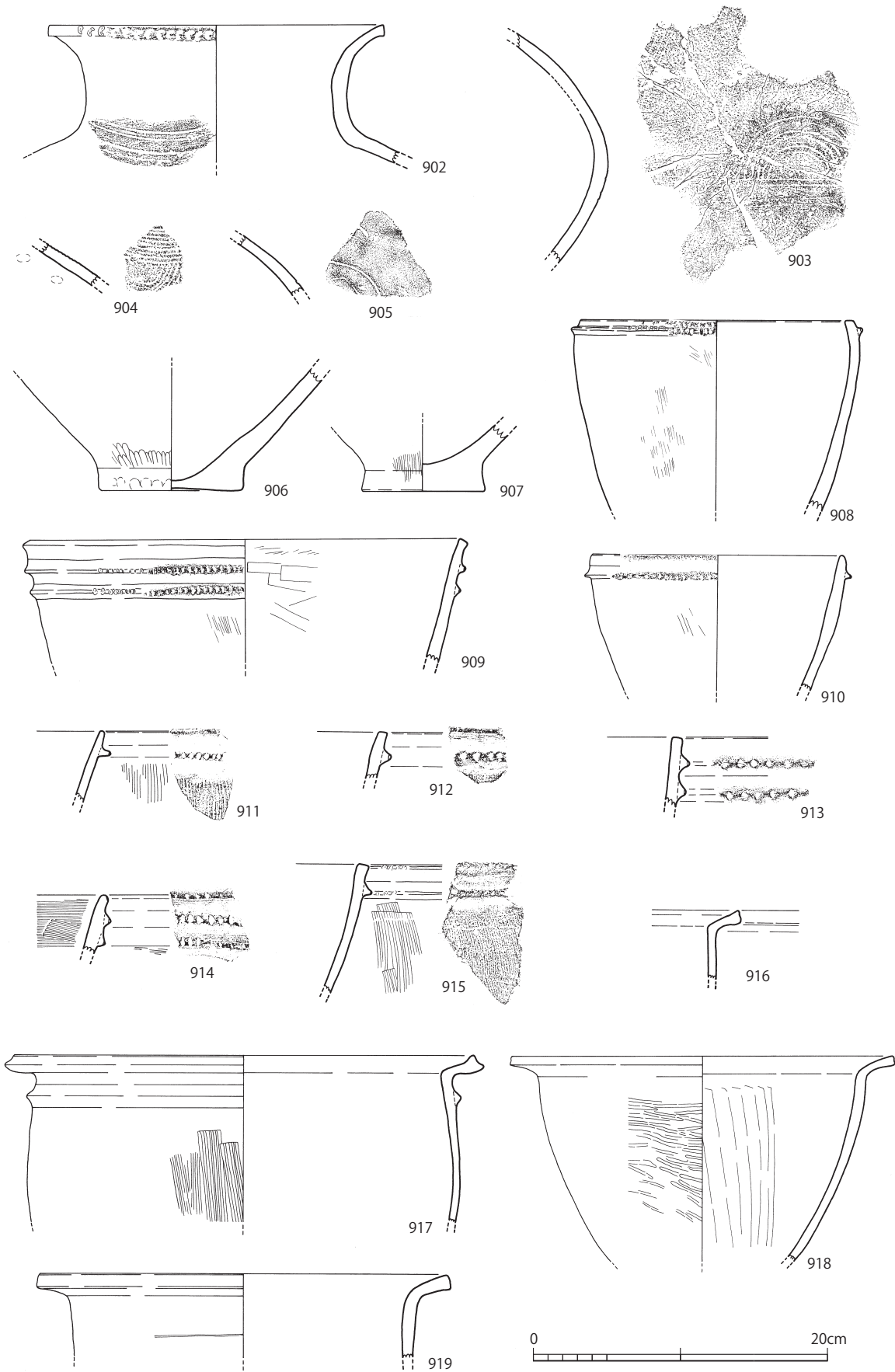
調査区中央やや南寄りで確認された竪穴建物である。25号土坑に切られており、32号土坑と切り合い関係を持つが、先後関係は不明である。南北3.90m、東西4.83mの長方形を呈し、残存する深さは0.25mである。床面からは複数のピットが検出されているが、主柱穴は不明である。炉跡は確認できなかったが、中央やや南寄りで0.63m×0.50m、深さ0.23mの楕円形の土坑が確認されている。

図示できる出土遺物は28点である。第206図902から905は半裁竹管を使用して直線文、重弧文を描く下城式土器壺である。902は頸部を直立させ、口縁部を外反させながら開く。906と907は平底の壺底部で、下城式土器壺のものか。908から915は刻目突帯文を巡らす下城式土器甕である。908や910は突帯の位置が口縁直下で、908はさらに口縁部が内湾するなど古式の要素を持つ。917は口縁端部を摘み上げ、頸部下に突帯を一条巡らす東北部九州系の甕、918と919は緩やかに外反して開く口縁部の甕。第207図920から923は甕の底部で、923はやや突出気味の他は平底である。924は平底の鉢。口縁部は緩やかに外反する。925は姫島産黒曜石製の打製石鏃、926から929は結晶片岩製の磨製石鏃未成品である。

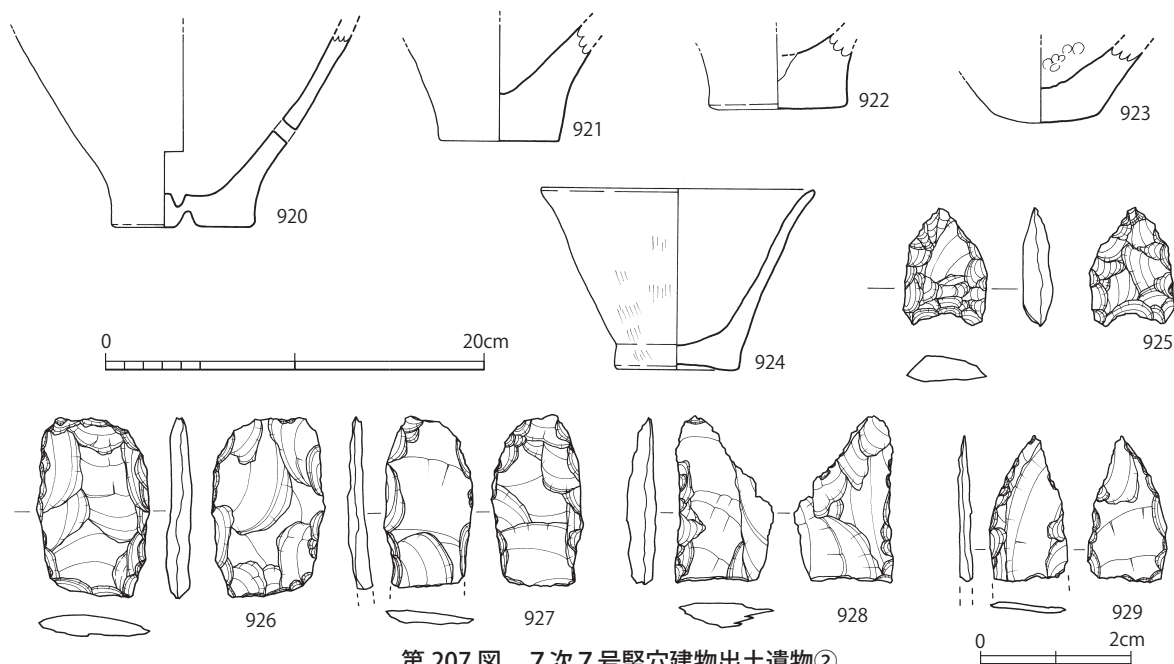
この竪穴建物の時期は、Ⅱ期(中期初頭～前葉)と考えられるが、中期には少ない方形基調の竪穴プランであることと、923の甕底部は後期の可能性があり、後期まで下る可能性は排除できない。しかしながら、この竪穴建物を切っている25号土坑からも中期の遺物しか出土しておらず、7号竪穴建物も中期のものとして想定しておく。



第205図 7次7号竪穴建物、32号土坑



第206図 7次7号竪穴建物出土遺物①

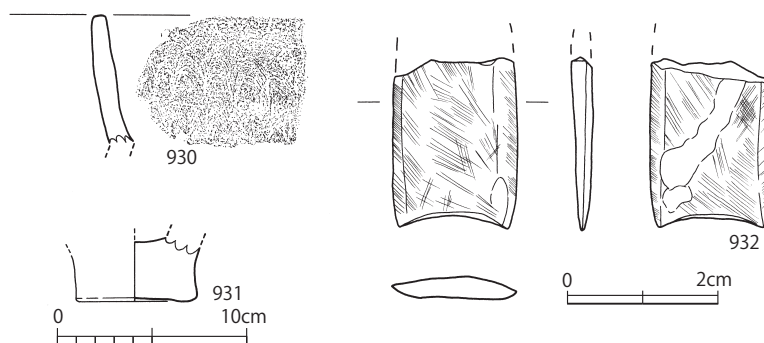


第207図 7次7号竪穴建物出土遺物②

6) 8号竪穴建物

「8号住居」出土遺物として一括されたものであるが、図面上では場所が特定できない。調査の途次に遺構でないことが判明したものと考えられるが、ここでは出土時の一括性を尊重し、「8号竪穴建物」出土資料として説明する。

図示できる出土遺物は3点である。第208図930は口縁部上半が大きく伸びた安国寺式土器壺である。931は平底の甕底部である。932は結晶片岩製の磨製石鏃である。

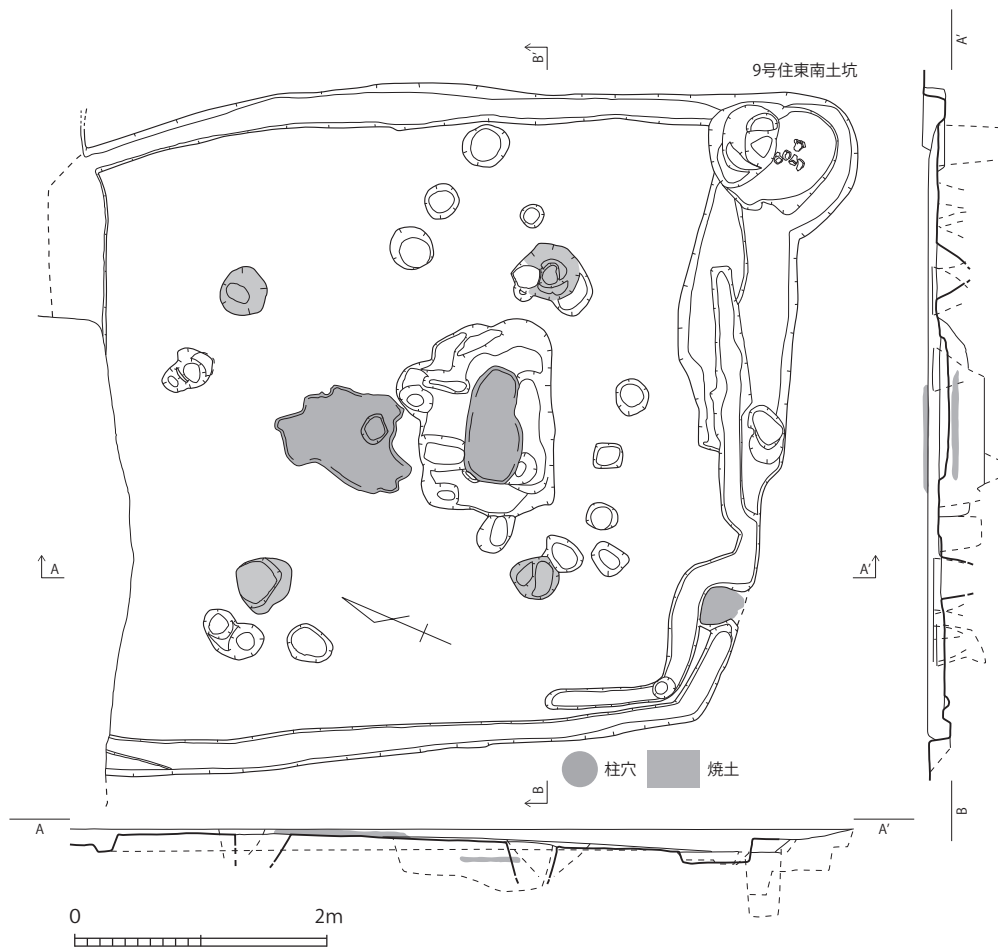


第208図 7次8号竪穴建物出土遺物

8) 9号竪穴建物 (第209図)

調査区中央やや西寄りで確認された竪穴建物で、10号竪穴建物に切られ、29号竪穴建物を切っている。一部を除き、四周には壁溝が廻る。主柱穴は四カ所で、床面中央やや北寄りには地床炉があり、その南側には炭化物が堆積した土坑 (1.56m × 1.05m) がある。

図示できる出土遺物はなかったため、この竪穴建物の時期は不明である。

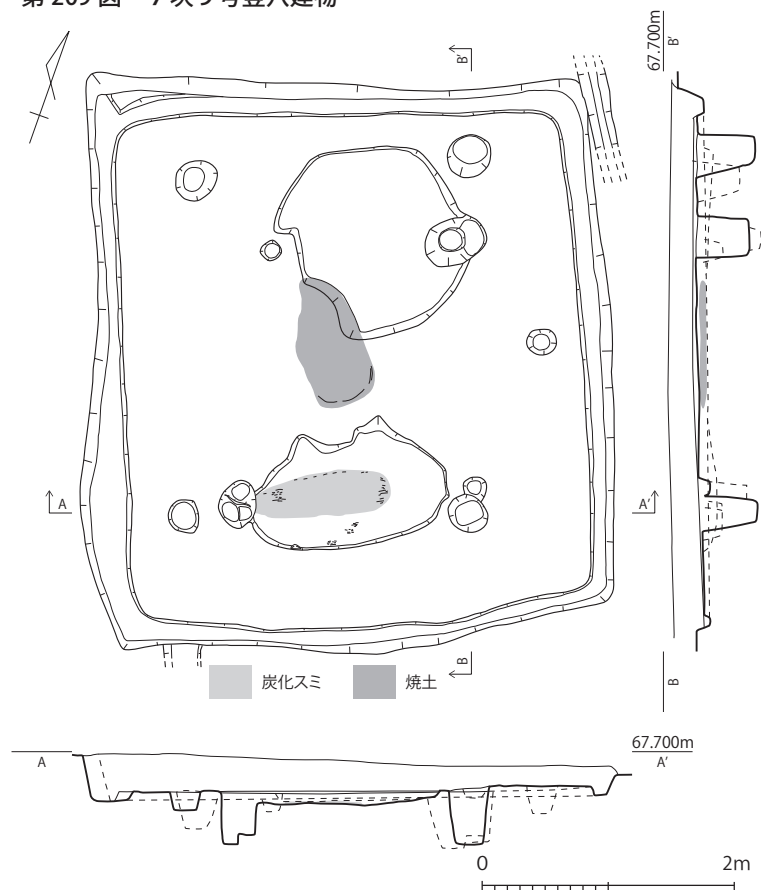


第209図 7次9号竪穴建物

9) 10号竪穴建物 (第210図)

調査区中央やや西寄りで確認された竪穴建物で、9号、29号、30号竪穴建物を切っている。四周には幅0.1m～0.25m、深さ0.05m前後の壁溝が廻る。主柱穴は四カ所で、床面ほぼ中央には焼土の堆積した炉跡が、その南側には1.6m×0.8mの楕円形で、深さ約0.08mの土坑があり、内部には炭化物が堆積していた。

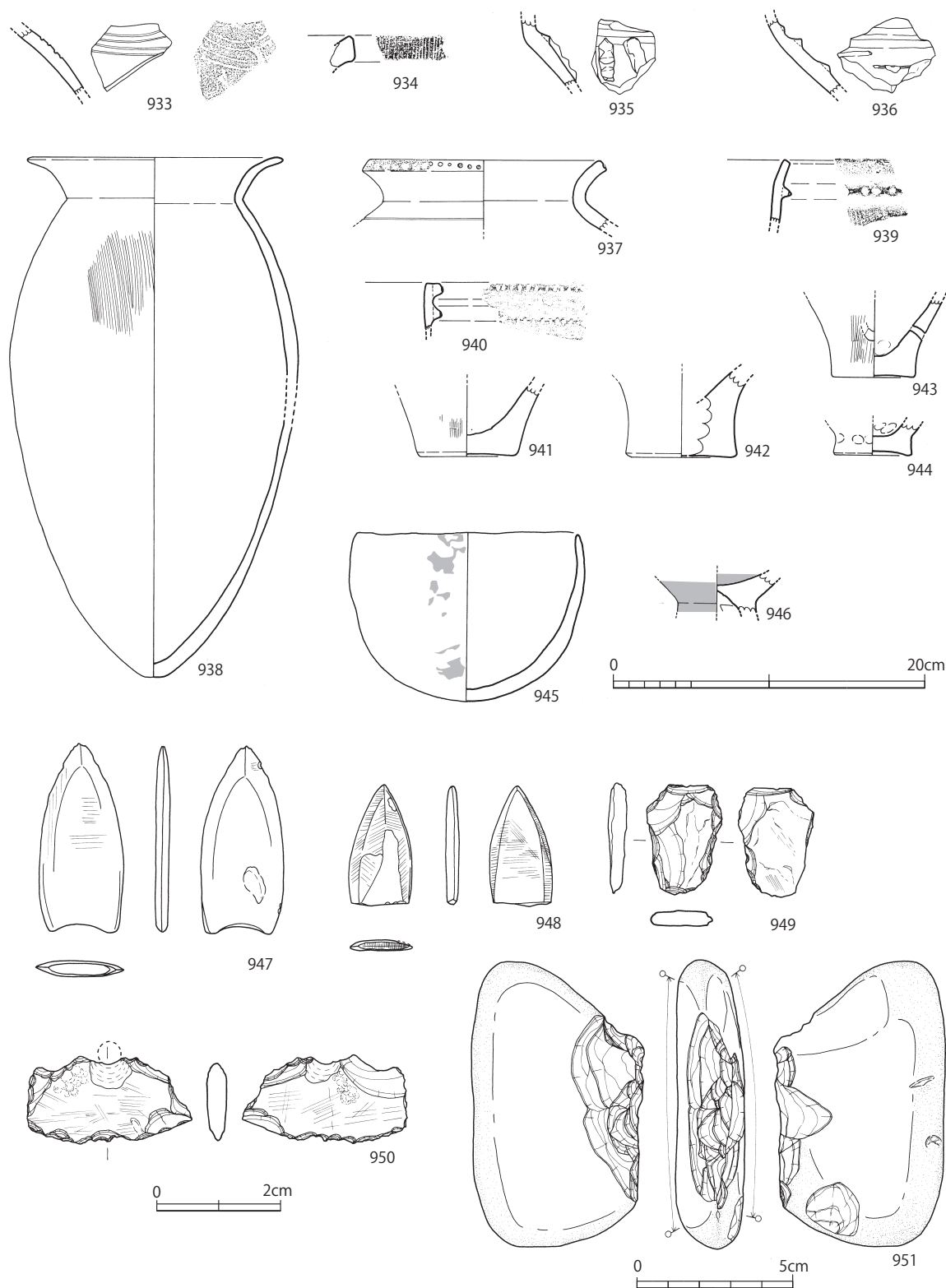
図示できる出土遺物は19点である。第211図933は半裁竹管による平行沈線を描く下城式土器壺、934は断面三角形になり、外面にハケ様のものので縦方向に沈線を入れる複合口縁の壺、935は突帯の下に勾玉状浮文を付す安国寺式土器壺、936も三条の突帯を巡らす安国寺式土器壺である。937は口縁端部外面に円形の刺突文を押す壺。938から944は甕で、938は小さな平底で長胴、口縁部は「く」字形に折れ開く甕、939と940は刻目突帯文を巡らす下



第210図 7次10号竪穴建物

城式土器甕、941 から 944 は平底の甕底部である。945 は丸底で深い鉢、946 は高坏の底部か。947 は結晶片岩製の、948 は立石産輝緑凝灰岩製の磨製石鏃である。949 は結晶片岩製の磨製石鏃未成品、950 は立石産輝緑凝灰岩の石包丁、951 は安山岩製の加工痕のある礫である。

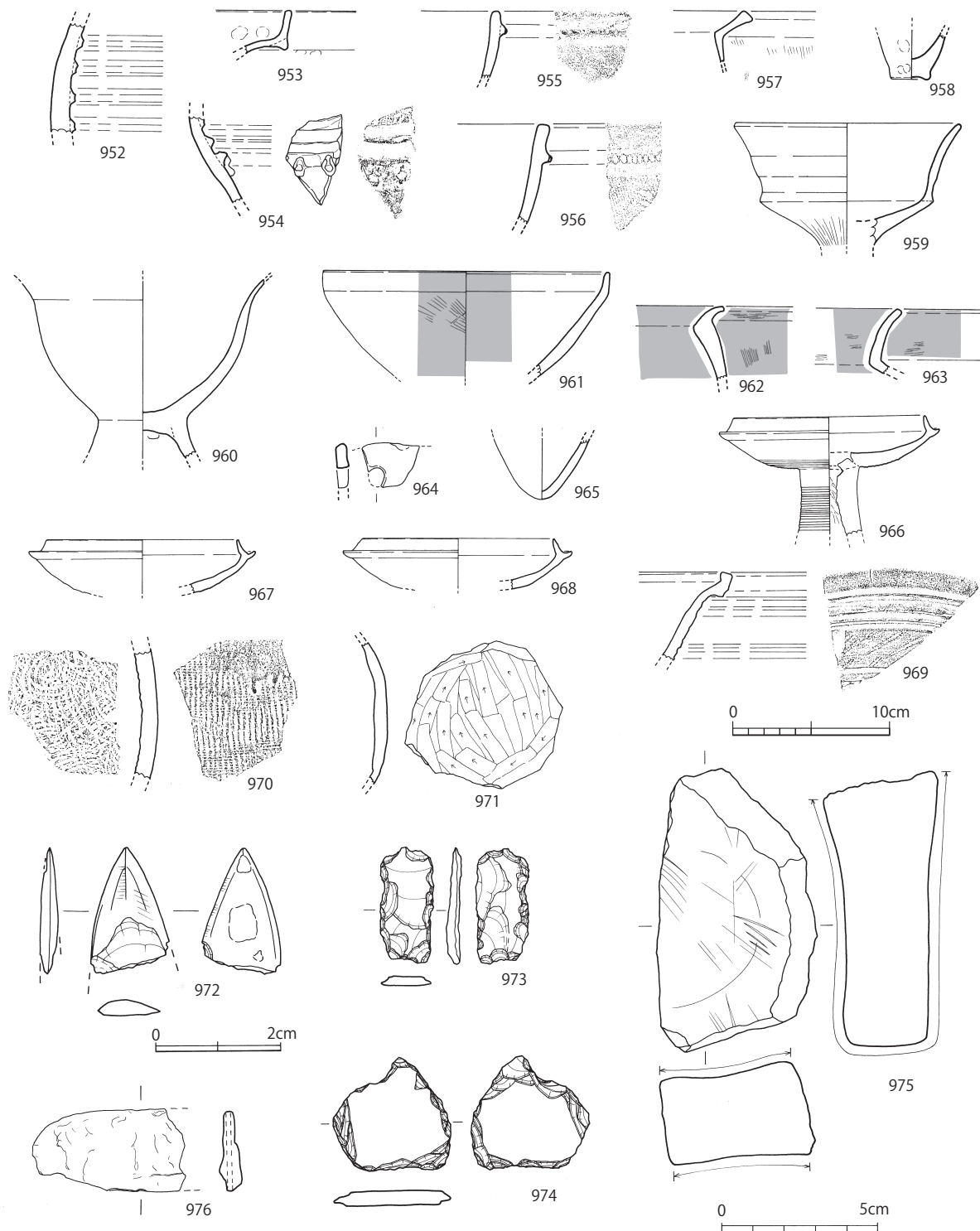
この竪穴建物の時期は、Ⅷ期（後期後葉）と考えられる。



第211図 7次10号竪穴建物出土遺物

8) 11号竪穴建物(第225図)

調査区の中央やや北西寄りで検出された竪穴建物で、大部分を19号竪穴建物に切られているとされる。東西は4.4m程で、隅丸方形を呈すると考えられる。深さは数cmである。19号竪穴建物の外側ではこの建物に伴う炉跡や土坑は確認できないが、後述のように19号竪穴建物内で検出された焼土塊が、11号竪穴建物に伴うものである可能性が高い。



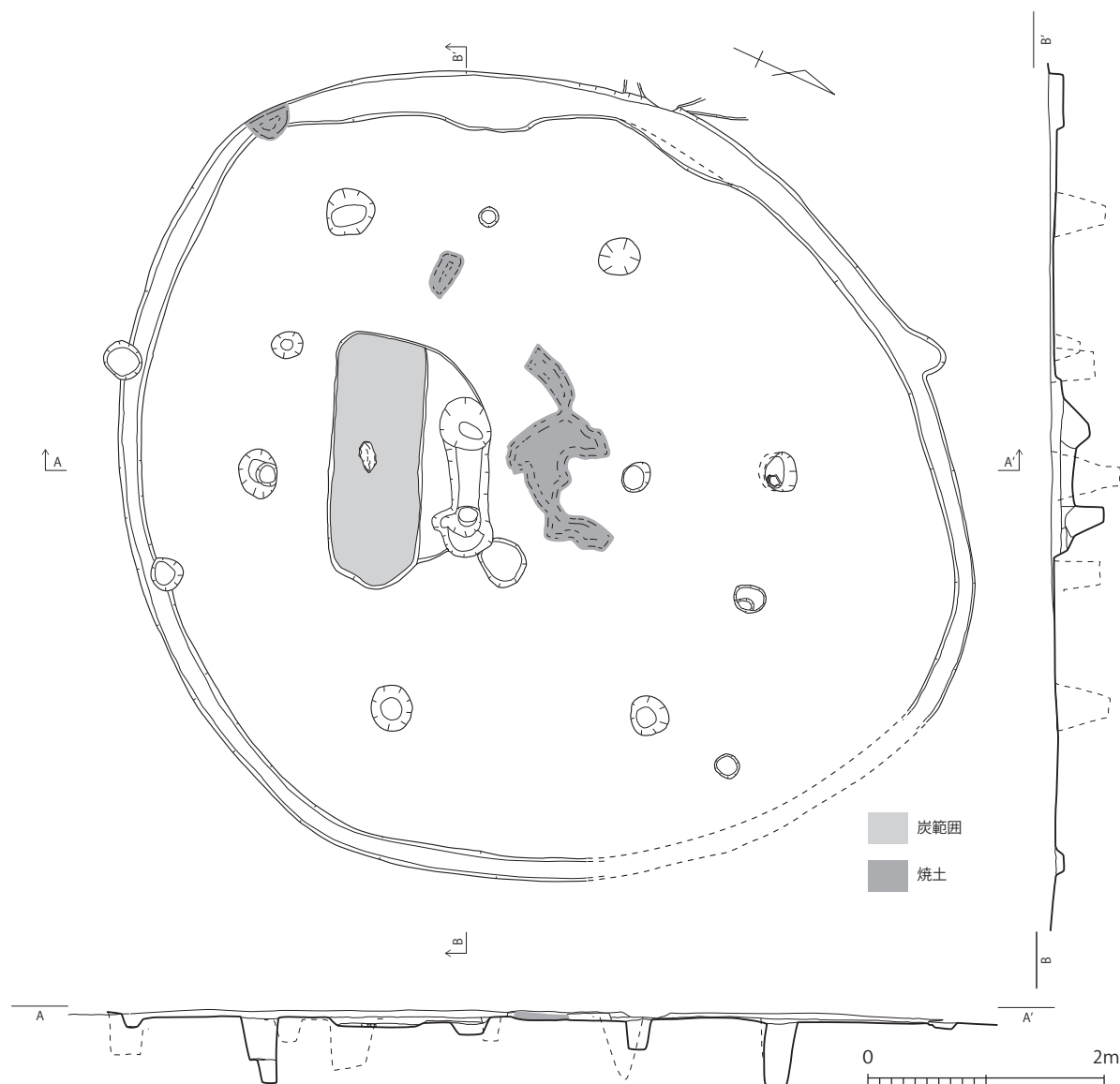
第212図 7次11号竪穴建物出土遺物

図示できる出土遺物は24点である。第212図952は長い頸部に4条の扁平な突帯を廻らせる壺、953と954は安国寺式土器壺で、953は口縁部上半が直立し、外面は無文、954は肩部に三条の突帯を廻らせ、その下位に勾玉状浮文を付す。955と956は刻目突帯文を一条巡らす下城式土器甕、957は口唇部を肥厚させる東北部九州系の甕、958は平底の鉢か。959は坏部上半が外反しながら開く坏部の深い高坏、960は脚付きの鉢、961は口縁部上半が短く立ち上がる高坏である。962は小さく折れ曲がる口縁部の壺、963も外反しながら開く口縁部の壺で、ともに内外面にベンガラが塗布される。964は円孔があいた板状のもので、全形は不明であるが、高坏の脚の可能性が高い。965は尖底状の底部を持つミニチュア土器か。966から971は須恵器である。966は有蓋高坏、967と968は坏身で、直径は11.8cmと12.0cmである。969は甕の口縁部で、2段に折れ立ち上がる。970は外面平行叩き、内面青海波文の叩きの甕、971は外面にヘラ削り痕がある提瓶である。972から974は結晶片岩製の磨製石鏃で、973と974は未成品である。975は砂岩製の砥石、976は鉄製刀子と考えられる。

この11号竪穴建物は、調査時の所見では後期前半の19号竪穴建物に切られていると判断されたが、19号竪穴建物を掘り下げる途中で南東部から大量の焼土塊が集中的に出土しており、その焼土塊が竈を破壊した痕跡だとしたら、11号竪穴建物が19号竪穴建物を切っていたことになる。今となっては確認できないが、11号竪穴から大量の須恵器が出土していることは、その考えを支持するものであろう。そうすれば、この11号竪穴建物の時期は6世紀後半となる。

9) 12号竪穴建物 (第213図)

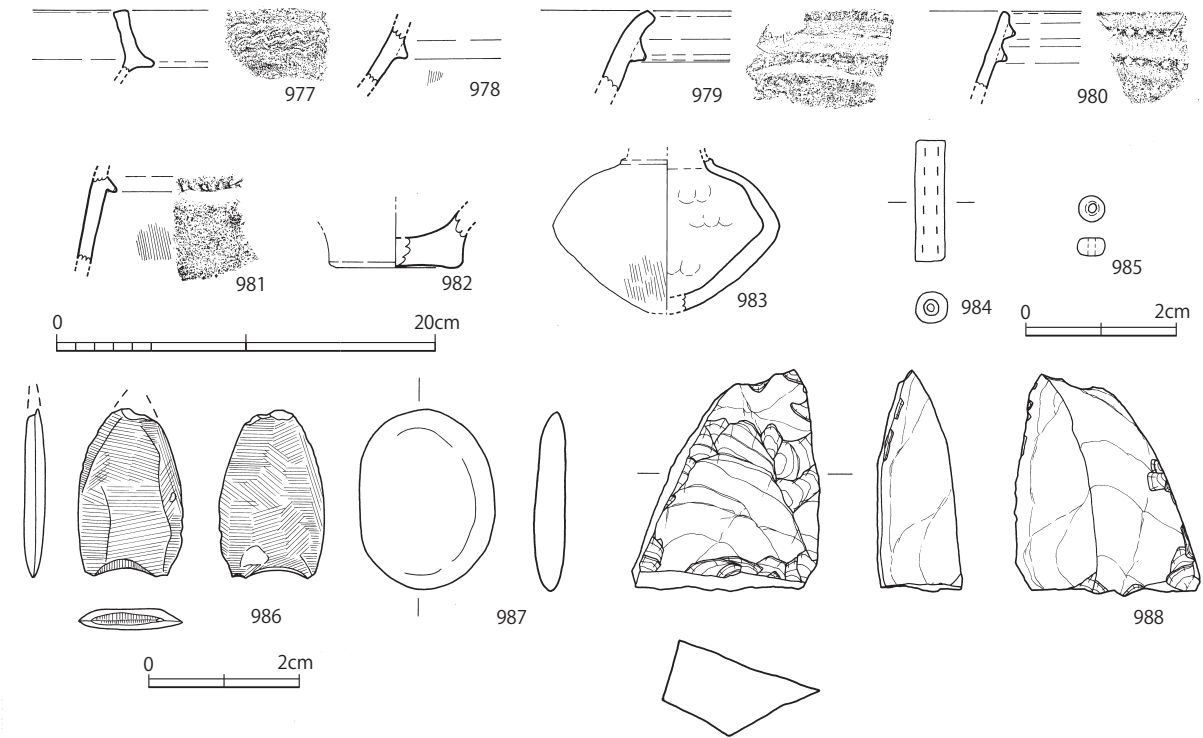
調査区中央北側で確認された竪穴建物で、南北7.62m、東西6.85mのやや楕円形を呈する円形建物である。幅0.02m



第213図 7次12号竪穴建物

前後で、深さ0.05m～0.10mの壁溝がほぼ全周している。支柱穴は円形に廻る八カ所である。中央には焼土が堆積する炉があり、その南側に間隔を0.75mあけて2本の柱穴があり、さらにその南側には2.10m×0.80mで深さ0.06mの長方形を呈する土坑がある。土坑内部には炭化物が堆積していた。

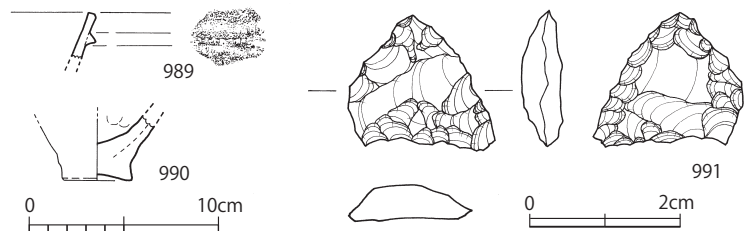
図示できる出土遺物は12点である。第214図977は二条の櫛描波状文を口縁部上半部に描く安国寺式土器壺、978は一条の断面三角形の突帯を廻らせる壺、979から981は刻目突帯文を巡らす下城式土器甕、982は平底の甕底部である。983は小さな平底をなすと思われる壺で、長頸壺となるか。984は碧玉製の管玉、985は青色をしたガラス製小玉、986は立石産輝緑凝灰岩製の磨製石鏃である。他の遺構から出土している結晶片岩や緑泥片岩製の



第214図 7次12号竪穴建物出土遺物

磨製石鏃と形態が異なり、搬入品であろう。987は研磨された蛇紋岩の小磔、988は姫島産黒曜石の二次加工品である。

この竪穴建物の時期は、977の存在から後期に下る可能性があるが、竪穴プランが円形であり、中期の可能性もある。ただし、大分平野では後期まで円形プランのものがあるので確実ではない。



第215図 7次13号竪穴建物出土遺物

10) 13号竪穴建物

「13号住居」出土遺物として一括されたものであるが、図面上では場所が特定できない。調査の途次に遺構でないことが判明したものと考えられるが、ここでは出土時の一括性を尊重し、「13号竪穴建物」出土資料として説明する。

図示できる出土遺物は3点である。第215図989は一条の刻目突帯文を巡らす下城式土器甕、990は平底の甕底部、991は姫島産黒曜石製の打製石鏃である。

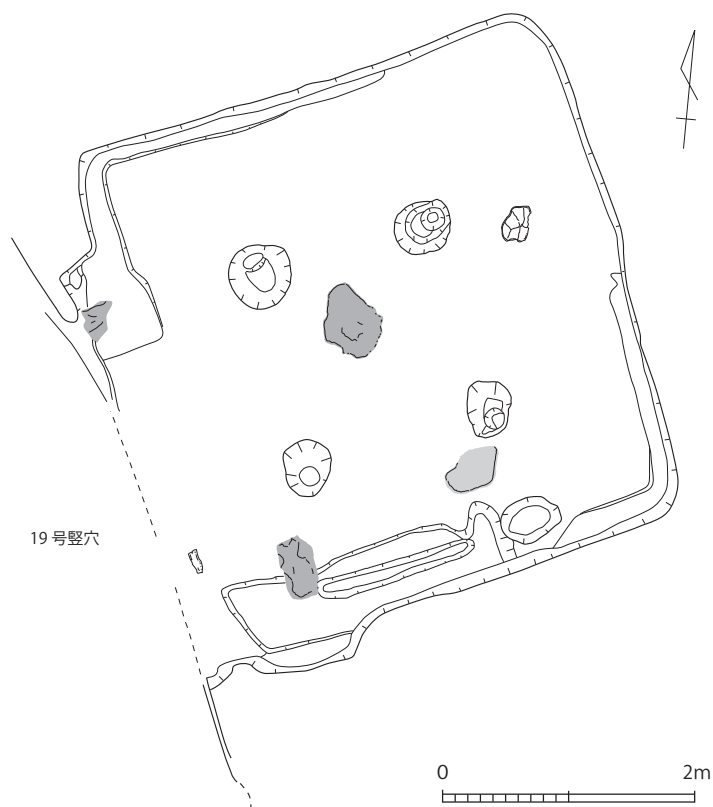
11) 14号竪穴建物 (第216図)

調査区北側で確認された竪穴建物で南西側が一部19号竪穴建物に切られている。南北4.18m、東西3.98mの方形で、残存する深さは0.25mである。南東角部と北西角部には幅0.01m前後で深さ数cmの壁溝がある。支柱穴は四カ所、中央には炉跡と考えられる焼土が堆積する。南側の壁に接して、長さ2.28m、幅0.55mのごく浅い土

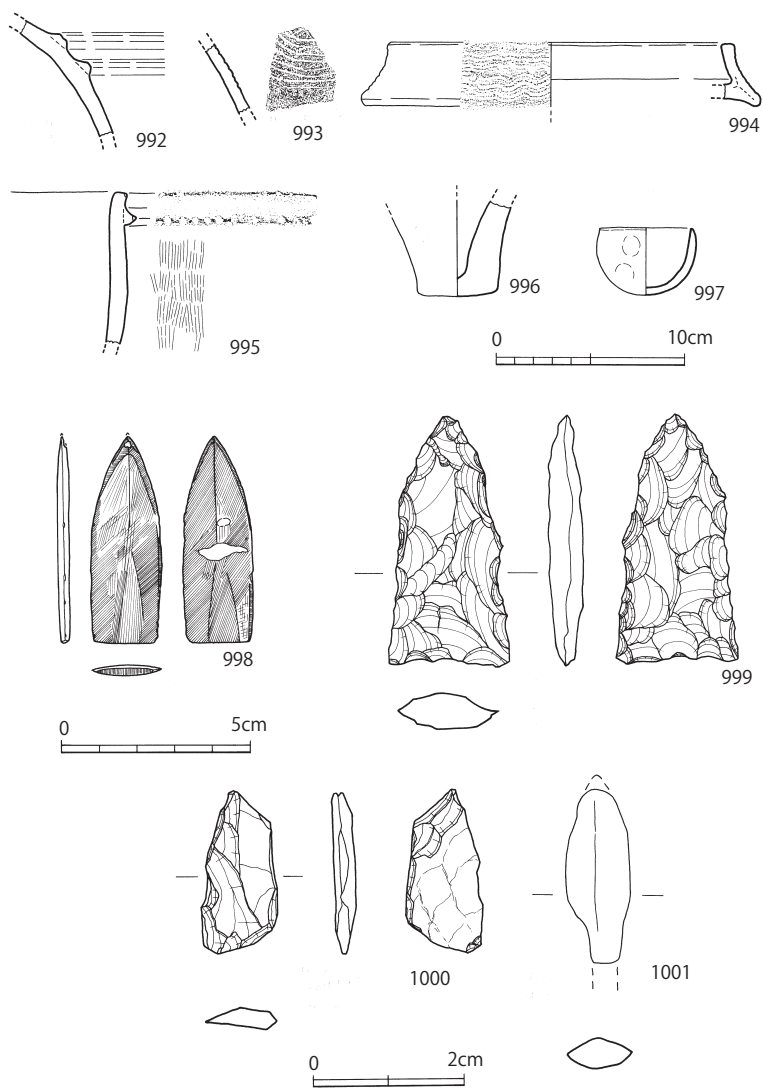
坑があり、その土坑の北東側に炭化物が堆積していた。

図示できる出土遺物は9点である。第217図992は肩部に断面台形の突帯を二条廻らせる壺、993は半裁竹管による沈線文を描く下城式土器壺、994は口縁部上半に櫛描波状文を施す安国寺式土器壺である。995は口縁直下に刻目突帯文を一条巡らす下城式土器甕、996は甕で、僅かに突出気味の平底底部、997は小型の鉢で丸底である。998は立石産輝緑凝灰岩製の磨製石鏃、999はサヌカイト製の打製石鏃、1000は結晶片岩製の磨製石鏃未成品、1001は残存長2.3cmの銅鏃である。先端部を欠き、茎は途中で折れている。

この建物の時期は、Ⅵ期（後期前葉）からⅦ期（後期中葉）と考えられる。



第216図 7次14号竪穴建物



第217図 7次14号竪穴建物出土遺物

12) 15号竪穴建物 (第218図)

調査区北端で確認された竪穴建物で、16号、25号竪穴建物に切られており、また調査区外に延びるため規模、形状は不明である。辛うじて南壁の一部が残っているが、残存する深さは僅か2cmほどである。支柱穴は確認できないが、1.50m × 0.75mの楕円形を呈する土坑があるが、内部に炭化物が堆積しており、位置から考えて（通常中央にある炉の南側）この建物に伴う土坑であろう。

図示できる出土遺物は7点である。第219図1002は口縁部上半に櫛描波状文を描く安国寺式土器壺、1003は口縁端部とその下に刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、1004やや上げ底状を呈す甕底部、1005は屈曲部に一条の突帯を廻らせる高坏で、底部を充填していた円盤が抜けたものもある。1006は緑泥片岩製の磨製石鏃未成品、1007は姫島産の黒曜石製の尖頭状石器、1008はチャート製の石鏃である。

この竪穴建物の時期は、1004の底部形状からⅦ期（後期中葉）前後と考えられる。

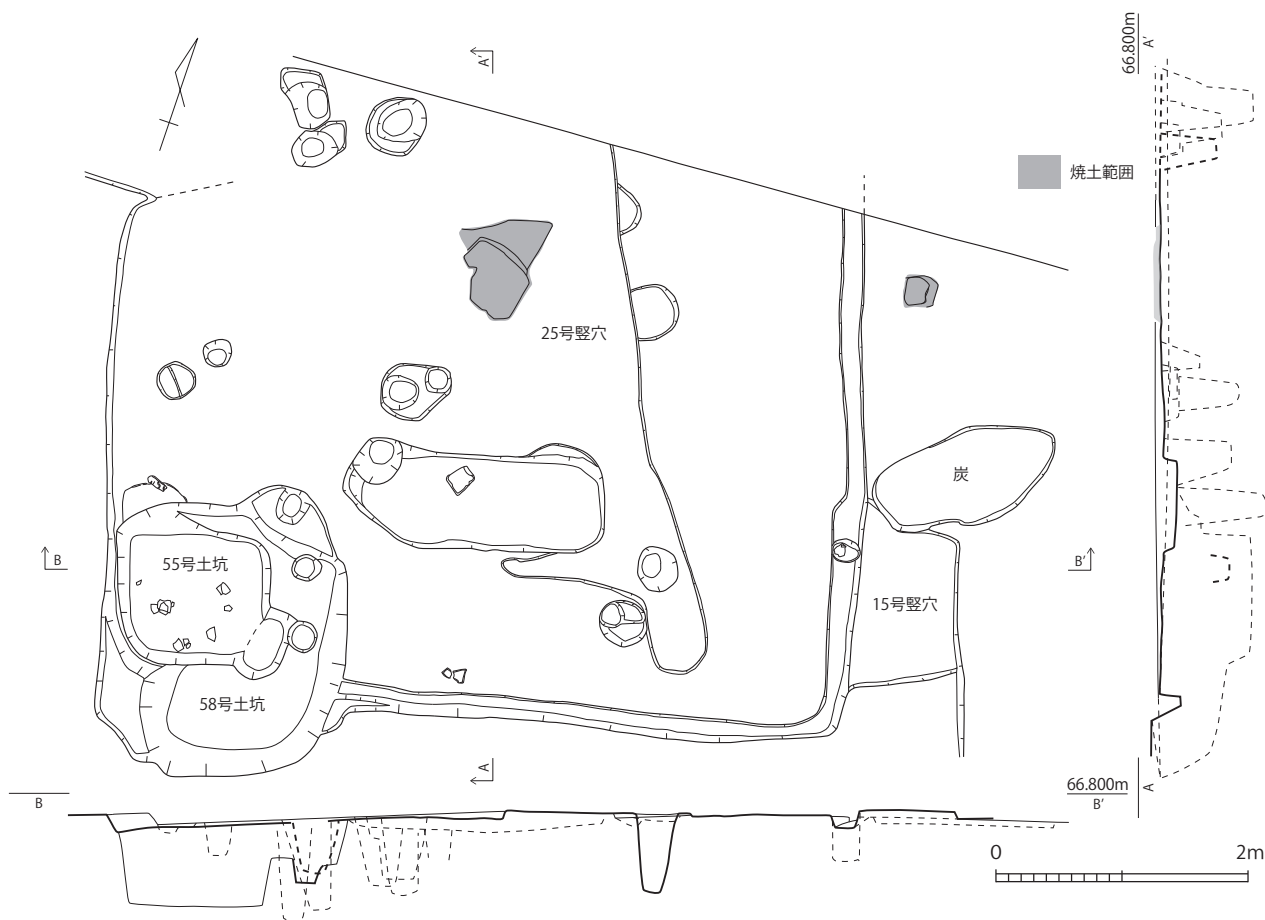
13) 16号竪穴建物 (第220図)

調査区の北東部で検出された竪穴建物である。15号竪穴建物を切り、24号竪穴建物によって大きく切られている。そのため、全形は不明であるが、南北は4.82m程と考えられる。24号竪穴建物のエリアも含めて多くの柱穴があるが、支柱穴は指摘できない。また、24号竪穴建物の南壁に重なる形で検出された1.3m × 0.75mで深さ0.05mほどの不定形の土坑は、炭化物が堆積しており、位置からもこの16号竪穴建物に伴う土坑と考えられる。

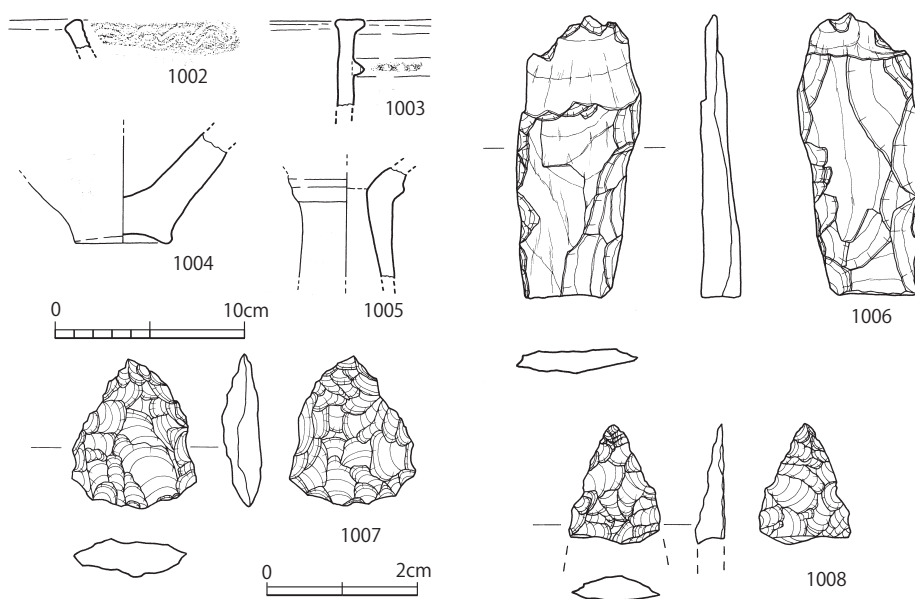
図示できる出土遺物は6点である。第221図1009は肩部に半裁竹管による平行線を描く下城式土器壺である。

1010 は頸部に断面三角形の突帯を一条廻らせ、突帯の下に勾玉状浮文を付す壺で、内外面ともベンガラが塗布されている。1011 と 1012 は刻目突帯文を廻らせる下城式土器甕、1013 は平底の甕底部である。1014 は鉄製の鉞で、残存長は 13.1cm である。

この竪穴建物の時期は、1010 の壺から後期に下ると考えられるが、詳細な時期は不明である。



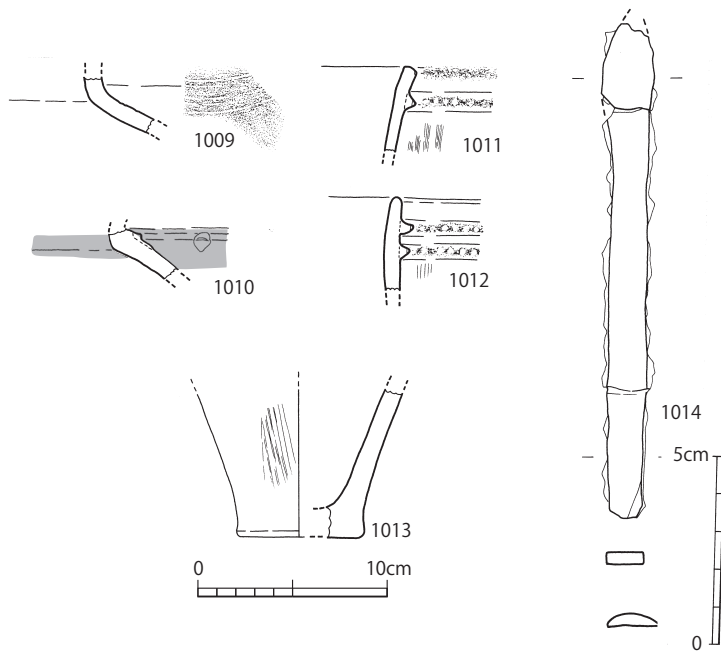
第218図 7次15、25竪穴建物



第219図 7次15号竪穴建物出土遺物



第220図 7次16、24号竪穴建物



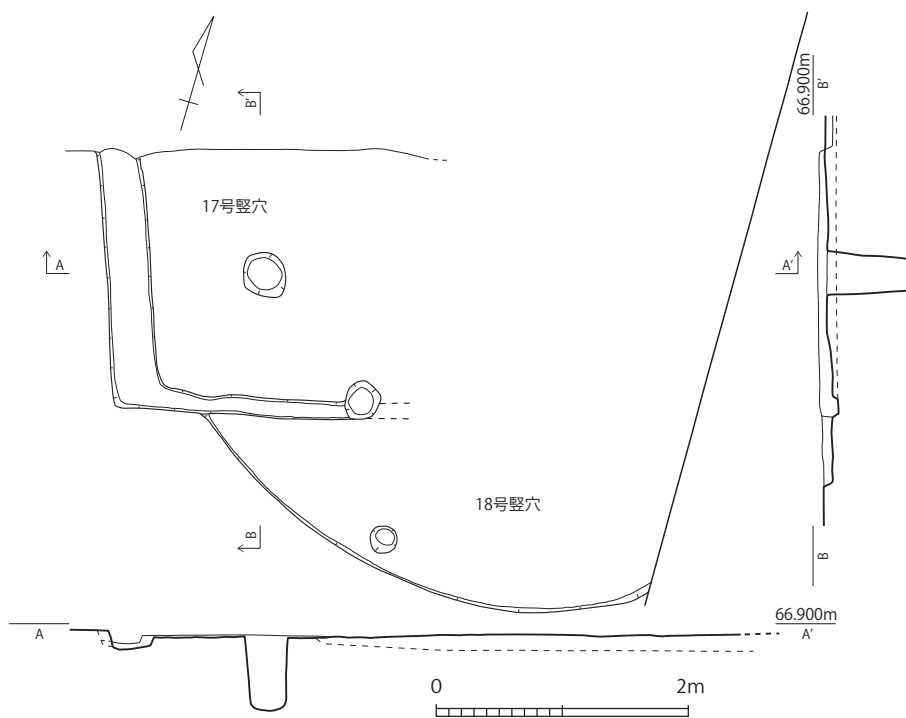
第221図 7次16号竪穴建物出土遺物

14) 17号竖穴建物(第222図)

調査区北東角部付近で確認された竖穴建物で、16号竖穴建物に切られ、18号竖穴建物を切っている。

図示できる出土遺物は3点である。第223図1015は肩部に四条の突帯を廻らせる壺、1016は口縁端部を大きく外側に肥厚させ、その下位に刻目突帯文を一条廻らせる甕、1017は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系の甕である。

この竖穴建物の時期は、図示した遺物は中期のものであるが(1015は後期に下る可能性あり)、竖穴プランが方形であることから後期に下ると考えられる。



第222図 7次17号、18号竖穴建物

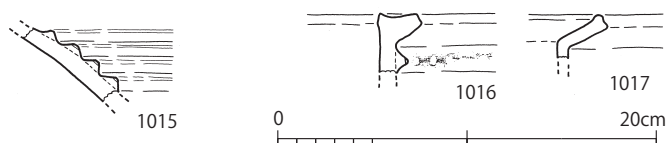
15) 18号竖穴建物(第222図)

調査区北東角部付近で確認された竖穴建物で、17号竖穴建物に切られている。

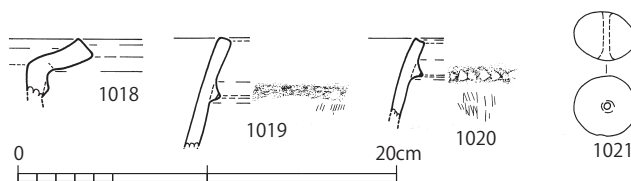
東側は調査区外に延び、北側は削平を受けて確認できなかった。竖穴プランは円形であるが、規模は不明で、支柱穴や炉も確認できなかった。

図示できる出土遺物は4点である。第224図1018は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系の甕、1019と1020は一条の突帯を廻らせる下城式土器甕である。1021は直径3.2cmの土錘である。

この竖穴建物の時期は、竖穴プランが円形であることから中期に遡る可能性がある。図示した遺物が時期を示すとすれば、Ⅱ期(中期初頭～前葉)からⅢ期(中期中頃)である。



第223図 7次17号竖穴建物出土遺物



第224図 7次18号竖穴建物出土遺物

16) 19号竪穴建物 (第225図)

調査区の北西部で検出された竪穴建物で、今回報告する竪穴建物では最大規模である。規模は南北7.65m、東西7.27mで、残存する深さは0.12mほどのやや長方形を呈する竪穴建物である。東西の壁際には、幅0.10m～0.20mの壁溝が廻る。これほど大型の建物にもかかわらず、支柱穴は確認できていない。炉はほぼ中央にある、長軸1.4mほどの焼土部分で、そのすぐ南側には0.9mの間隔をあけた2本の柱穴があり、さらにその南には2.17m×0.62m、深さ0.05mの長方形を呈する土坑がある。中央の炉、その南の2本の柱穴、その南の土坑というパターンを踏襲している。

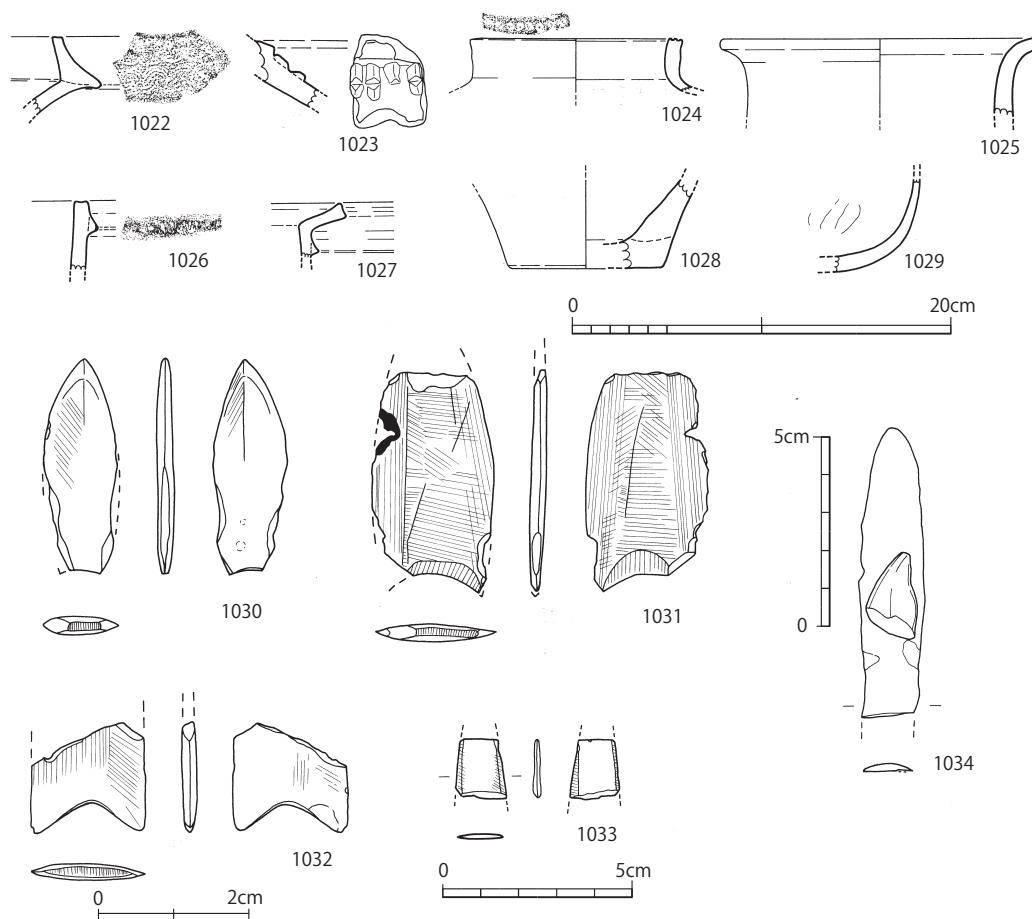
今回、残された図面を検討したところ、この19号竪穴建物の南東部において、「高い炉」との記述があり、写真でも焼土のブロックが浮いた状態で出土しているのが確認された。これは、11号竪穴建物から須恵器が出土していることから、本来は11号竪穴建物が19号竪穴建物を切って作られ、「高い炉」の焼土ブロックは11号竪穴建物に伴う竈が破壊された痕跡ではないかと考えておきたいと思う。しかし、その場合でも11号竪穴建物のプランがうまく納まらないが、あるいは図面で11号竪穴建物を切っているように描かれる遺構（遺構番号なし）が、本来須恵器を伴う竪穴建物であった可能性もある。これ以上の資料は残されておらず、遺憾ながら確定はできない。

図示できる出土遺物は13点である。第226図1022と1023は安国寺式土器壺で、1022は口縁部外面に二条の櫛描波状文を描く。1023は頸部突帯の下に勾玉状浮文を連続的に付す。1024は口縁部が短く直立する壺、1025は頸部が直立し、口縁部が小さく屈曲する壺、1026は一条の刻目突帯が廻る下城式土器甕、1027は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系の甕、1028は平底の甕底部、1029は丸底になる鉢である。1030から1033は磨製石鏃で、いずれも結晶片岩製である。1034は鉄製の鉞で、残存長は7.6cmである。

この竪穴建物の時期は、1022や1023からⅦ期（後期中葉）と考えられる。



第225図 7次19号竪穴建物



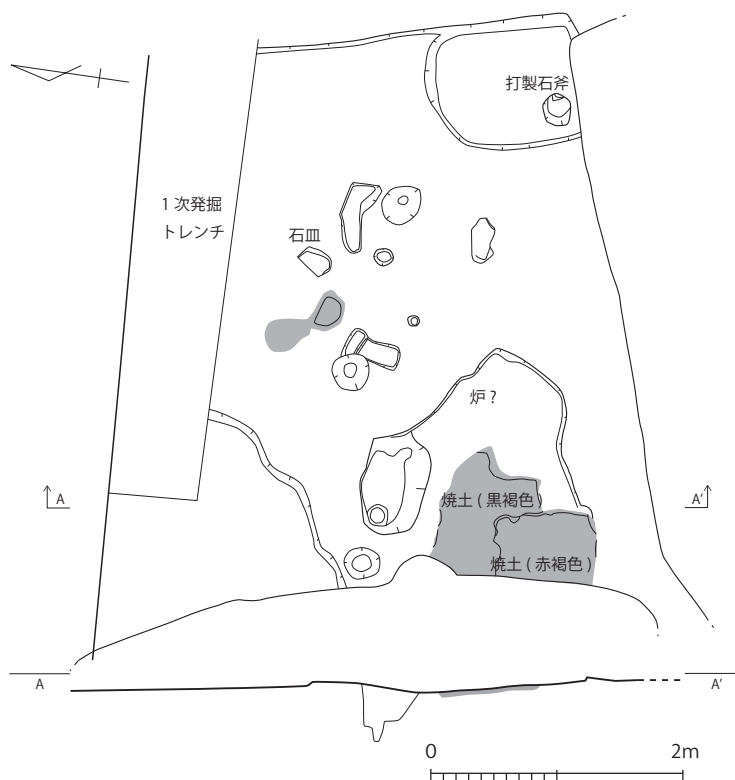
第226図 7次19号竪穴建物出土遺物

17) 20号竪穴建物 (第227図)

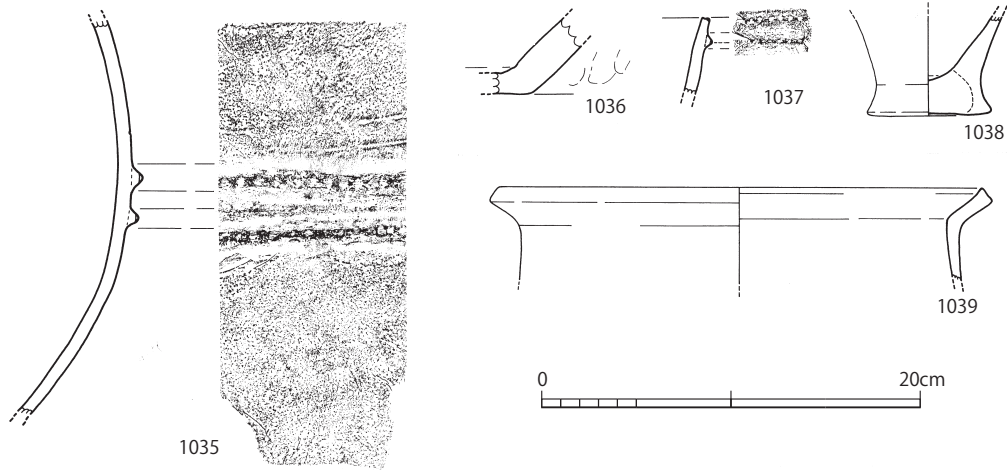
調査区北西端で確認された竪穴建物で、19号、26号竪穴建物に切れ、北側は調査区外に延びる。かろうじて南東角部が残るが、規模は不明である。床面には焼土やピットがあるが、26号竪穴建物に切られた焼土や炭化物は炉に関わるものかもしれない。主柱穴は不明である。

図示できる出土遺物は5点である。第228図1035は体部に二条の刻目突帯が廻り、その下位に二条の沈線を廻らせる前期の壺である。器壁が荒れていてミガキは確認できない。1036は平底の壺底部、1037は一条の刻目突帯が廻る下城式土器甕、1038はやや厚手の平底の甕底部、1039は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系の甕である。

この竪穴建物の時期は、プランが方形であれば後期に下る可能性が高いが、1035などから考えて、IV期(中期後葉~末)と考えておきたい。



第227図 7次20号竪穴建物



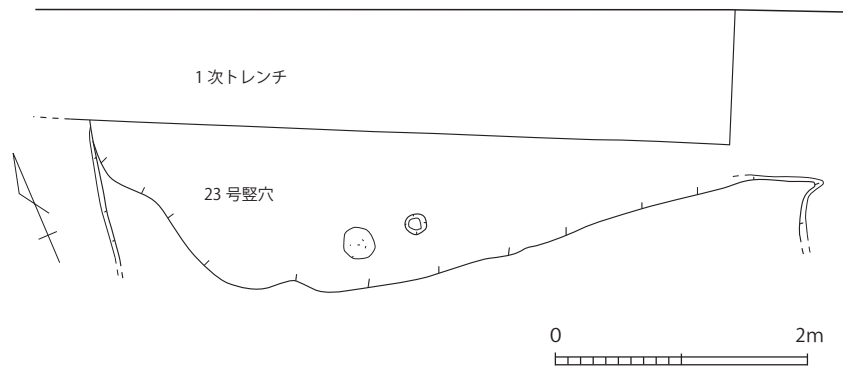
第228図 7次20号竪穴建物出土遺物

20) 23号竪穴建物(第229図)

調査区北端で確認された竪穴建物で、大部分は調査区外に延びる。円形プランの建物と考えられるが、規模などは不明である。

図示できる出土遺物は3点である。第230図1040は逆「L」字状口縁の甕、1041と1042は刻目突帯が廻る下城式土器甕である。

この竪穴建物の時期は、図示した土器からはⅢ期(中期中頃)からⅣ期(中期後葉~末)と考えられる。



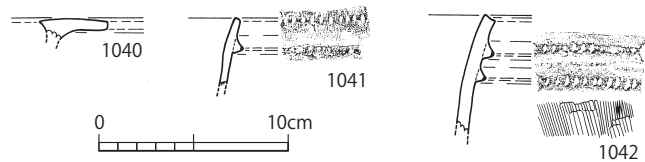
第229図 7次23号竪穴建物

21) 24号竪穴建物(第220図)

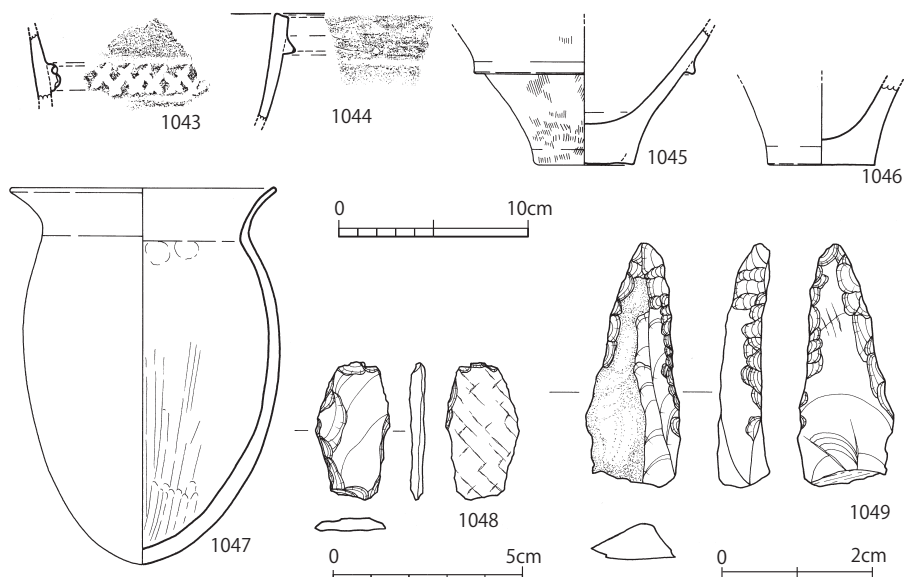
調査区北東角部で検出された竪穴建物で、16号竪穴建物を切っている。北側は調査区外に延びるため、南北の規模は不明であるが、東西は4.50mで、残存する深さは0.15mである。西壁際には幅0.12m~0.16mの壁溝が延びる。床面には焼土のブロックが複数個所あり、焼失家屋の可能性はある。柱穴は複数検出しているが、支柱穴は不明である。

図示できる出土遺物は7点である。第231図1043は「×」を刻むベルト状突帯を巡らす安国寺式土器壺、1044は一条の刻目突帯が廻る下城式土器甕、1045は底部に近い部分に断面三角形の突帯を廻らせる平底の壺、1046は平底の甕底部、1047は「く」字形に折れて外反しながら開く長胴、丸底の甕である。1048は結晶片岩製の磨製石鏃未成品、1049は姫島産黒曜石製の石錐である。

この竪穴建物の時期は、Ⅸ期(弥生時代終末)と考えられる。



第230図 7次23号竪穴建物出土遺物



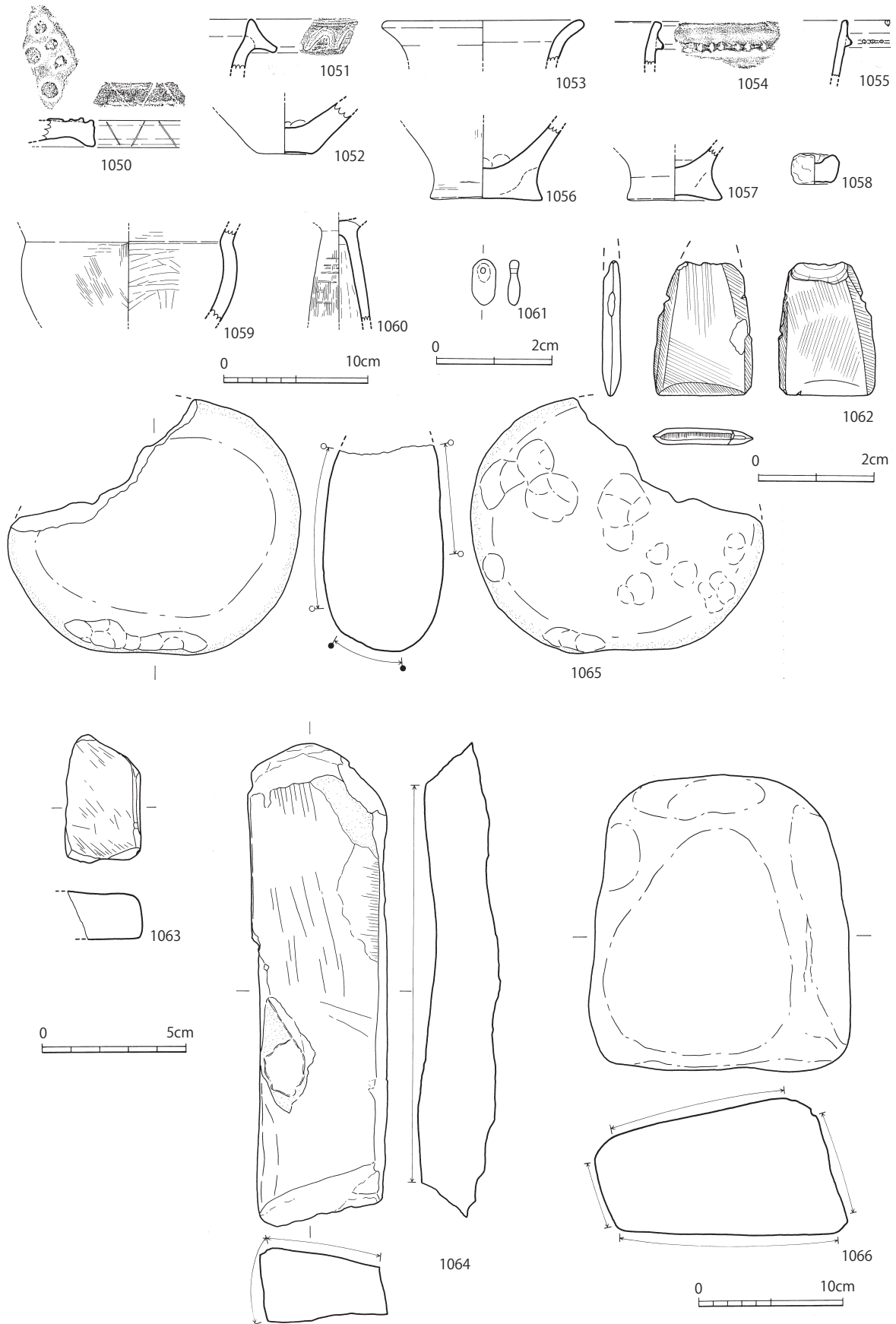
第231図 7次24号竪穴建物出土遺物

22) 25号竪穴建物 (第218図)

調査区の北端で確認された竪穴建物で、15号竪穴建物を切っており、北側三分の一ほどは調査区外となる。そのため、南北の規模は分からないが、東西は6.02mで、残存する深さは0.07mほどである。東側と南側の壁際には幅0.12m～0.20m、深さ0.07mほどの壁溝が廻る。主柱穴は四カ所と考えられるが、北東の一カ所は調査区外である。ほぼ中央と考えられる位置に焼土があり、炉と思われる。その炉と南壁との間には2.05m×0.75mで深さ約0.10mの、炭化物が堆積した土坑がある。また、床面の南西角部付近には55号、58号土坑があり、25号竪穴建物が切っている。

図示できる出土遺物は17点である。第232図1050は鋤先状の口縁部で、上面に勾玉状と円形の浮文が列をなして付され、外面には連続「ハ」字状の押圧文を廻らせる小川原式土器壺である。1051は口縁部外面に一条の櫛描波状文を描く安国寺式土器壺、1052は平底をなす壺の底部、1053は外反しながら開く壺の口縁部、1054と1055は一条の刻目突帯が廻る下城式土器甕、1056と1057は平底の甕底部、1058は小さな円形の粘土塊の上面を窪ませただけのミニチュア土器、1059は内外面にベンガラを塗布した鉢、1060は裾広がり円柱状をした高坏の脚部で、内面にはしぼり痕、外面にはミガキが施されている。1061は長楕円形をしたクロム白雲母製の垂飾品、1062は粘板岩製の磨製石鏃、1063と1064は砥石で、1063は砂岩、1064は粘板岩である。1065は安山岩製の敲石(磨石)、1066は角閃石安山岩製の台石である。

出土土器は中期後葉から末のものが多いが、この竪穴建物の時期は、1051や1060から後期中葉以降と考えられる。

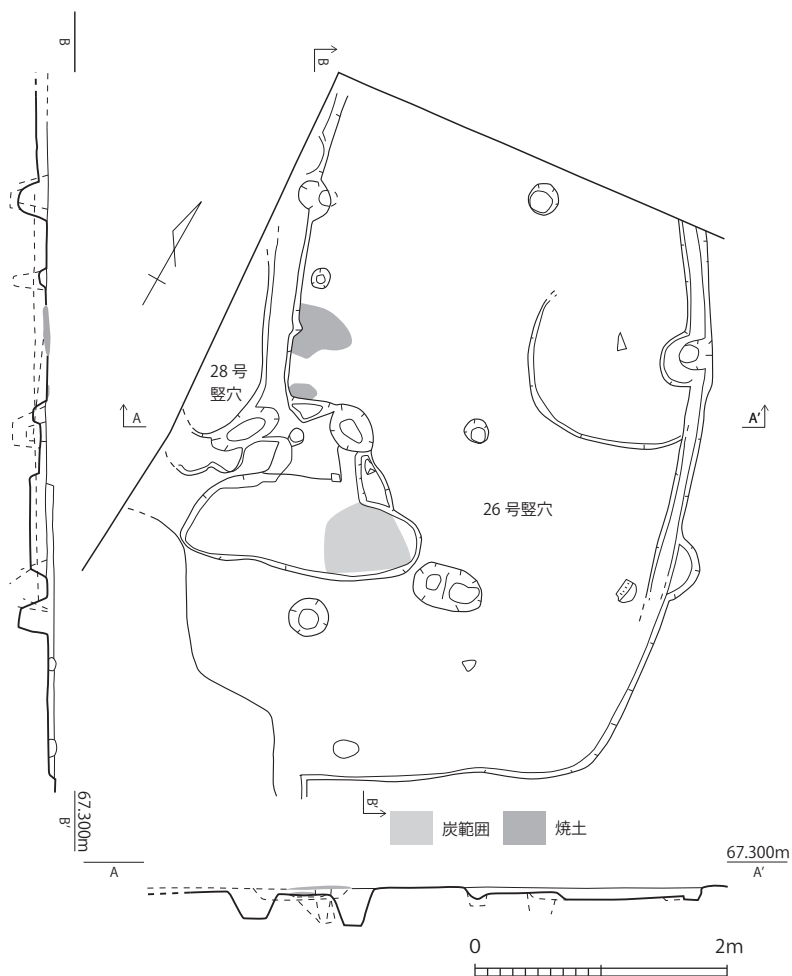


第232図 7次25号竖穴建物出土遺物

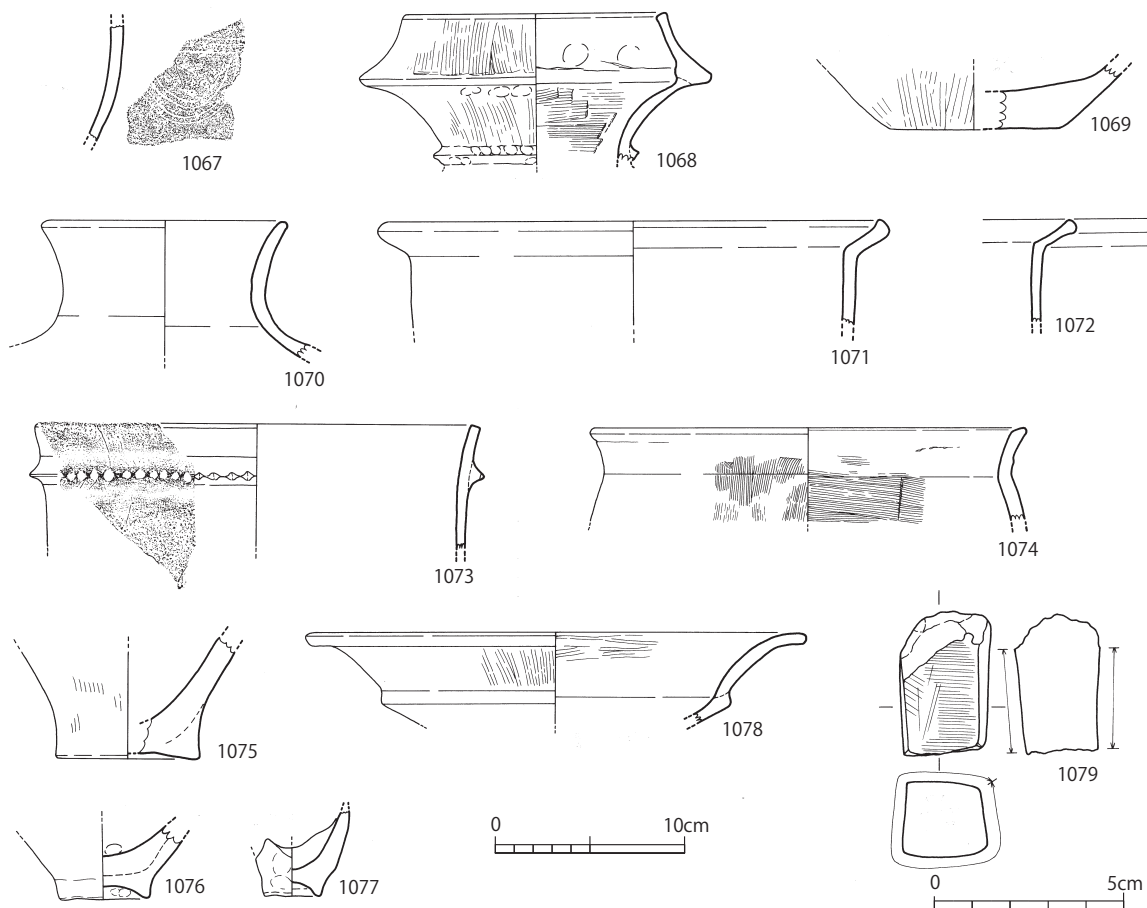
23) 26号竖穴建物 (第233図)

調査区北西角部で確認された竖穴建物で、28号竖穴建物に切られている。また、北側は調査区外に延びる。残存する深さは0.05mである。東側壁際には幅0.15m、深さ0.03mほどの壁溝が延びる。床面には、ほぼ中央と考えられる位置に焼土を伴う炉があり、その南側には炭化物が堆積する1.85m×0.70m、深さ0.07mの土坑がある。さらに、東側壁際には直径1.30m、深さ0.05mの円形の土坑がある。主柱穴は四カ所と思われるが、西側が不明である。

図示できる出土遺物は13点である。第234図1067は半裁竹管による平行線を描く下城式土器壺である。1068は頸部に一条の突帯を廻らせる安国寺式土器壺、1069は平底の壺底部、1070は外反しながら開く口縁部の壺、1071と1072は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州甕、1073は一条の刻目突帯が廻る下城式土器甕、1074は



第233図 7次26、28号竖穴建物



第234図 7次26号竖穴建物出土遺物

「く」字形に折れ開く甕、1075 から1077 は甕の底部で、1076 と1077 は上げ底状を呈す。1078 は坏部上半が大きく外反しながら開く高坏である。1079 は泥岩製の砥石である。

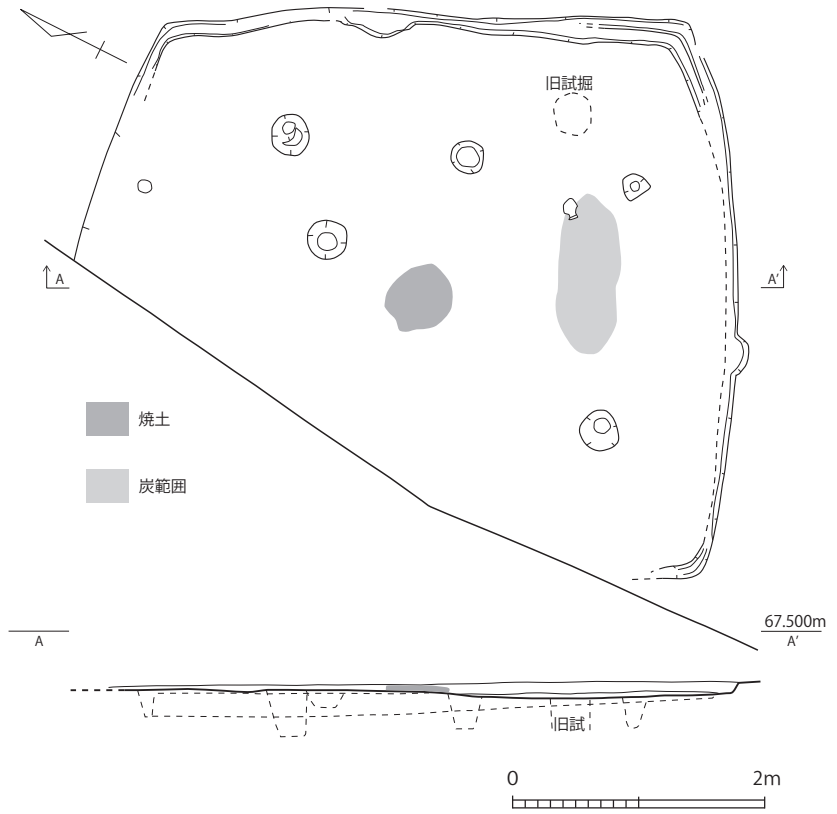
この堅穴建物の時期は、Ⅶ期（後期中葉）と考えられる。

24) 27号堅穴建物（第235図）

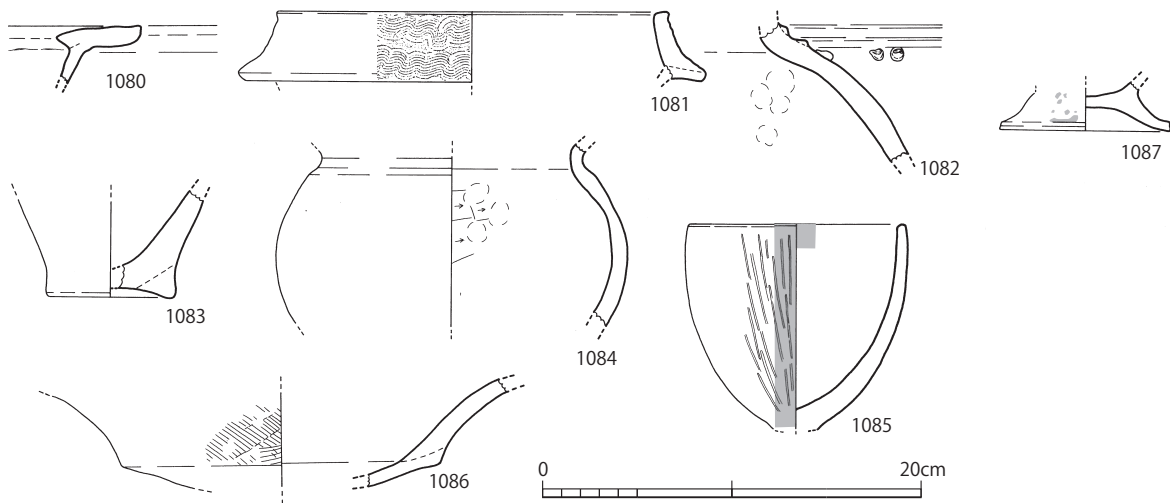
調査区北西部で検出された堅穴建物で、三分の一ほどは調査区外に延びる。南北は約5.20m、東西は4.43mのやや長方形を呈し、残存する深さは0.10mほどである。南側と東側の壁際には、幅0.13m、深さ数cmの壁溝が延びる。ほぼ中央に焼土を伴う炉があり、その南側には炭化物が堆積した1.26m×0.48mの浅い土坑がある。柱穴は五カ所で確認されているが、支柱穴は不明である。

図示できる出土遺物は17点である。第236図1080は鋤先状をなす口縁部の壺、1081は口縁部上半に櫛描波状文を描く安国寺式土器壺、1082は頸部に二条の突帯を廻らせ、その下位に勾玉状浮文を付す安国寺式土器壺、1083は平底の甕底部、1084は球形胴の壺、1085は小さな平底をなすと思われる鉢、1086は坏部上半が大きく外反しながら開く高坏、1087は鉢の脚台である。1088から1093は磨製石鏃で、1092と1093は未成品である。1088と1090が立石産輝緑凝灰岩、1089と1092は結晶片岩、1091は頁岩、1093はサヌカイトである。1094は姫島産黒曜石製の尖頭状石器、1095は小国産黒曜石製の石匙、1096は姫島産黒曜石製の剥片である。

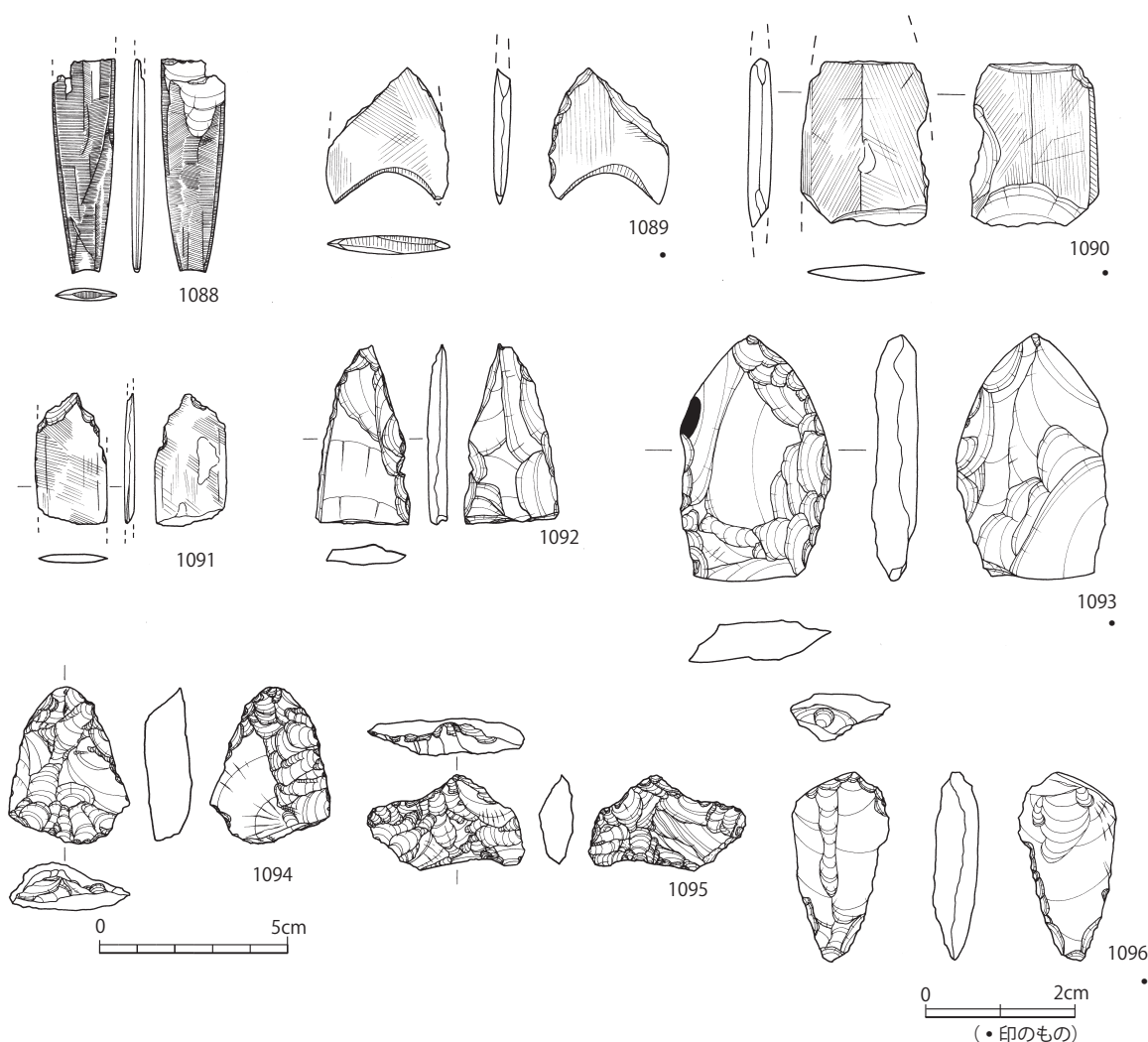
この堅穴建物の時期は、Ⅶ期（後期中葉）からⅧ期（後期後葉）と考えられる。



第235図 7次27号堅穴建物



第236図 7次27号堅穴建物出土遺物①



第237図 7次27号竪穴建物出土遺物②

25) 28号竪穴建物(第233図)

調査区の北西角部で検出された竪穴建物である。26号竪穴建物と切り合い関係を有するが、先後関係は不明である。大部分が調査区外に延びるため、規模、形状とも不明であるが、直線的に伸びる壁溝が確認できるので、方形基調の建物と考えられる。

出土遺物はなく、時期の比定はできない。

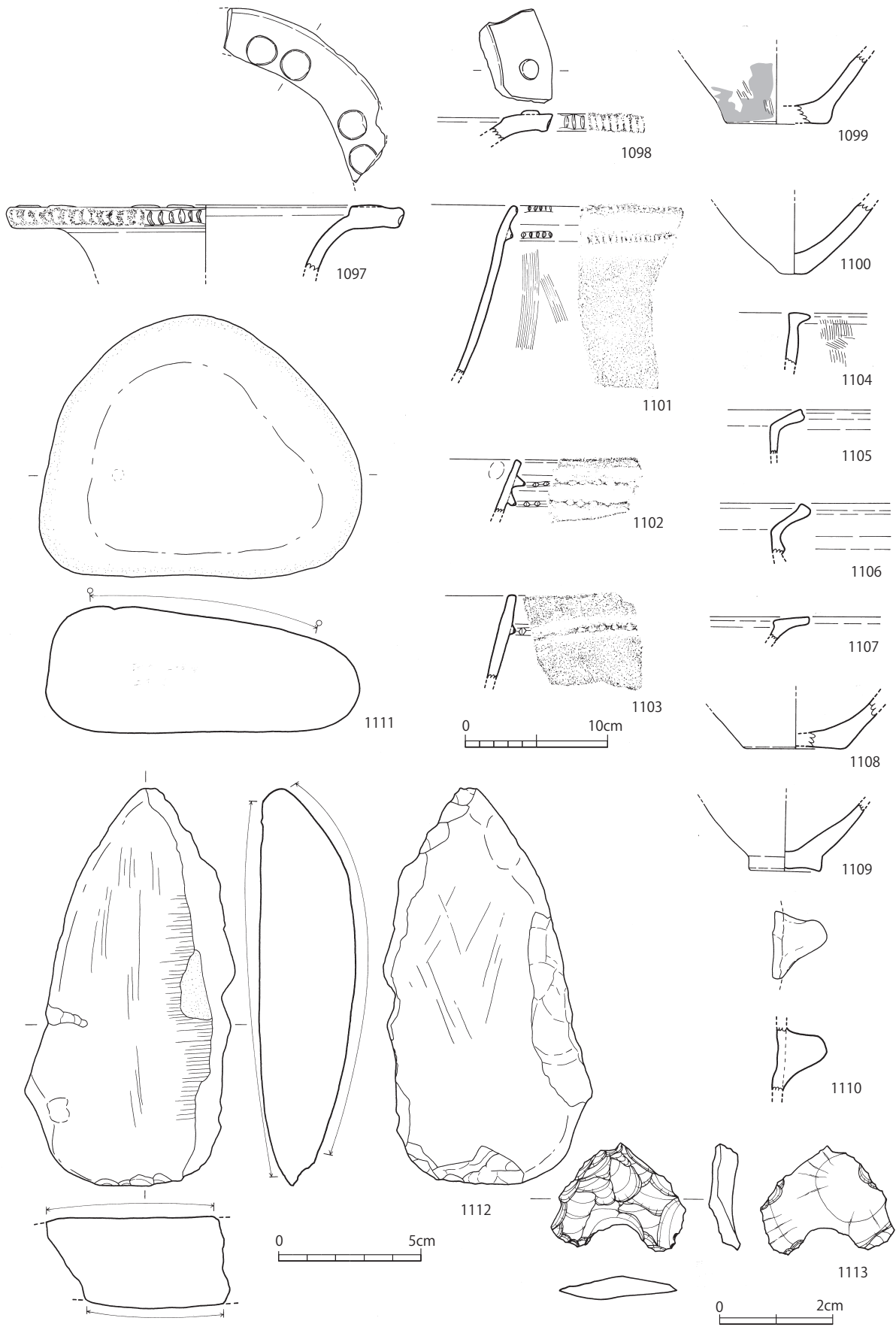
26) 29号竪穴建物(第239図)

調査区西端の中央で検出された竪穴建物で、9号、10号、30号竪穴建物に切られ、60号土坑を切っている。

西側は調査区外に延び、全形や規模は不明である。床面には二カ所焼土が堆積していた。ピットも複数あるが、支柱穴は不明である。

図示できる出土遺物は15点である。第238図1097と1098は鋤先状口縁の上面に円形浮文を貼り付け、外面に刺突文を持つ下城式土器壺と考えられる。1099は平底の壺底部、1100は小さな平底の甕底部、1101から1103は刻目突帯が廻る下城式土器甕、1105と1106は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系甕、1107は鋤先状をなす壺の口縁部か、1108は平底の壺底部、1109は平底の甕底部、1110は甑の取っ手である。1111は安山岩製の石皿、1112は安山岩製の磨石、1113は姫島産黒曜石製の打製石鏃である。

この竪穴建物の時期は、図示した資料の大半は中期のものであるが、1100の甕底部からⅦ期(後期中葉)と考えられる。竪穴プランが方形であることもそれを支持する。

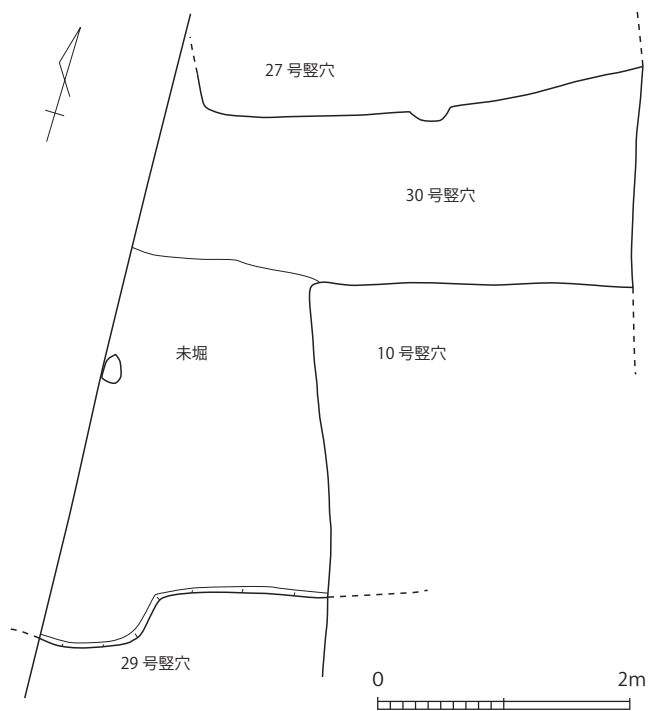


第238図 7次29号竖穴建物出土遺物

27) 30号竪穴建物 (第239図)

調査区西端の中央やや北寄りで検出された竪穴建物で、10号、27号竪穴建物を切られ、29号竪穴建物を切っている。さらに西側は調査区外に延びる。そのため、全形や規模は不明である。

出土遺物はなく、時期は不明である。



第239図 7次30号竪穴建物

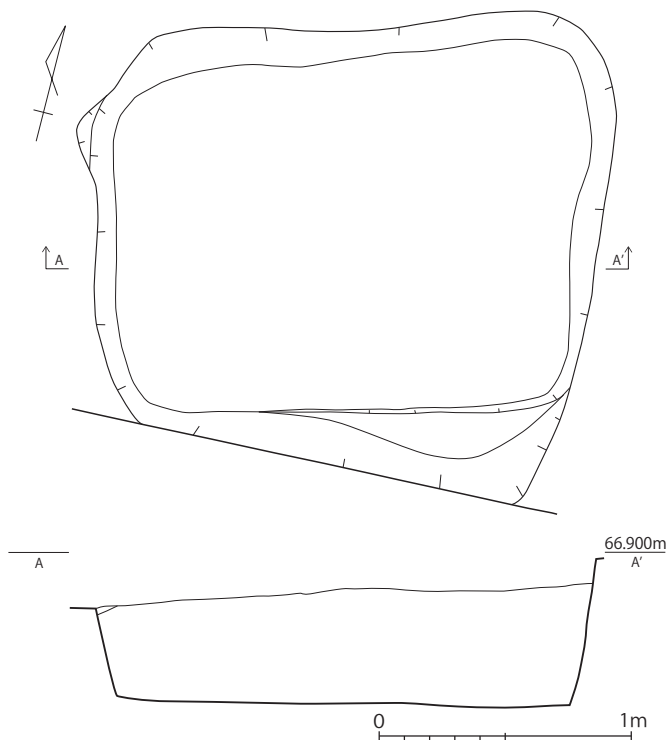
土坑

1) 1号土坑 (第240図)

調査区南東角部で検出された土坑で、南北1.50m、東西1.97m、深さ0.35mの長方形を呈する土坑である。

図示できる出土遺物は5点である。第241図1114から1116は刻目突帯が廻る下城式土器甕、1117と1118は平底の甕底部である。

この土坑の時期は、Ⅱ期(中期初頭～前葉)からⅢ期(中期中頃)と考えられる。

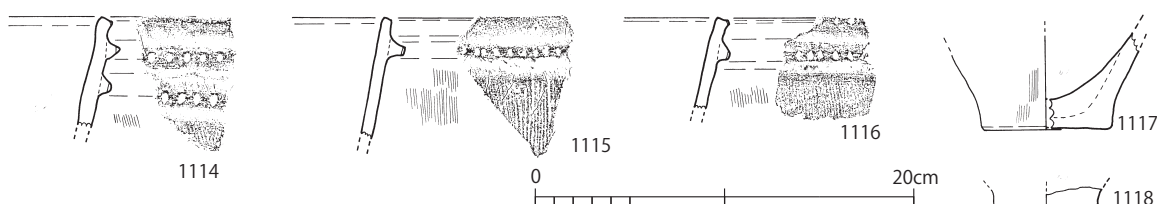


第240図 7次1号土坑

2) 2号土坑 (第242図)

調査区南東角部で付近検出された土坑で、南北2.78m、東西最大で1.35m、深さ0.33mの長方形を呈する土坑である。床面中央やや北寄りには直径0.7mほどの不整形形の窪みがある。堆積土の中位からは炭化した種子(豆類)が多量に出土している。

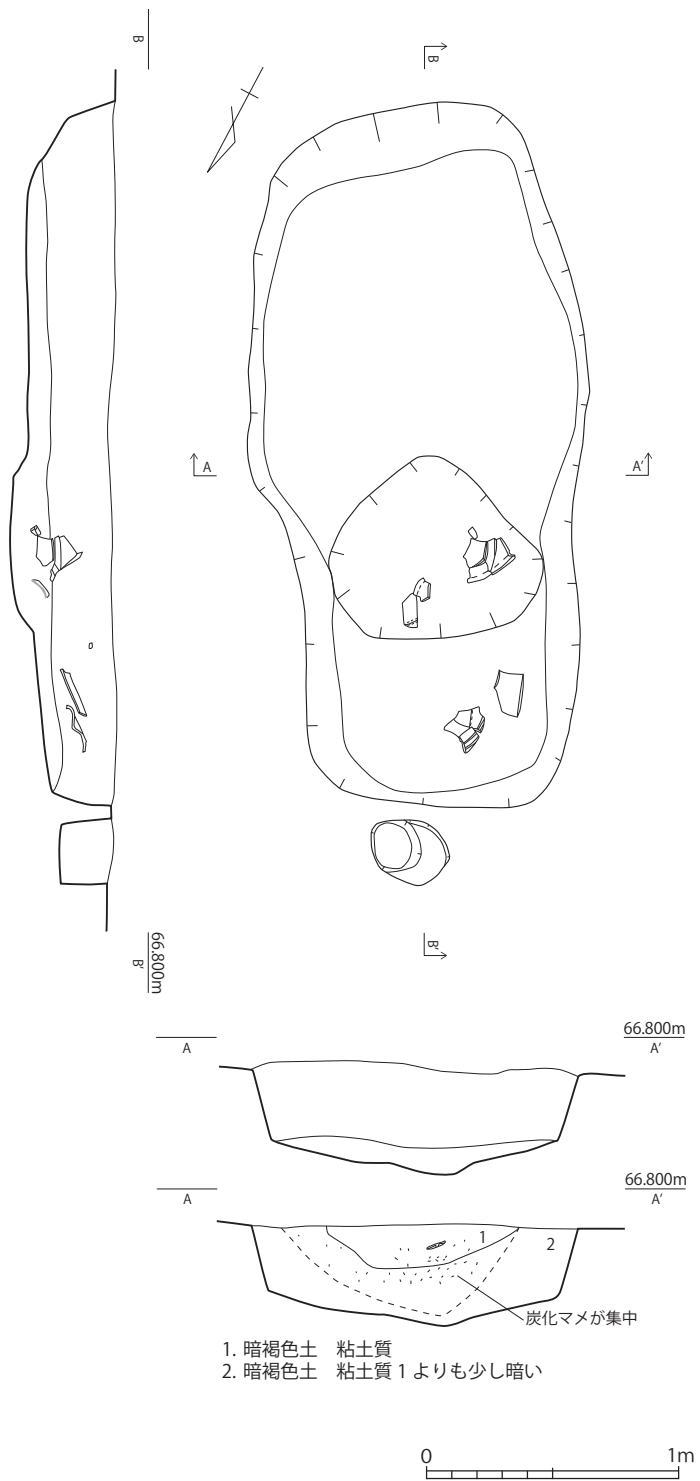
図示できる出土遺物は21点である。第243図1119は大きく開く広口壺で、外面はよく磨かれている。1120は頸部に三条の断面が薄い台形の突帯を巡らす壺、1121は内



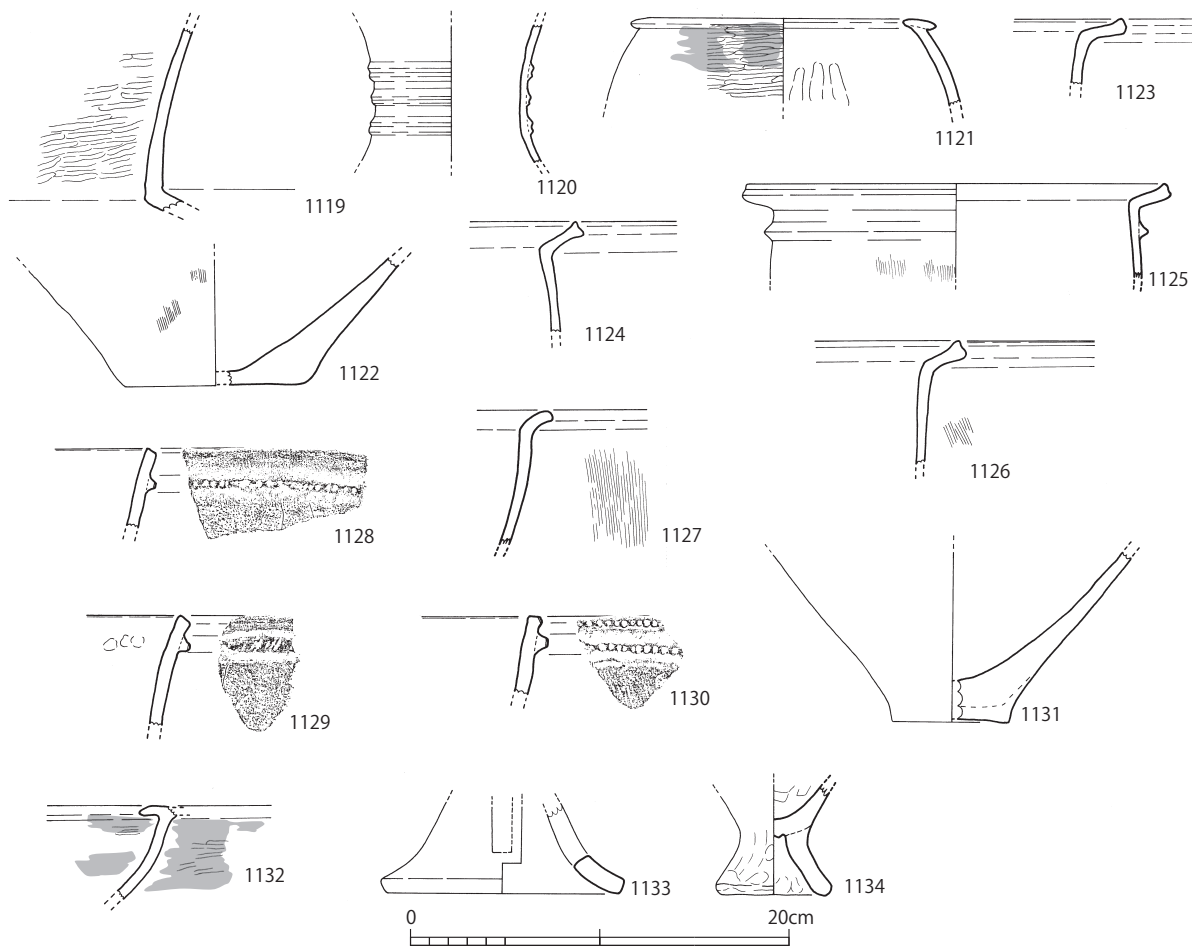
第241図 7次1号土坑出土遺物

湾しながら立ち上がる体部に、小さく折れ曲がる口縁部がつく壺、1122 は平底の壺底部、1123 から 1126 は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系、1127 は「く」字状に折れ開く甕、1128 から 1130 は刻目突帯が廻る下城式土器甕、1131 は平底の甕底部、1132 は内外面にベンガラを塗布する高坏で、口縁部は鋤先状をなし、坏部は半円形を呈する。1133 も高坏で、縦長の長方形透かしを持つ。1134 は指頭圧痕を残す脚台で、鉢のものであろう。

この土坑の時期はⅢ期（中期中頃）と考えられる。



第 242 図 7 次 2 号土坑



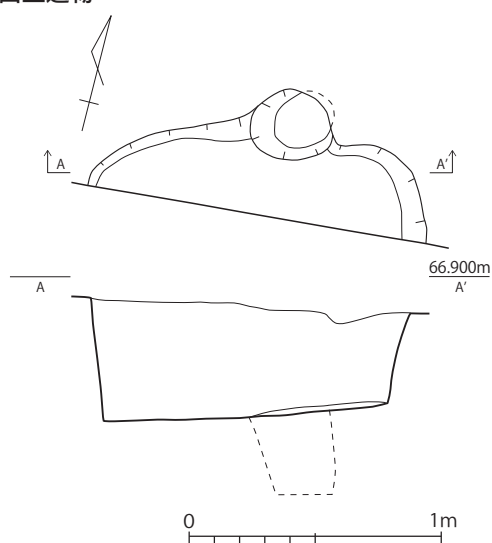
第243図 7次2号土坑出土遺物

3) 3号土坑 (第244図)

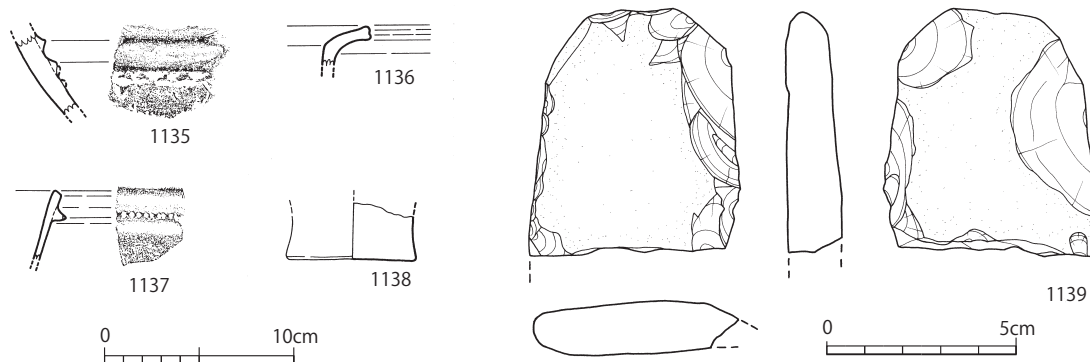
調査区の南壁東寄りで検出された土坑である。大部分は調査区外に延びる。規模は東西が1.30mで、深さは0.48mである。

図示できる出土遺物は5点である。第245図1135は外面にベンガラを塗布する安国寺式土器壺で、二条の突帯を廻らせ、その下位に勾玉状の浮文(下側半分はすべて欠損)を付す。1136は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系甕、1137は一条の刻目突帯が廻る下城式土器甕、1138は平底の甕底部である。1139は安山岩製の扁平打製石斧である。

この土坑の時期は、1135の存在から後期に下ると考えられる。



第244図 7次3号土坑



第245図 7次3号土坑出土遺物

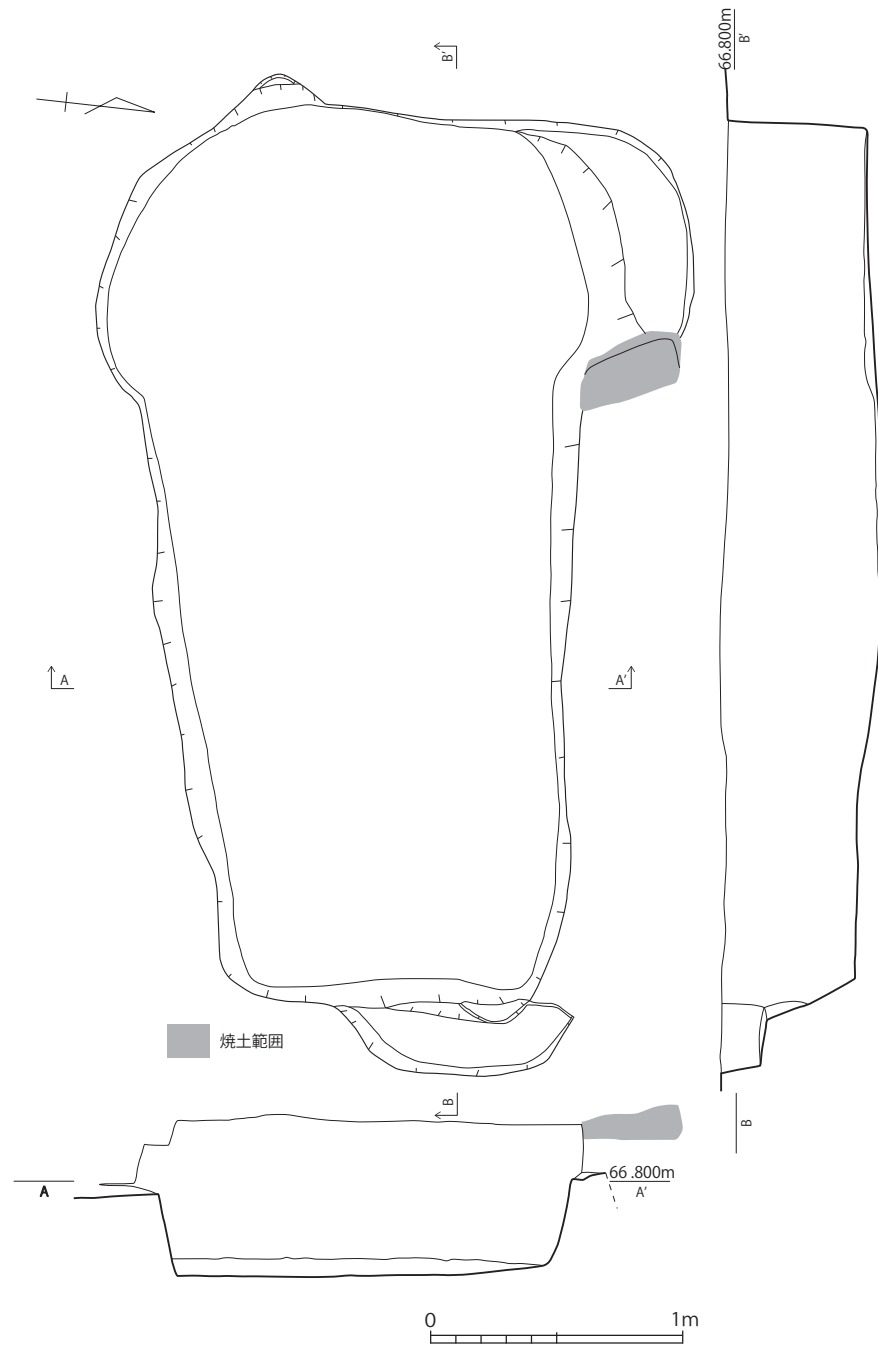
4) 4号土坑 (第246図)

調査区南東角部付近で検出された、南北1.35m～1.72m、東西3.55m、深さ0.60mの大型の長方形を呈する土坑である。西側はやや南北に拡大するように広がる。

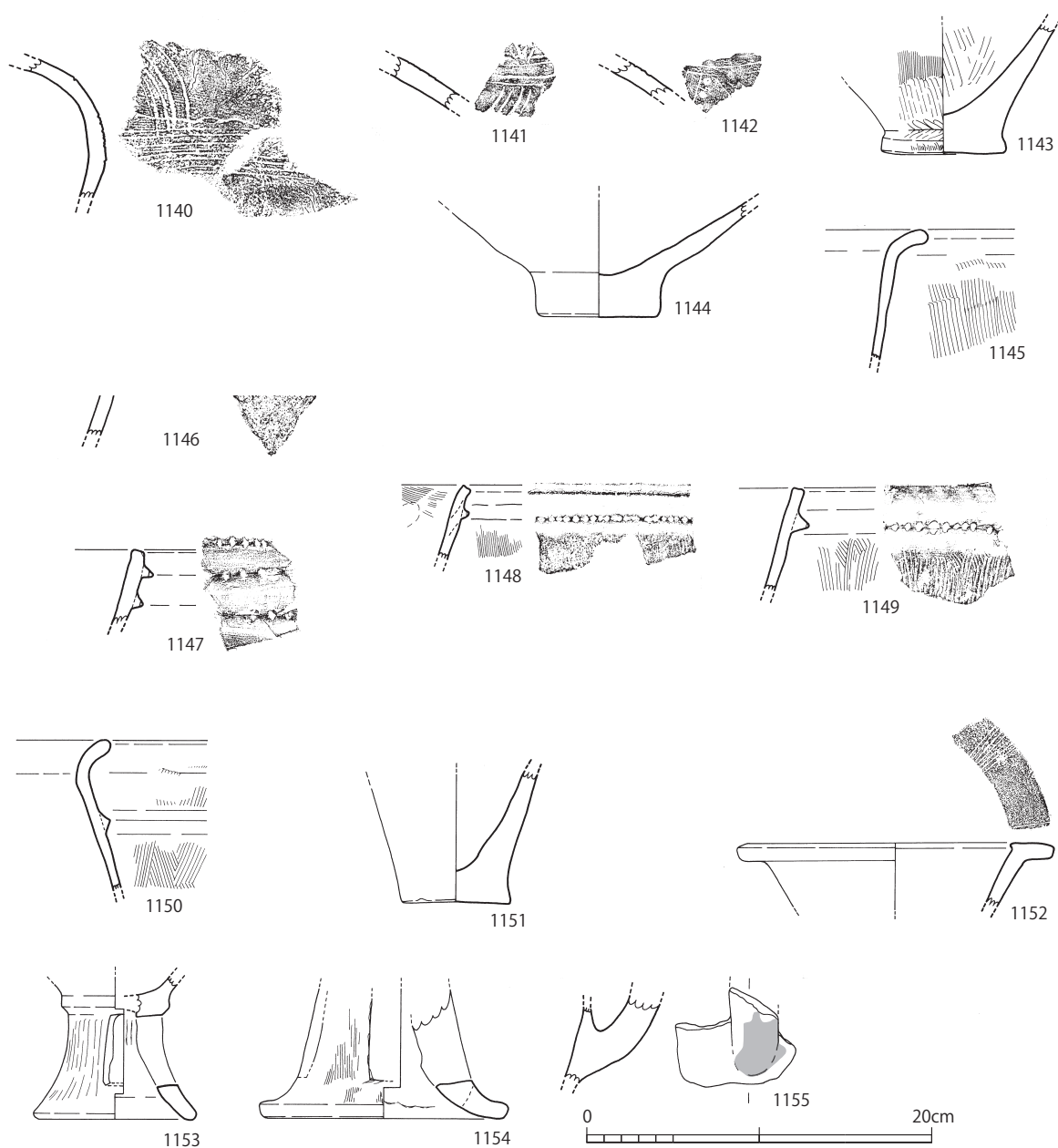
図示できる第247図出土遺物は24点である。1140から1142は半裁竹管による直線文や重弧文を描く下城式土器壺、1143と1144は平底の壺底部である。1145は口縁端部をわずかに肥厚させる甕、1146から1149は刻目突帯が廻る下城式土器甕である。1150は頸部下に一条の断面三角形の突帯を廻らせる壺で、口縁部は短く外反して開く。1151は平底の甕底部、1152は口縁部が逆「L」字形に折れる高坏で、上面に7本単位のヘラ描き直線文を施す。1153と1154は縦長の長方形透かしを持つ高坏の脚部、1155はコップ形土器の把手であろう。

第248図1156は泥岩製の抉入柱状片刃石斧、1157は結晶片岩製の磨製石鏃未成品、1158は砂岩製の磨石（敲石）、1159は凝灰岩製の石皿である。

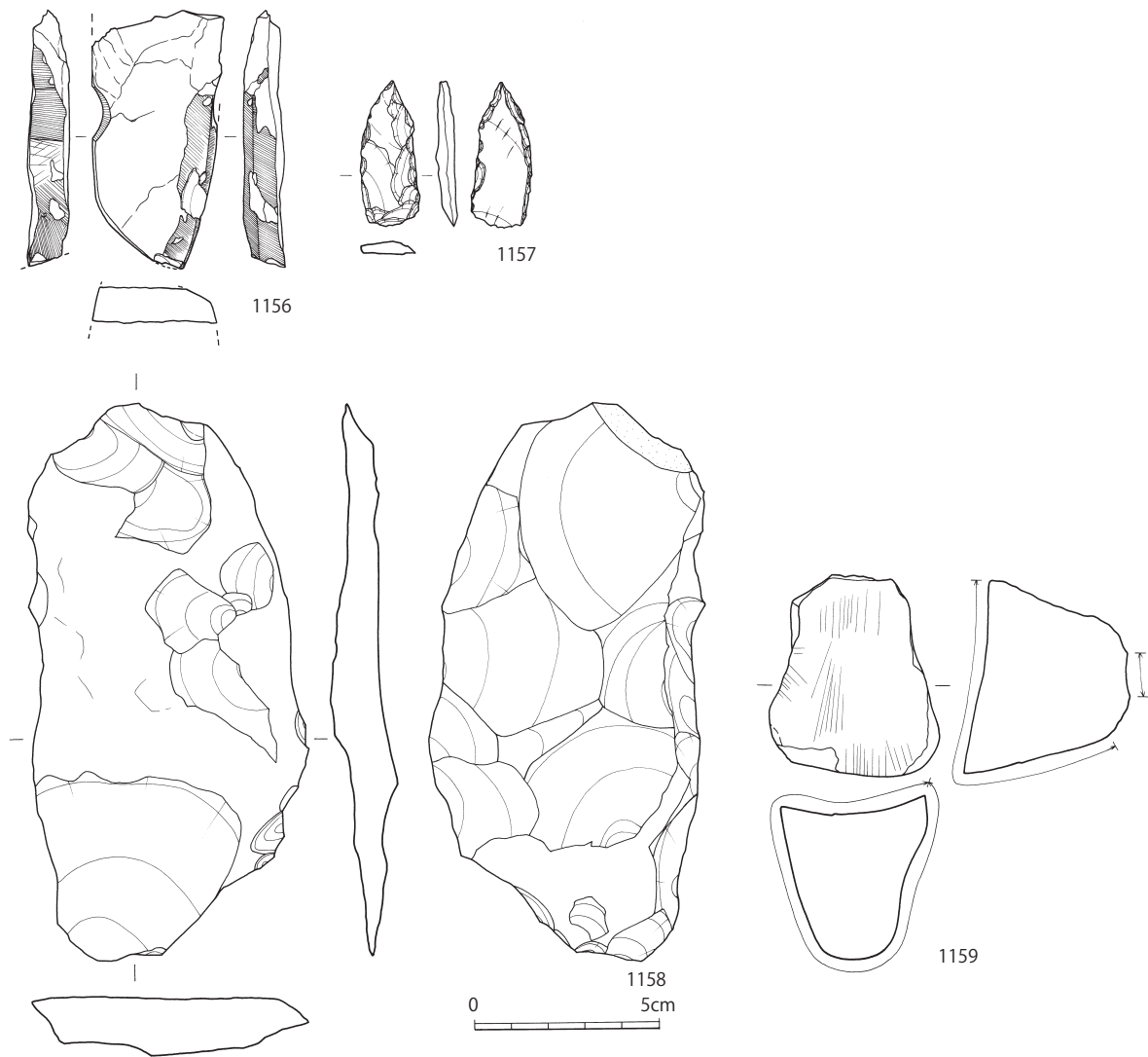
この土坑の時期は、下城式土器甕の口縁部形状などからⅡ期（中期初頭～前葉）と考えられる。



第246図 7次4号土坑



第 247 图 7次4号土坑出土遺物①



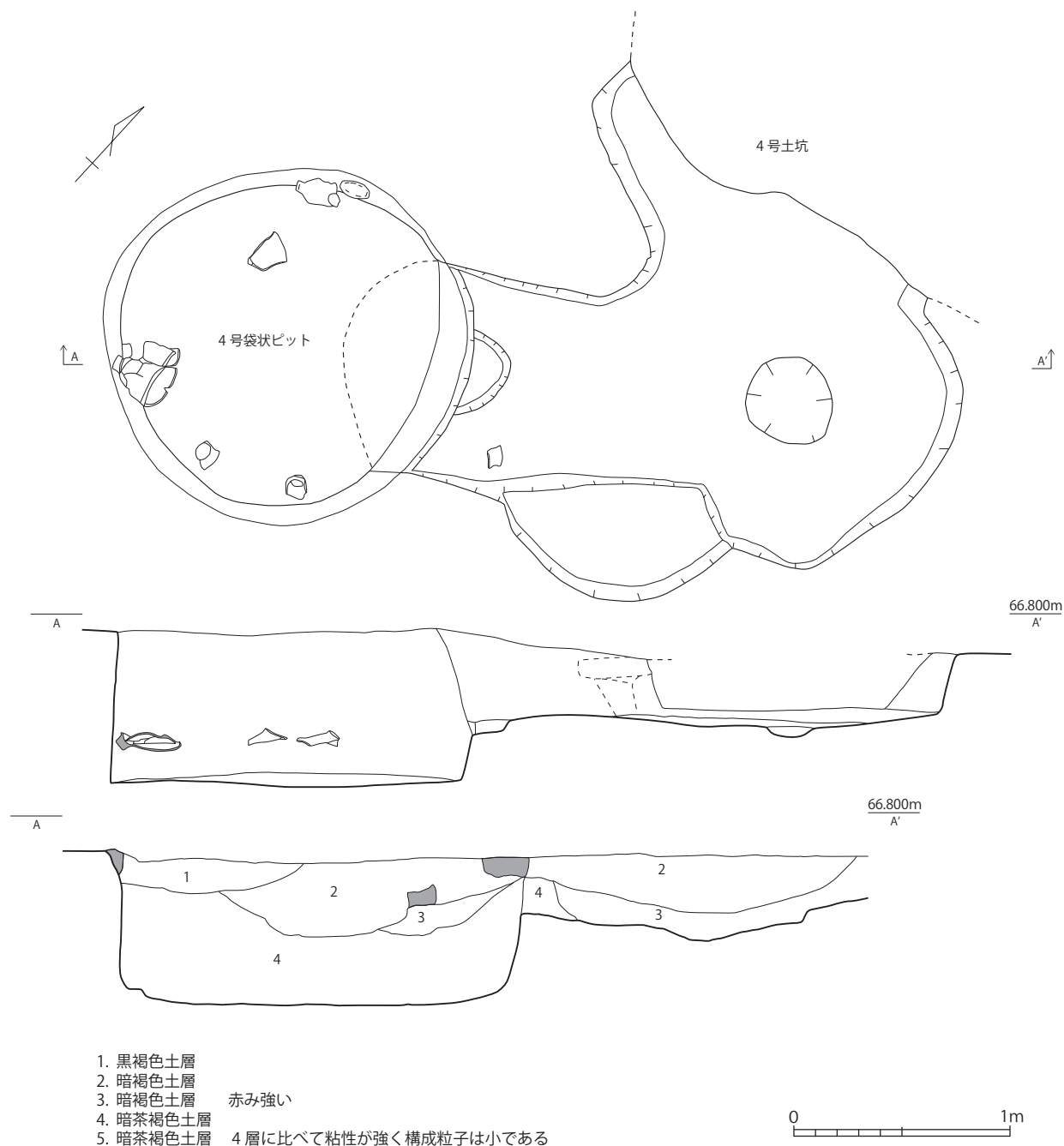
第 248 図 7 次 4 号土坑出土遺物②

63) 4号袋状ピット (第 249 図)

調査区南端中央付近で検出された土坑である。上端で 1.45m、下端で 1.63m の円形を呈する、断面袋状の土坑である。残存する深さは 0.65m である。

図示できる出土遺物は 4 点である。第 250 図 1160 は完形に復元できる下城式土器甕で、口縁部は内湾し、底部はあまり厚くない平底である。1161 は平底の甕底部である。1162 は砂岩製の敲石（磨石）、1163 は凝灰岩製の石皿である。

この土坑の時期はⅡ期（中期初頭～前葉）と考えられる。

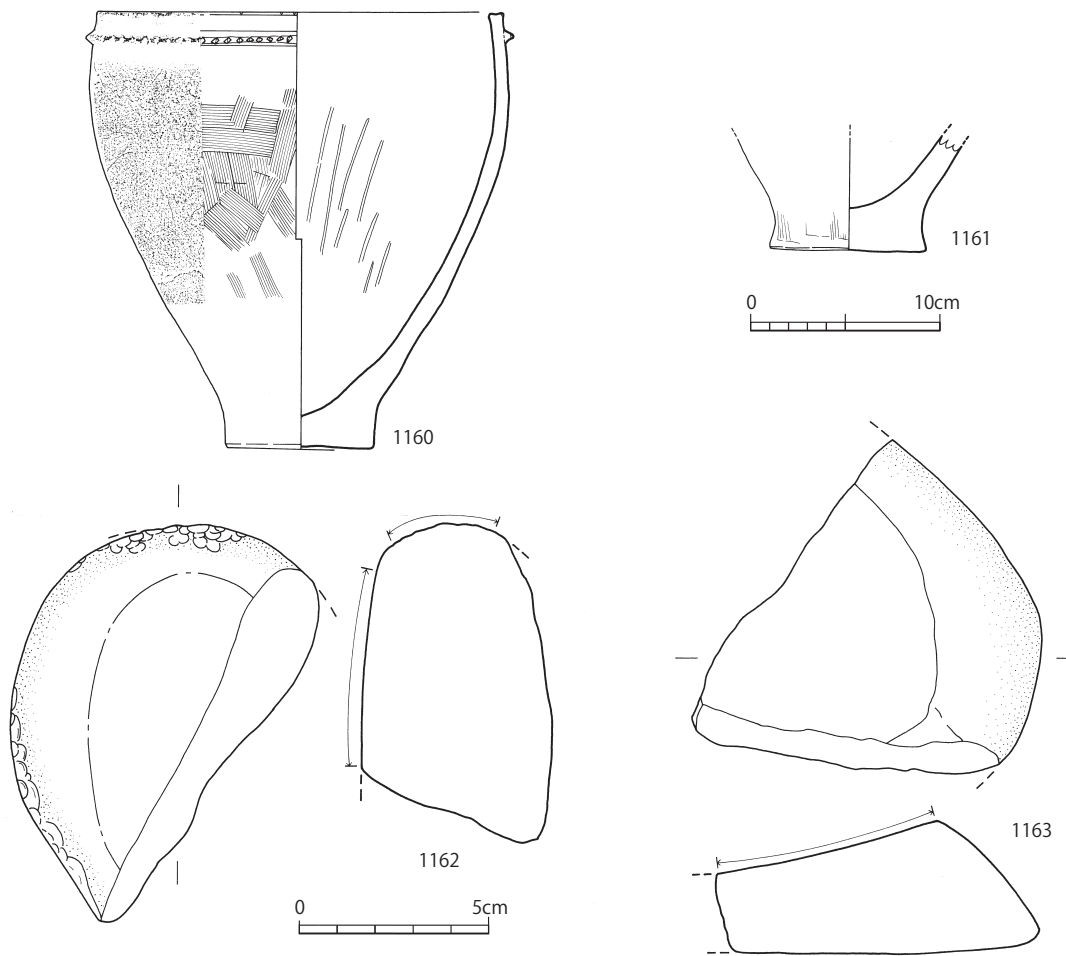


第 249 図 7次4号袋状ピット

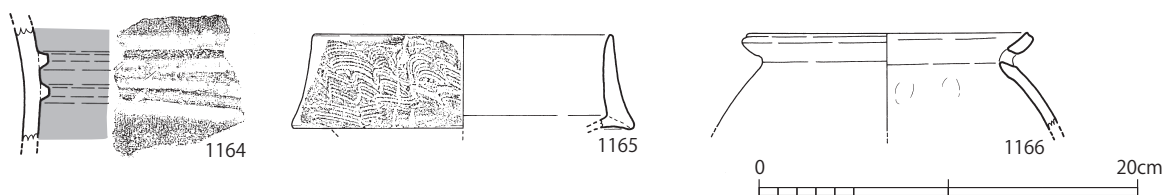
6) 5号土坑

「5号土坑」の記載のある一括遺物である。しかしながら、最終的に遺構と確認できなかったものであるが、一括性を優先して、ここでは「5号土坑」出土遺物として扱う。

図示できる出土遺物は3点である。第251図1164は外面にベンガラが塗布され、断面台形の突帯が二条廻る甕、1165は口縁部上半が大きく伸び、三条の櫛描波状文が描かれる安国寺式土器壺、1166は頸部に穿孔を持つ壺である。



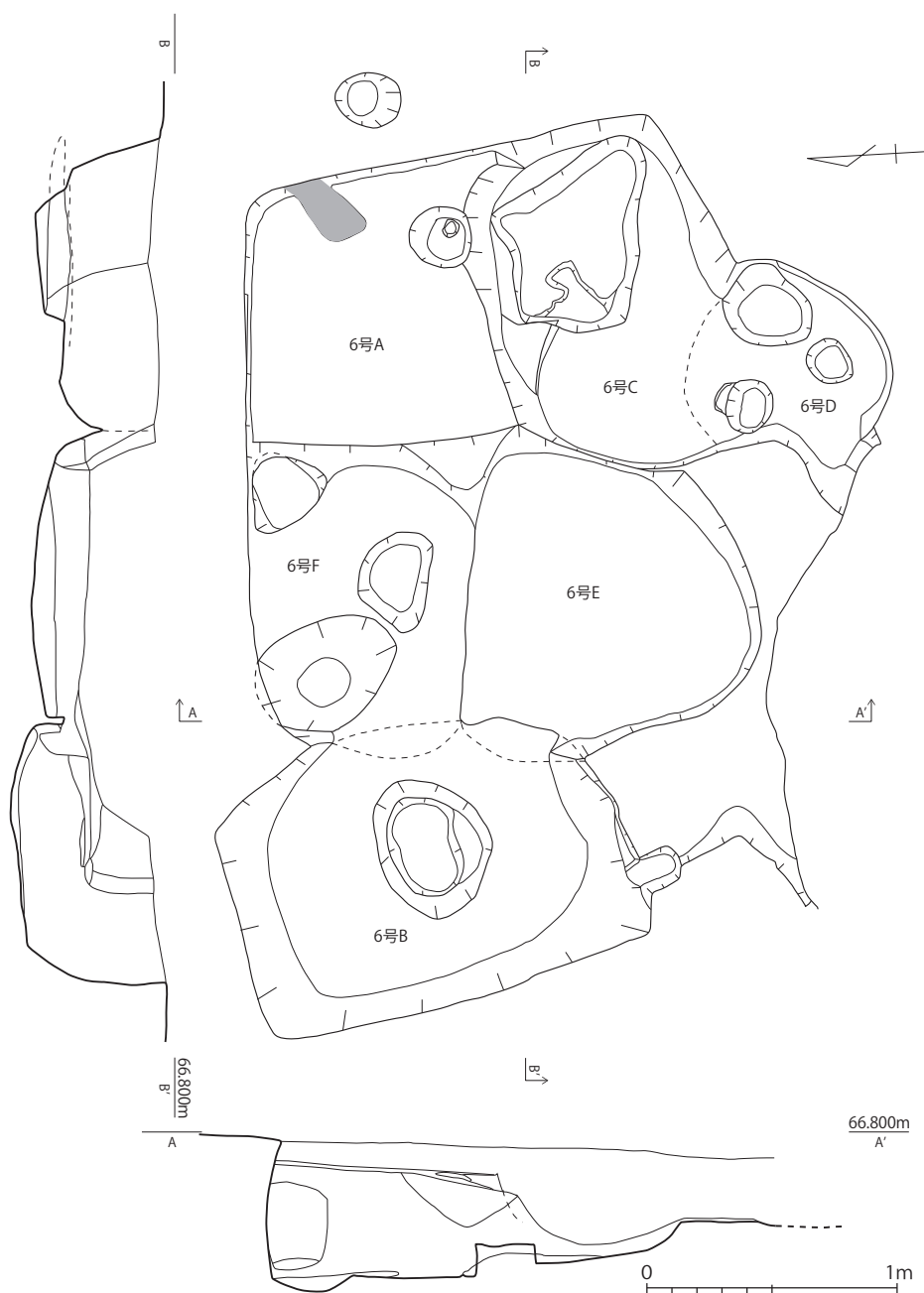
第250図 7次4号袋状ピット出土遺物



第251図 7次5号土坑出土遺物

7) 6号土坑 (第252図)

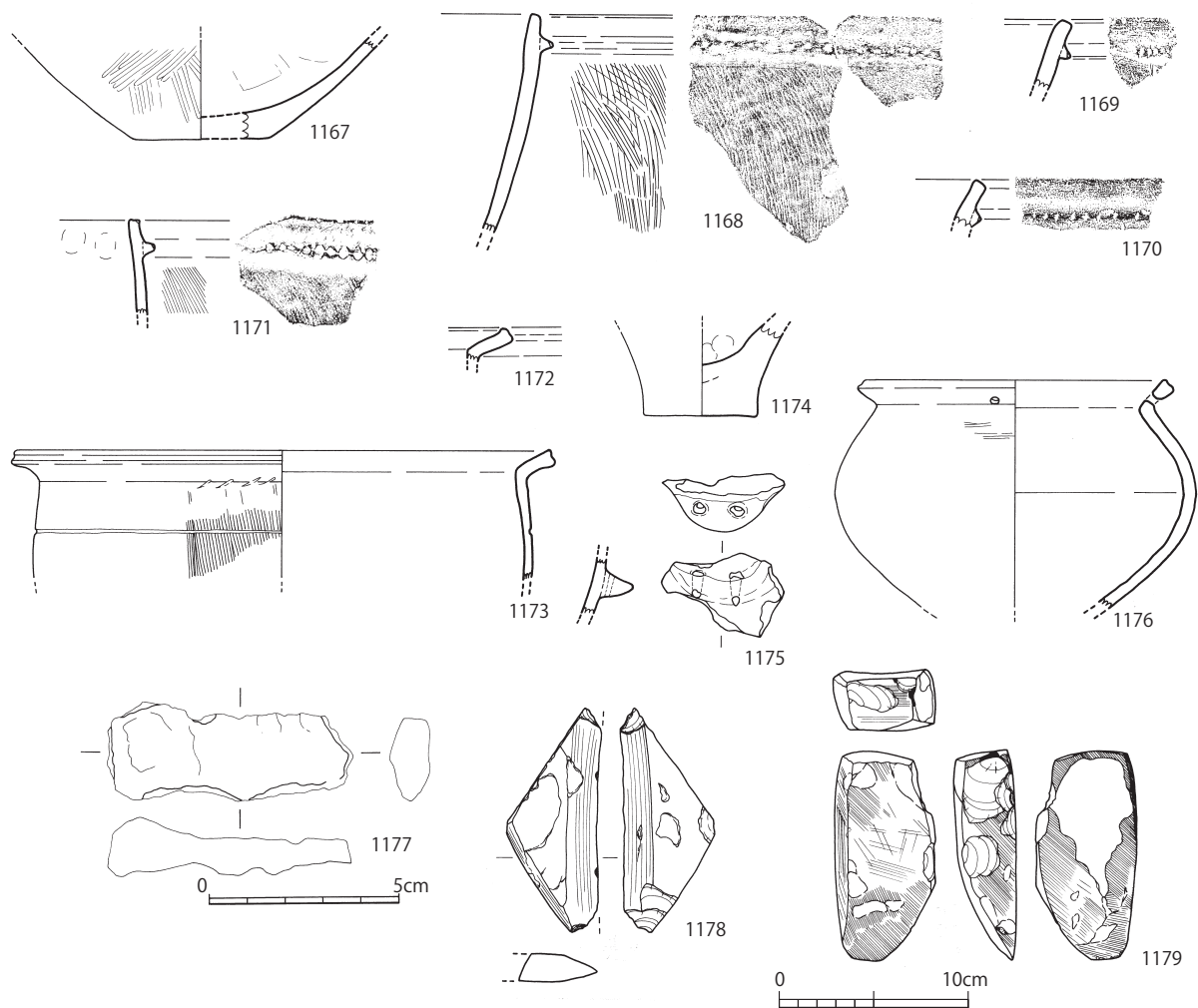
調査区南端近くで検出された土坑である。6基の土坑が切りあったものを、6号Aから6号Fとして説明する。6号Aは南北約2.0m、東西約2.4m、深さ約0.1mの土坑と考えられる。6号Bは南北1.59m、東西1.15mの長方形を呈する土坑で、残存する深さは0.55mである。6号Cは6号Aを切り、6号Dに切られている。正確な大きさは分からないが、概ね南北0.85m、東西1.20m、深さ0.53mほどの長方形を呈する土坑と思われる。6号Eは6号Aを切っており、6号Dや6号Fに接するが先後関係は不明である。大きさは想定で、南北1.0m、東西1.35m、深さ0.4mで、長方形を呈する。6号Fは、想定で南北0.75m、東西0.65mのやや長方形を呈し、深さは0.4mである。



第252図 7次6号土坑

図示できる出土遺物は13点である。第253図1167は平底の壺底部、1168から1171は一条の刻目突帯が廻る下城式土器甕、1172と1173は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系甕で、1173には頸部下に一条の沈線が廻る。1174は平底の甕底部、1175は二つの孔を穿った取っ手、1176は頸部に穿孔を持つ小型の壺である。1177は錆のため器種が不明な鉄器で、残存長6.5cm、幅2.6cmである。1178は砂岩製の石剣、1179は粘板岩製の磨製片刃石斧である。これらの内、6号Aからの出土は1168、1170、1171、1173、1174、1177、1179で、残りは6号B出土である。

この土坑の時期は6号AがⅡ期（中期初頭～前葉）、6号BがⅢ期（中期中頃）と考えられる。他の土坑の時期は不明である。



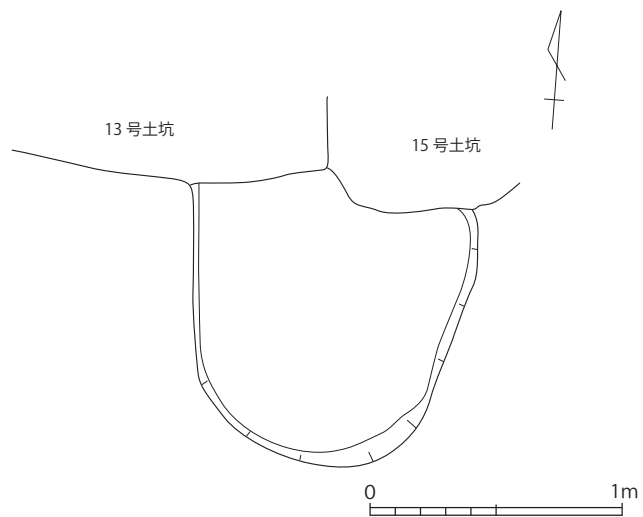
第253図 7次6号土坑出土遺物

8) 7号土坑 (第254図)

調査区南東部で確認された土坑である。13号、15号土坑に切られている。南北1.13m以上、東西1.13mで、深さは0.32mである。

図示できる出土遺物は4点である。第255図1180は「く」字に折れる甕で、胴部はあまり張らない。1181は一条の刻目突帯が廻る下城式土器甕、1182は平底の甕底部である。1183は凝灰岩製の砥石である。

この土坑の時期はⅡ期（中期初頭～前葉）からⅢ期（中期中頃）であろう。



第254図 7次7号土坑

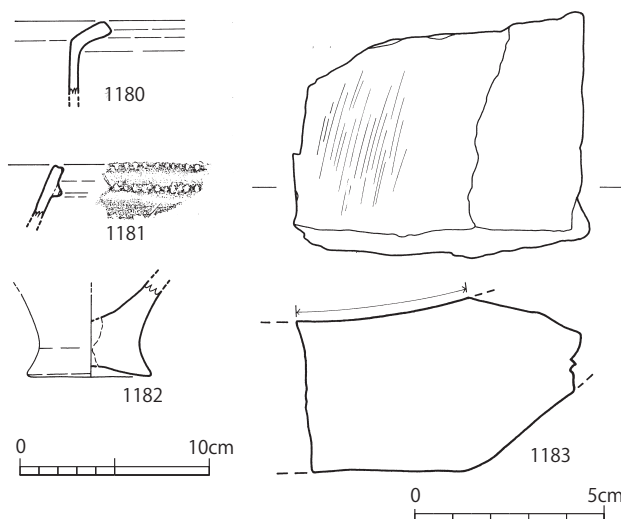
9) 8号土坑 (第256図)

調査区南側の中央付近で検出された土坑である。上端、下端とも2.50mのほぼ円形を呈し、深さは中央部付近で0.75mである。断面形状はほぼ垂直、あるいはやや内傾して立ち上がる袋状土坑である。遺物は検出面近くに浮いた状態で出土している。

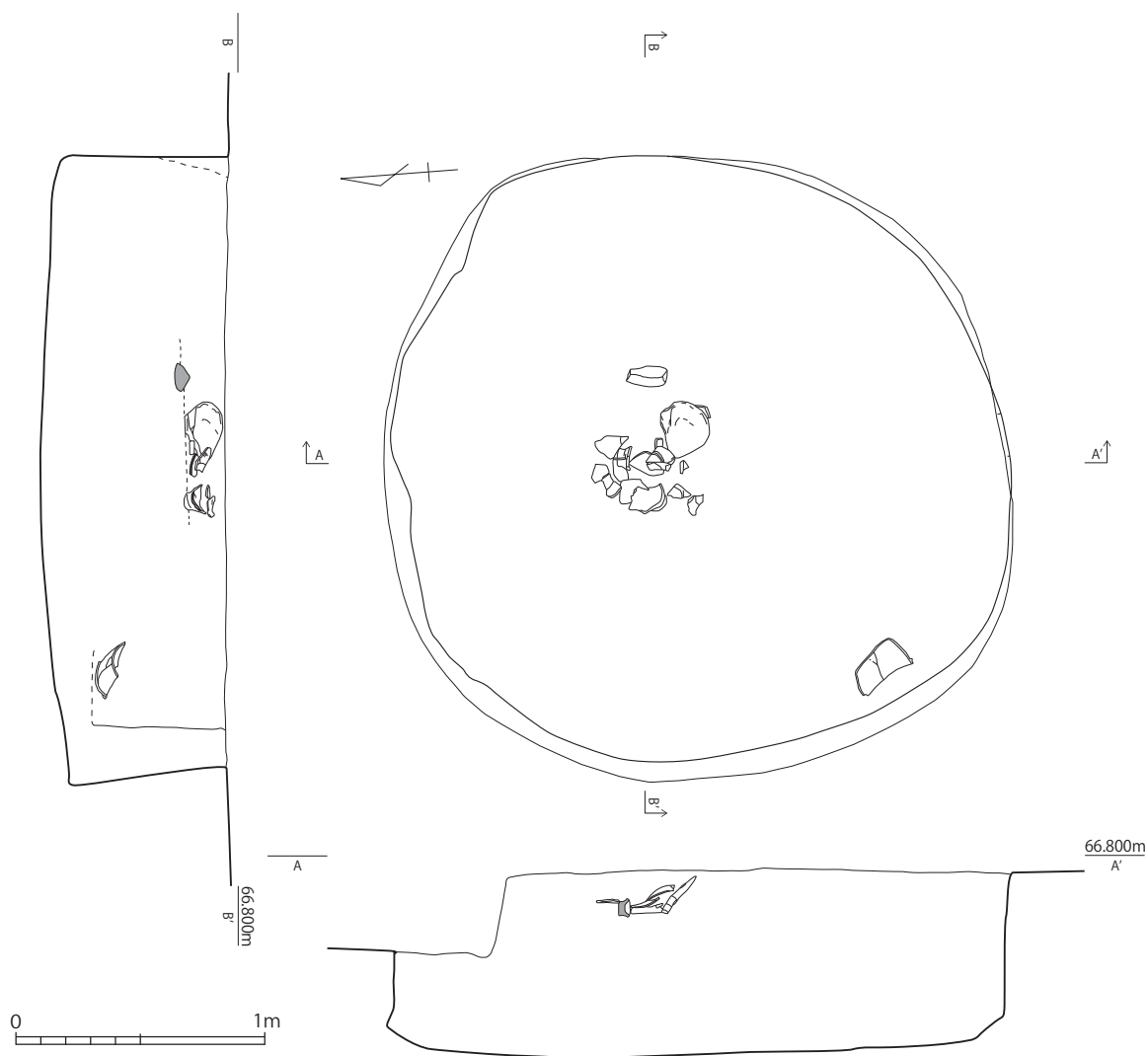
図示できる出土遺物は13点である。第257図1184は3本一単位の櫛状の工具によって直線文と重弧文を描くが、通常の下城式土器壺と違って、無頸壺の形態を持つ。1185は頸部に刻目突帯を廻らせる壺で、口縁部は直線的に開く。1186から1189は刻目突帯が廻る下城式土器甕、1190は尖底状の底部を持つ甕か。1191は結晶片岩製の磨製石鏃、1192は溶結凝灰岩製の石皿、

1193は緑泥片岩製の大型蛤刃石斧、1194は安山岩製の台石、1195は凝灰岩製の砥石、1196は緑泥片岩の石核である。

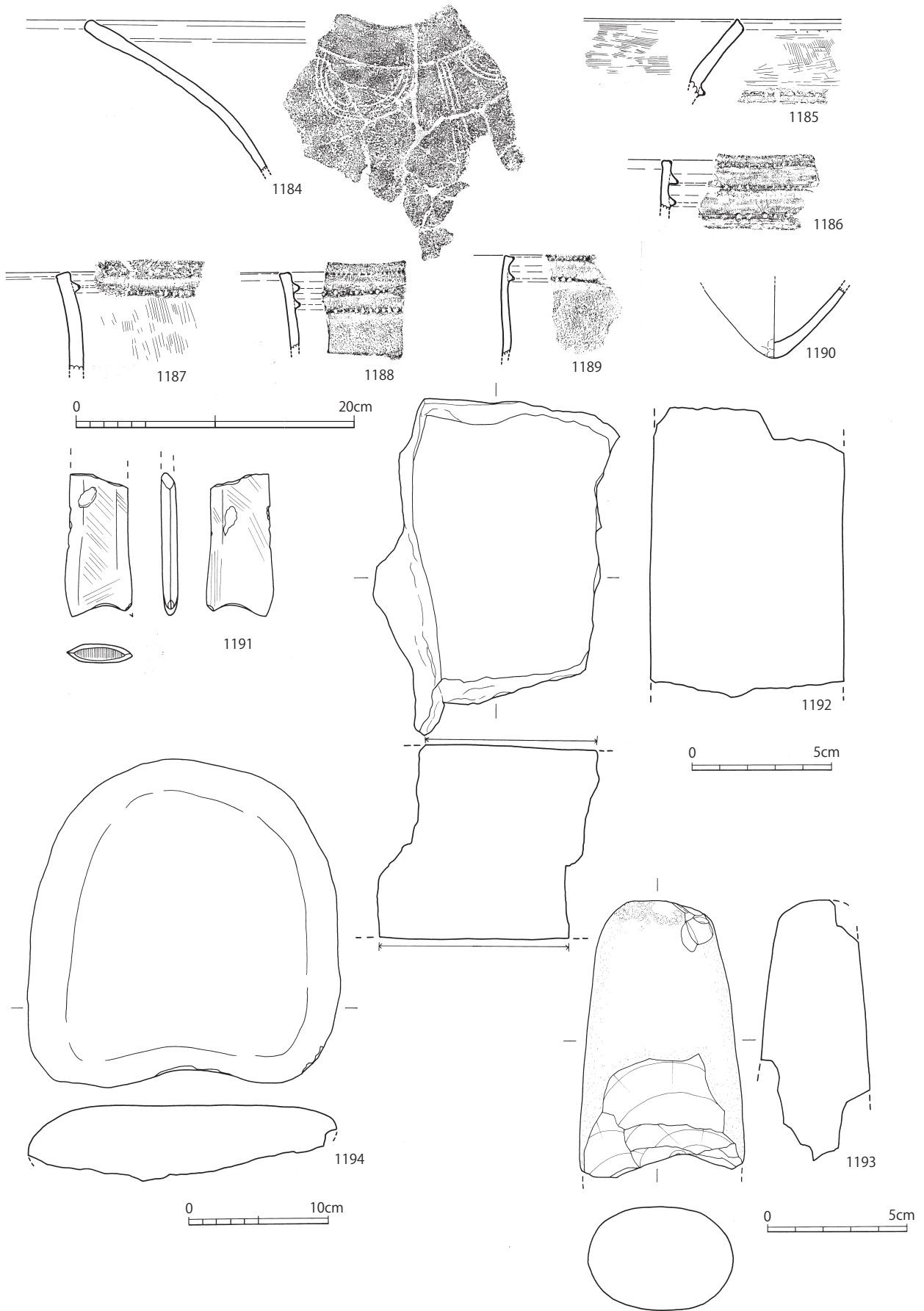
この土坑の時期は1190や1191の帰属時期が問題となるが、その他はI期（前期後葉～末）からII期（中期初頭）のセットと考えても問題がない。袋状土坑という形態から考えても後期に下るものではなく、1190などは混入と考えられる。



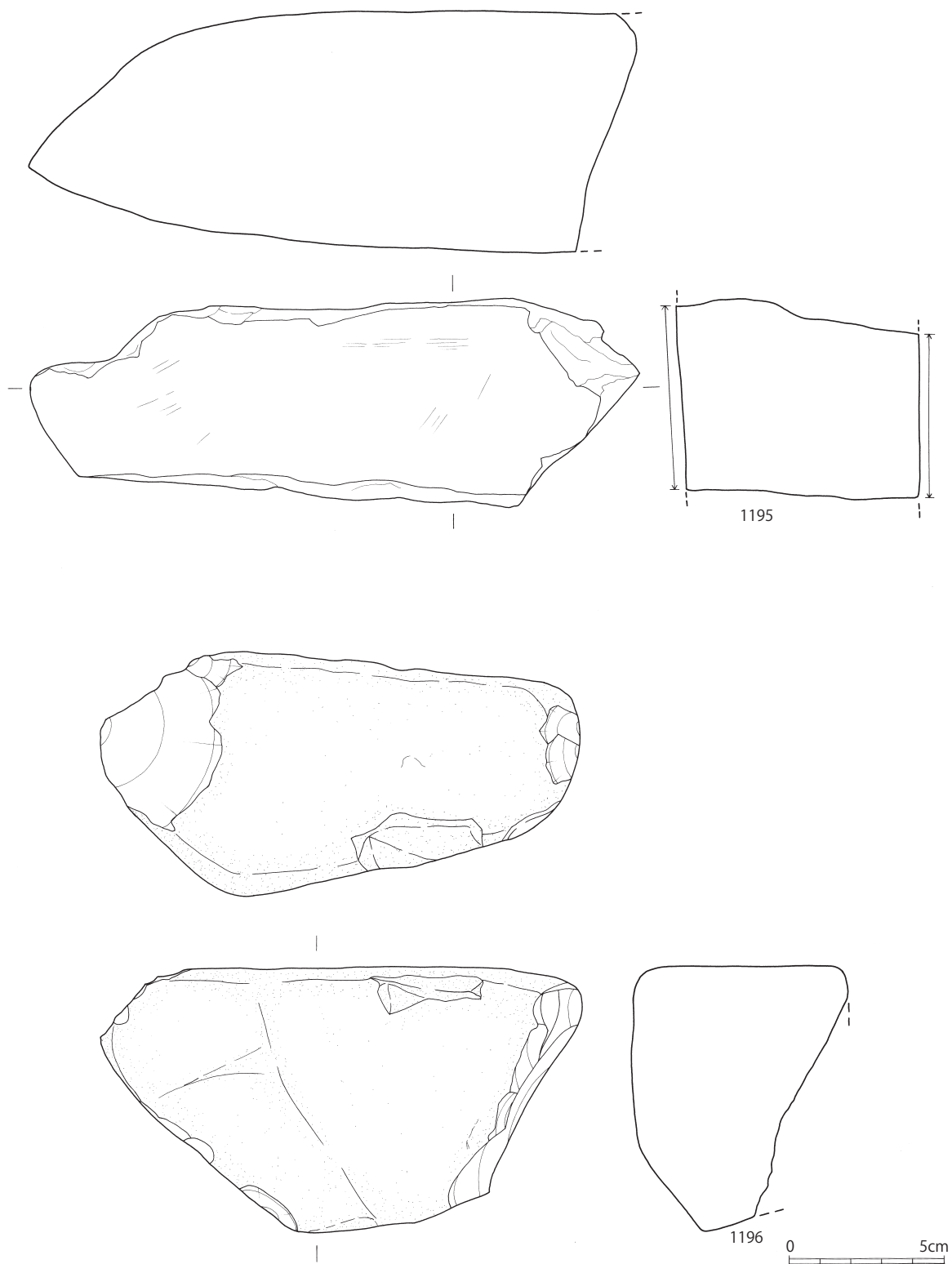
第255図 7次7号土坑出土遺物



第256図 7次8号土坑



第 257 図 7 次 8 号土坑出土遺物①



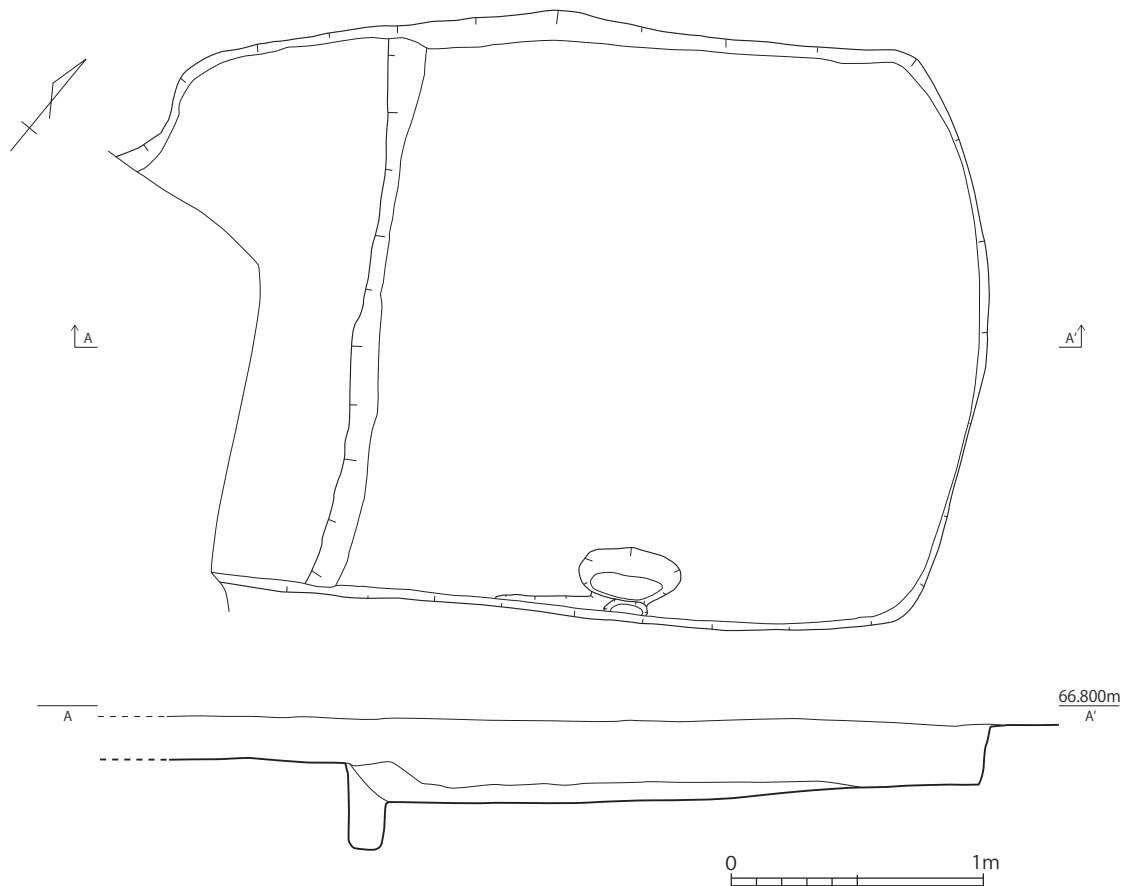
第 258 図 7 次 8 号土坑出土遺物②

10) 9号土坑 (第259図)

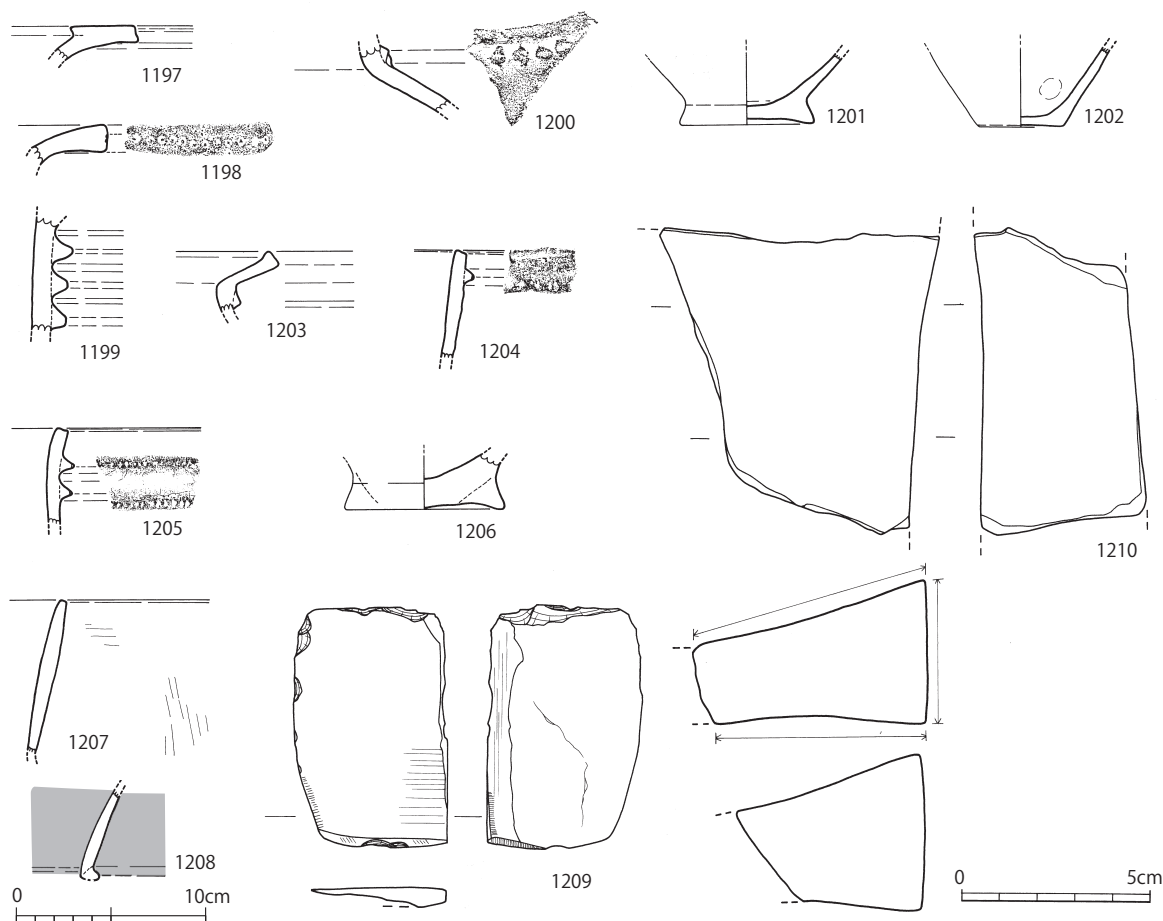
調査区南側で確認された土坑である。略南北方向は2.38m、略東西方向は3.20mで、残存する深さは0.32mである。床面は東側三分の一ほどが高くなっている。54号土坑を切り、1号竪穴建物に切られている。

図示できる出土遺物は14点である。第260図1197は鋤先状を呈す壺の口縁部、1198は小さな円形刺突文を口縁部外面に押捺する壺の口縁部、1199は太い三条の突帯を廻らせる壺、1200は頸部に一条の突帯を廻らせ、その下位に勾玉状浮文を付す壺、1201と1206は端部が大きく外側に張り出す壺の底部、1202は平底の壺底部である。1203は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系甕、1204と1205は刻目突帯が廻る下城式土器甕、1207は外面にベンガラが塗布される長頸壺か。1208はベンガラが塗布され、頸部に一条の突帯を廻らせる壺で、1207と同一個体かもしれない。1209は結晶片岩製の磨製石鏃、1210は砂岩製の砥石である。

この土坑の出土遺物は、I期のもの(1201、1206)からIV期(中期後葉～末)からV期(後期初頭)の可能性のあるもの(1200)までであるが、土坑の時期は当然新しい遺物の時期であるIV期からV期ということになる。



第259図 7次9号土坑



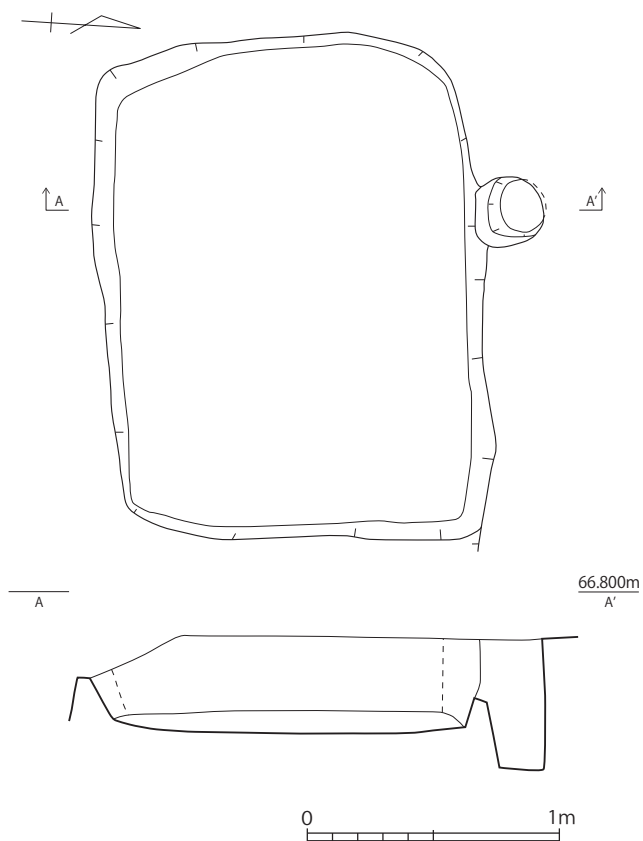
第260図 7次9号土坑出土遺物

12) 11号土坑 (第261図)

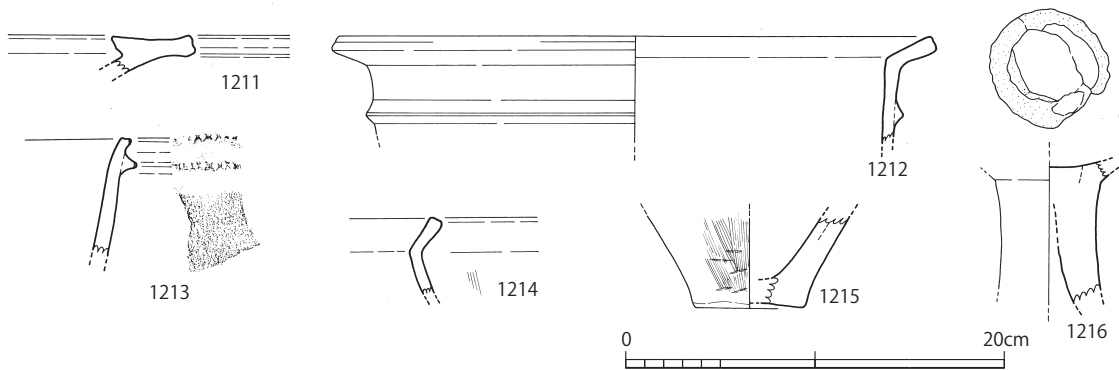
調査区南東部で検出された南北1.55m、東西2.00m、深さ0.38mの長方形を呈する土坑である。

図示できる出土遺物は6点である。第262図1211は鋤先状口縁の壺、1212は口縁端部をわずかに肥厚させ、頸部下に一条の突帯を廻らせる東北部九州系の甕である。1213は一条の刻目突帯文を廻らせる下城式土器甕、1214は「く」字に折れる甕、1215は平底の甕底部、1216は柱状の脚部の高坏である。

この土坑の時期は、大半の遺物が中期のものであるが、1214を見れば後期とすることが妥当であろう。



第261図 7次11号土坑

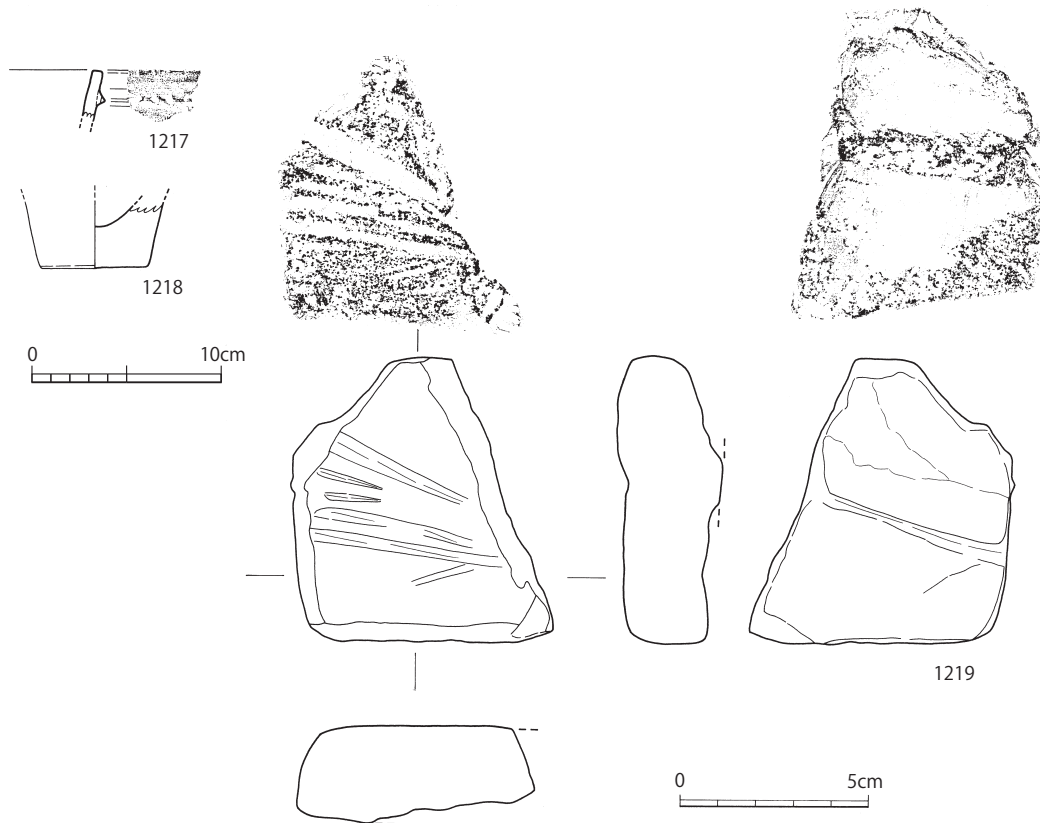


第262図 7次11号土坑出土遺物

13) 12号土坑

「12号土坑」の記載のある一括遺物である。しかしながら、最終的に遺構と確認できなかったものであるが、一括性を優先して、ここでは「12号土坑」出土遺物として扱う。

図示できる出土遺物は3点である。第263図1217は一条の刻目突帯文を廻らせる下城式土器甕、1218は平底の甕底部、1219は凝灰岩製の砥石である。図の左面には幅2～5mmほどの細い磨り跡が5本ある。図の右面は2mmほどの段差がある。



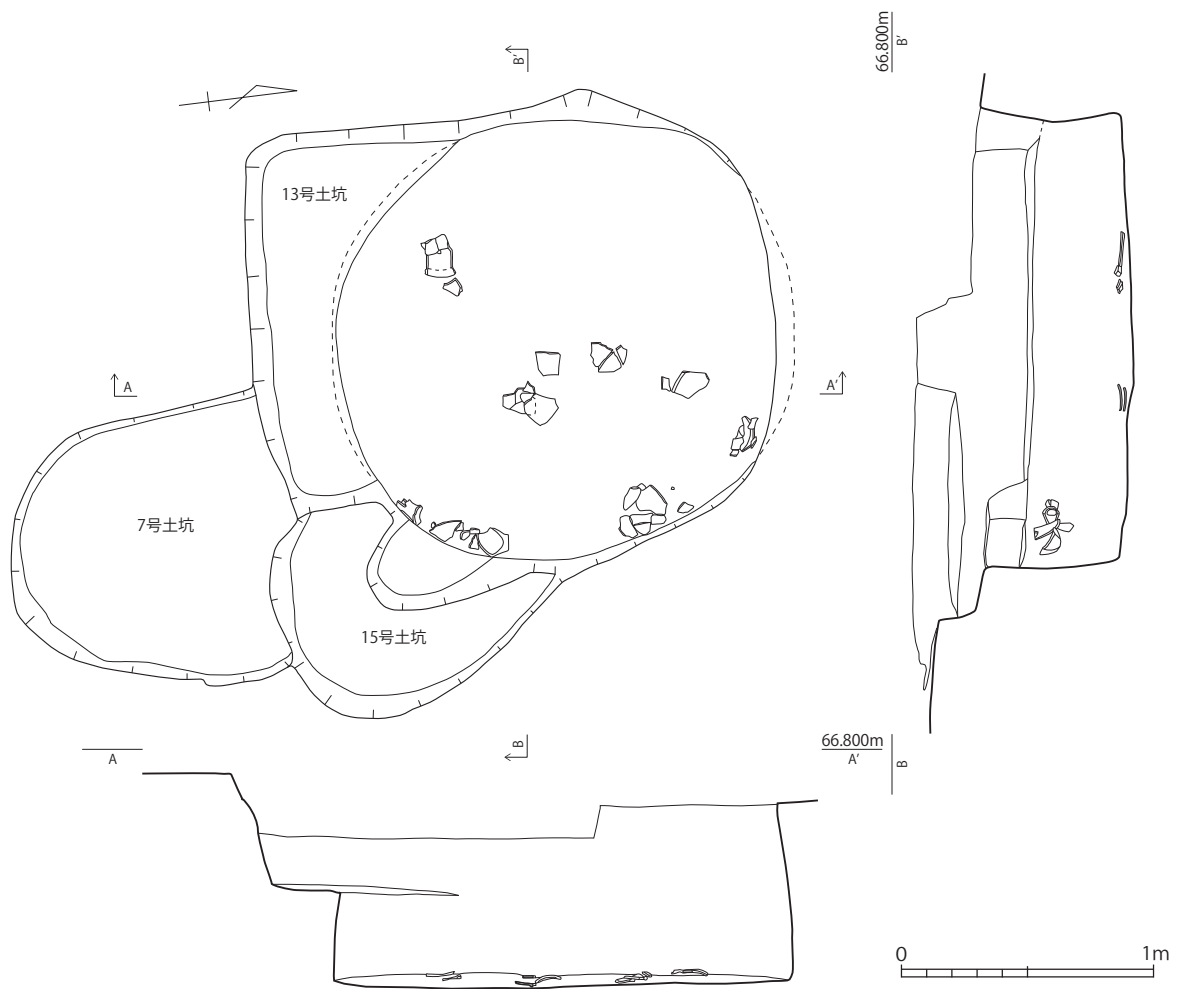
第263図 7次12号土坑出土遺物

14) 13号土坑 (第264図)

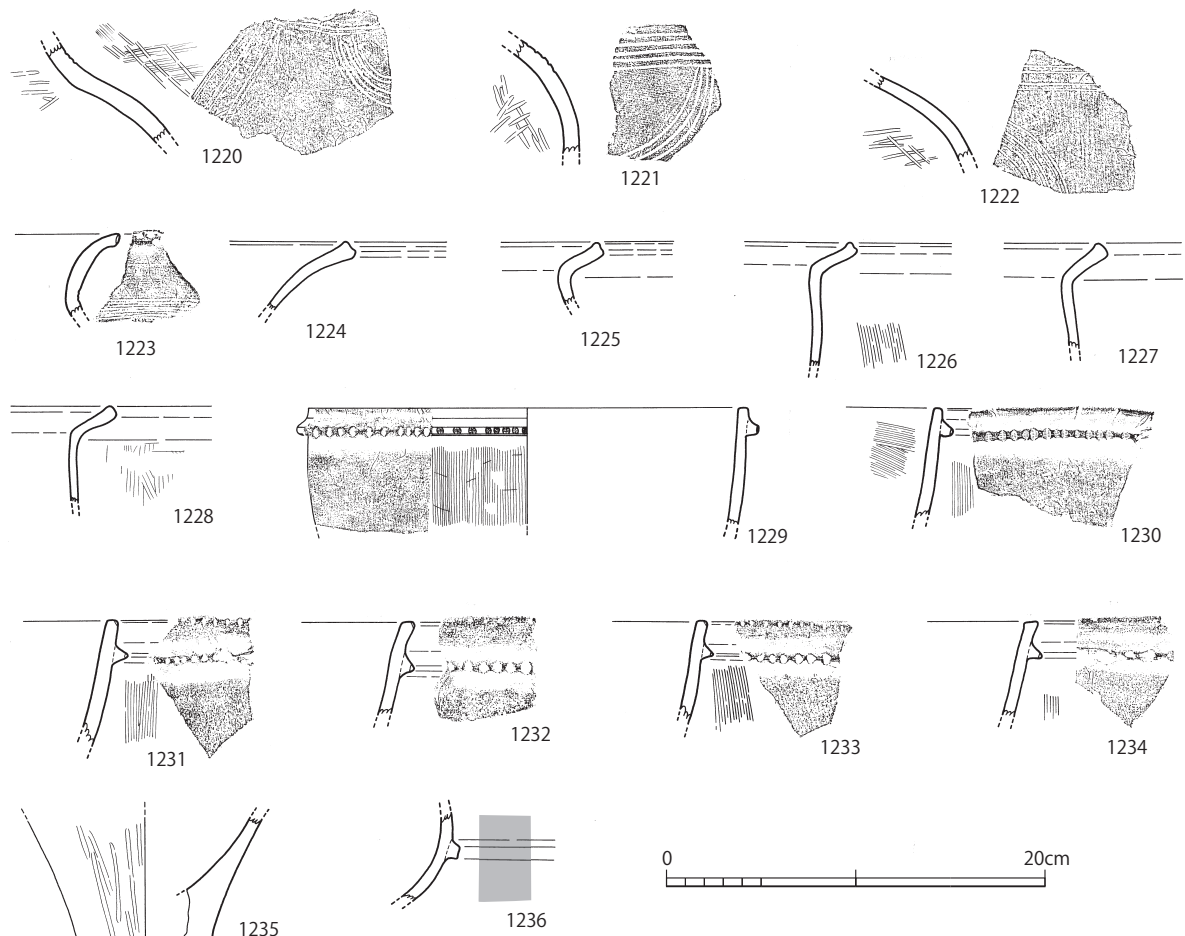
調査区南東部で確認された土坑である。4号、14号土坑と切り合いを持つが、先後関係は不明である。南北は不明であるが、東西は1.50mある方形基調の土坑である。

図示できる出土遺物は17点である。第265図1220から1223は半裁竹管による直線文と重弧文を描く下城式土器壺である。1223の口縁部外面には円形の刺突文があり、細い半裁竹管で3本(6条)の沈線を描く。1224は大きく開く口縁端部がやや摘み上げられる壺、1226から1228は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系の甕である。1229から1234は一条の刻目突帯文を廻らせる下城式土器甕、1235は平底の甕底部、1236は断面台形の突帯を巡らす壺である。

この土坑の時期はⅢ期(中期中頃)と考えられる。



第264图 7次13、14、15号土坑



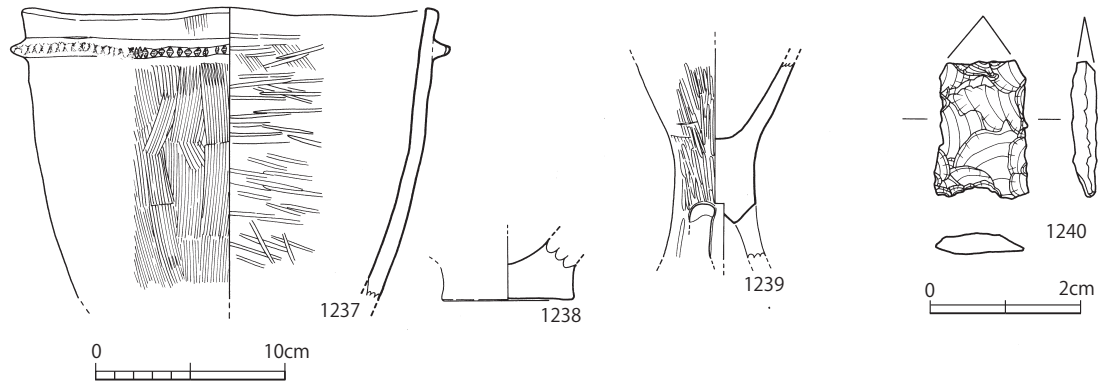
第265图 7次13号土坑出土遺物

15) 14号土坑（第264図）

調査区南東部で確認された土坑である。13号、15号土坑と切り合うが、先後関係は不明である。上端は直径1.75mほどの略円形で、下端は径1.85m～1.74mの南北にやや長い円形を呈する、断面が袋状の土坑である。遺物は大部分が床面に張り付くよう出土している。

図示できる出土遺物は4点である。第266図1237は一条の突帯を廻らせる下城式土器甕、1238は平底の壺底部である。1239は長方形透かしを持つ脚部で、底部の厚さと胴部の開き具合からして753のように上部には甕が乗るのではなかろうか。1240は金山産サヌカイト製の打製石鏃である。

この土坑の時期は、Ⅱ期（中期初頭～前葉）からⅢ期（中期中頃）と考えられる。



第266図 7次14号土坑出土遺物

16) 15号土坑（第264図）

調査区南東部で確認された土坑である。13号、15号土坑と切り合うが、先後関係は不明である。南北1.10m以上、東西0.85m、深さは0.15mの楕円形を呈する土坑になると考えられる。

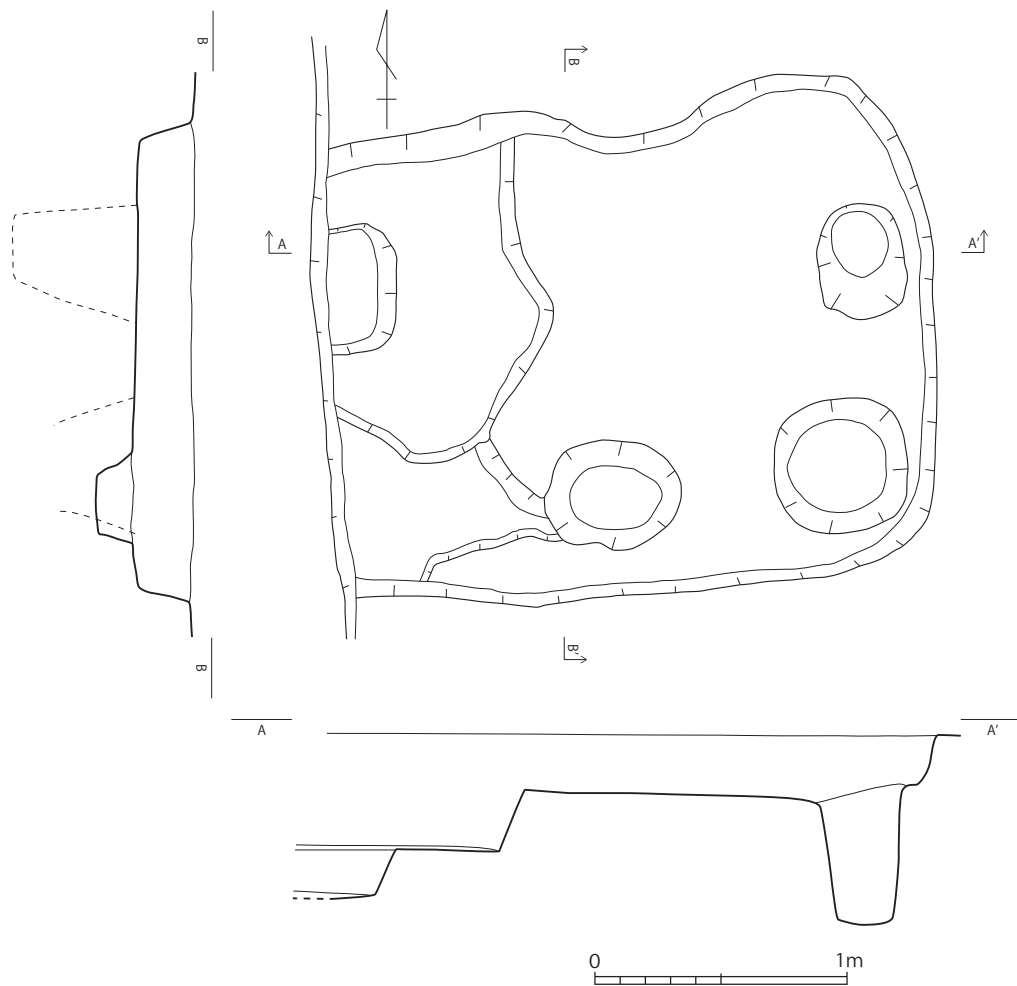
出土遺物はなく、時期は不明である。

17) 16号土坑（第267図）

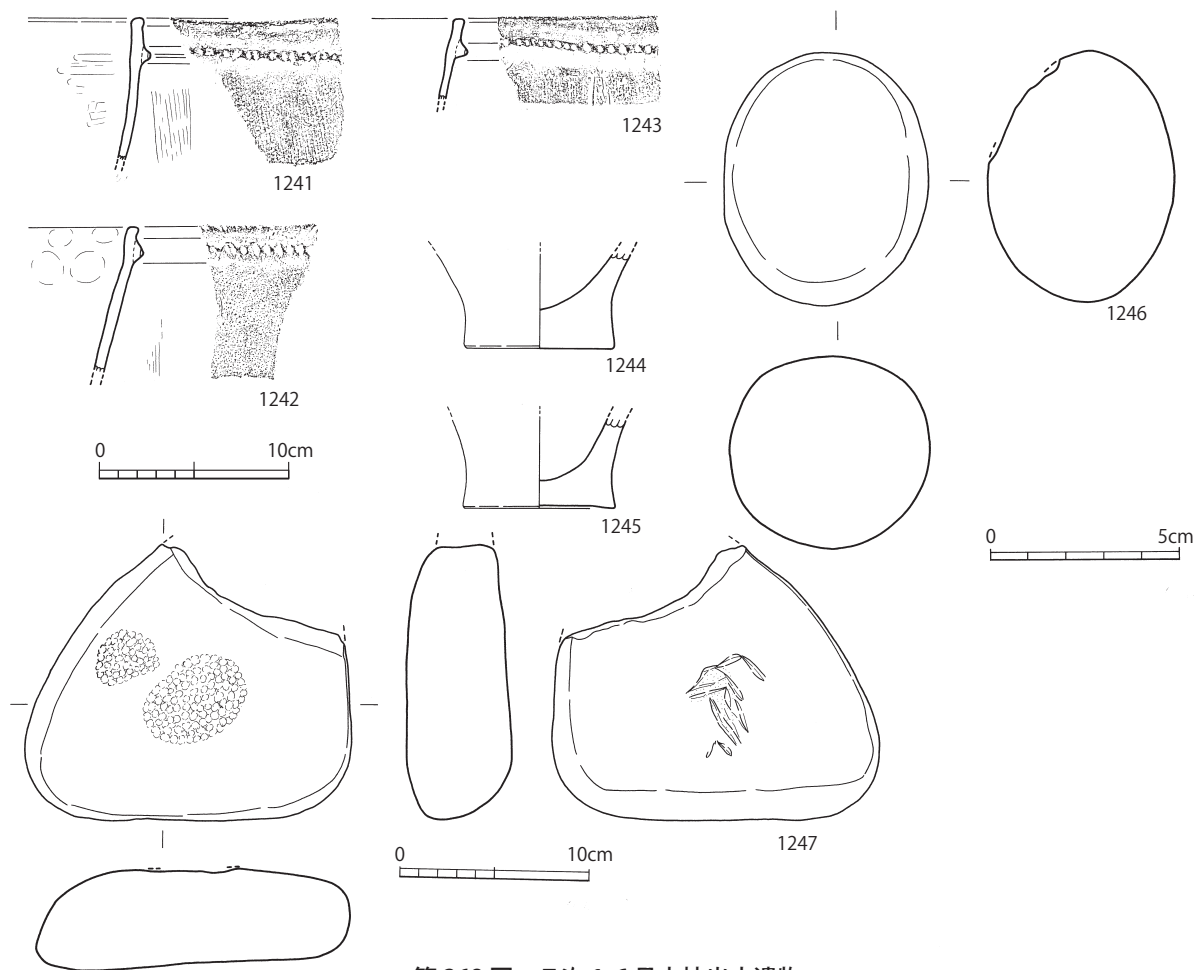
調査区南西角部付近で確認された土坑である。南北1.93m、東西2.43mのやや長方形で、深さは0.23mである。北西側は、床から更に0.24m深くなる。

図示できる出土遺物は7点である。第268図1241から1243は一条の刻目突帯文を廻らせる下城式土器甕、1244と1245は平底の甕底部で、下城式土器甕であろう。1246は安山岩の投弾で外面は一部被熱して赤化している。1247は砂岩製の台石である。

この土坑の時期は、Ⅱ期（中期初頭～前葉）からⅢ期（中期中頃）と考えられる。



第267图 7次16号土坑



第268图 7次16号土坑出土遺物

18) 17号土坑 (第269図)

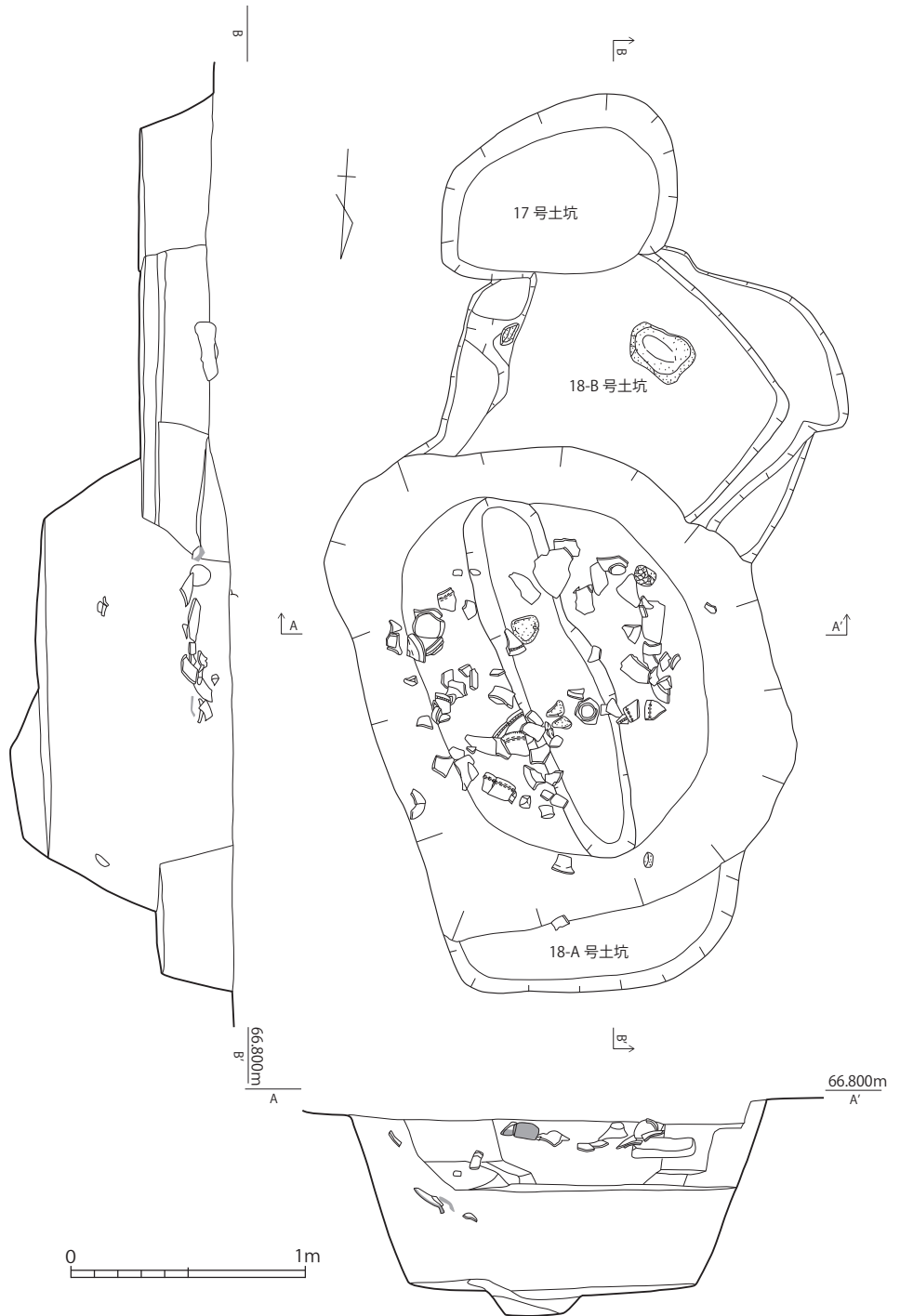
調査区西壁の南寄りで検出された土坑である。18号B土坑と切り合うが、先後関係は不明である。南北0.78 (+ a) m、東西1.03mの長楕円形を呈する。深さは0.30mである。

図示できる出土遺物は5点である。第270図1248と1249は刻目突帯が廻る下城式土器甕で、突帯が口縁端部直下にあるという古相を示す。1250は平底の甕底部、1251は焼成後の穿孔がある甕である。内外面から穿孔している。1252は全長0.9cmのクロム白雲母製の管玉で、両側は欠損している。

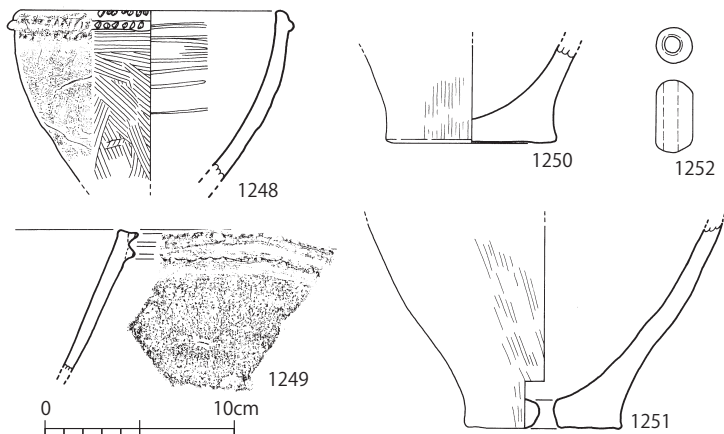
出土遺物から、この土坑の時期はⅡ期(中期初頭~前葉)と考えられる。

19) 18号土坑 (第269図)

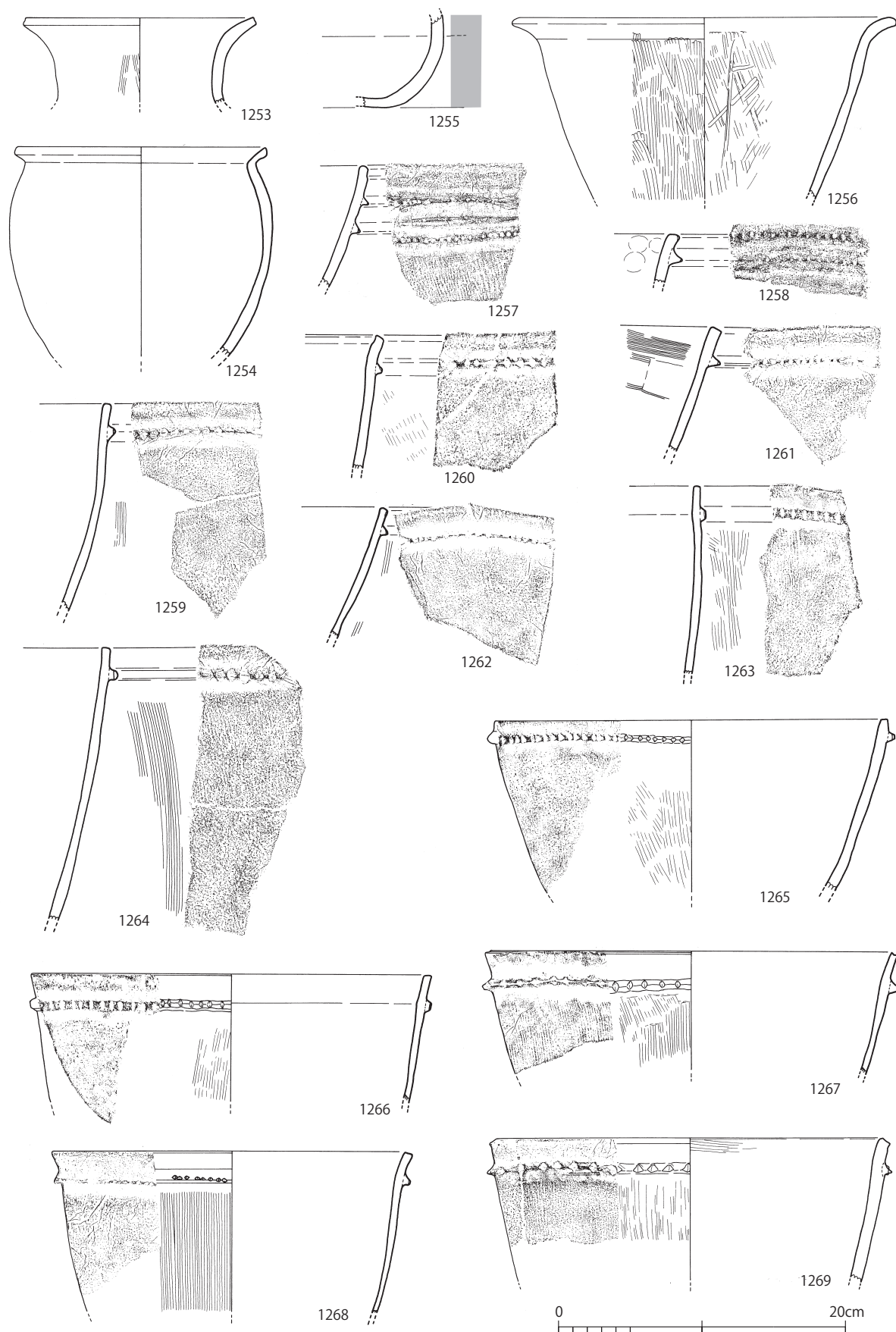
調査区西壁の南寄りで検出された土坑である。3基の土坑が切り合っており、中央を18号、北側を18号A、南側を18号Bとする。18号土坑は南北2.10m、東西1.75m、深さ0.80mの大型の長方形を呈する土坑で、床面には幅0.40m、深さ0.07mの溝が掘られている。遺物は大部分が浮いた状態で出土している。18号A土坑は、東西幅1.35m以上、深さ0.32mである。18号B土坑は17号土坑と切り合い関係を有するが、先後関係は不明である。この土坑も複数切り合っている可能性があるが、いずれも全形、規模ともに不明である。



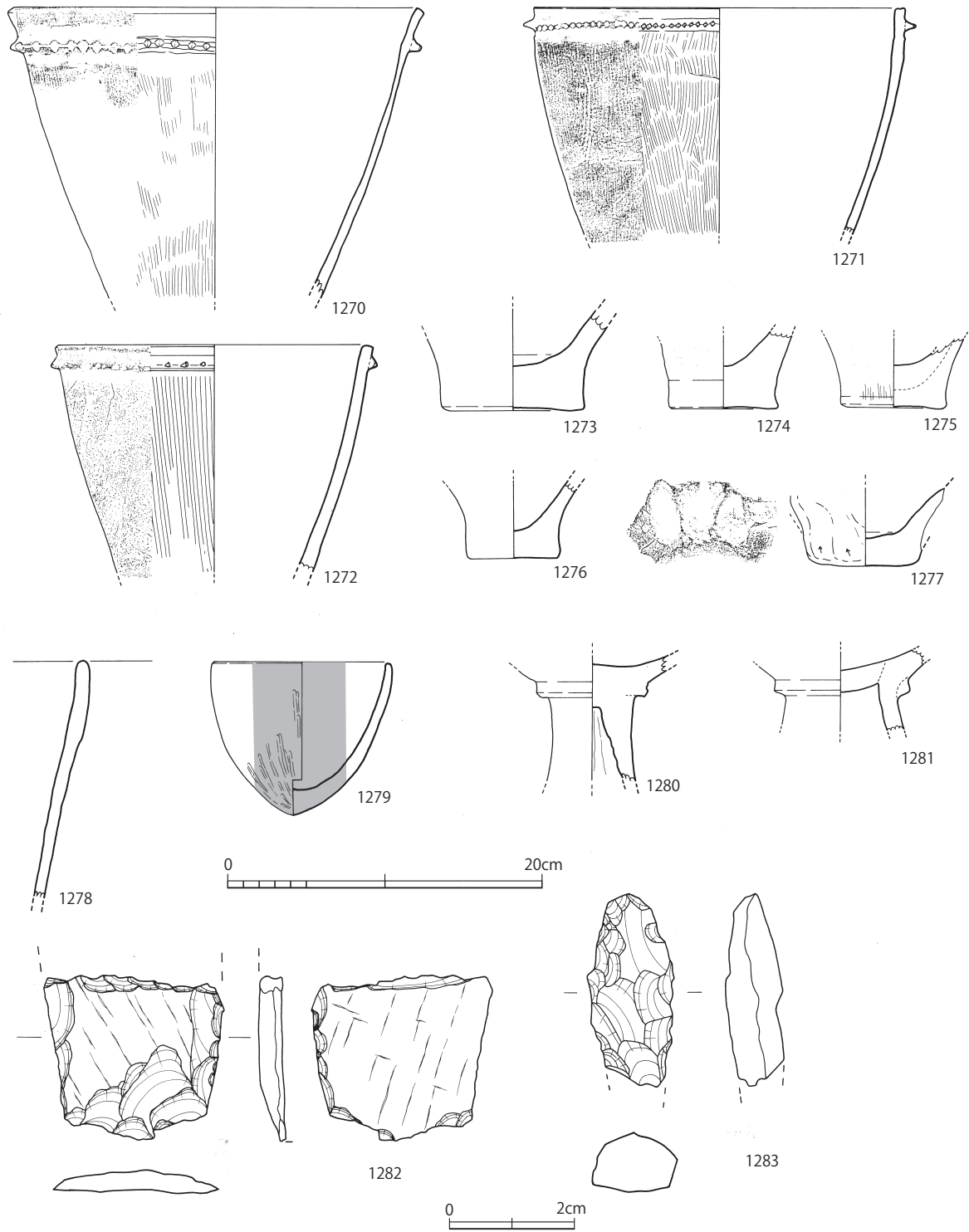
第269図 7次17、18号土坑



第270図 7次17号土坑出土遺物



第 271 図 7 次 18 号土坑出土遺物①

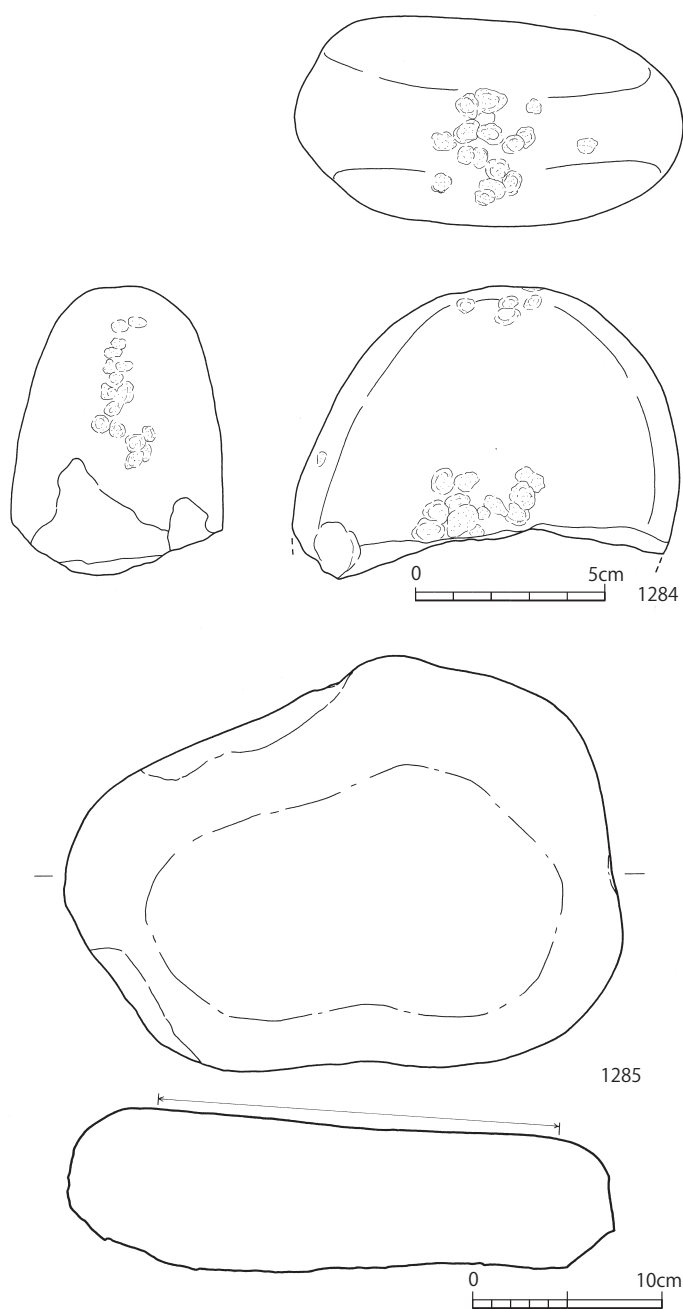


第 272 图 7 次 1 8 号土坑出土遺物②

図示できる出土遺物は33点である。第271図1253は口縁部が外反しながら開く壺、1254は口縁部が小さく折れ開く壺、1255は高坏の脚部である。1256から1277は甕で、1256は口縁部が緩やかに開くもの、1257から1272は刻目突帯を廻らせる下城式土器甕である。突帯は二条のもの(1257)と一条のものがあり、突帯の位置は1265や1272が比較的高い位置にあるほかは、口縁端部より2cm前後下がる位置にある。基本的に外面ハケ調製、内面はナデ調製である。1273から1277は平底の甕底部で、1277は指頭圧痕が残る。1278は口縁部がまっすぐ伸びる甕、1279は内外面ともベンガラ塗布されたやや尖底の鉢、1280と1281は括れ部に突帯を巡らす高坏で、1281の底部は円盤充填技法で作られている。1282は結晶片岩製の磨製石鏃未成品、1283は姫島産黒曜石製の楔形石器である。第273図1284と1285はいずれも角閃石安山岩製の敲石と台石である。

以上の出土遺物の内、18号Aに帰属するものは1266と1276で、18号Bに帰属するのは1260、1263、1267、1270、1271、1278、1279である。その他は18号土坑出土である。

この土坑の時期は、全てがⅢ期(中期中頃)と考えられる。



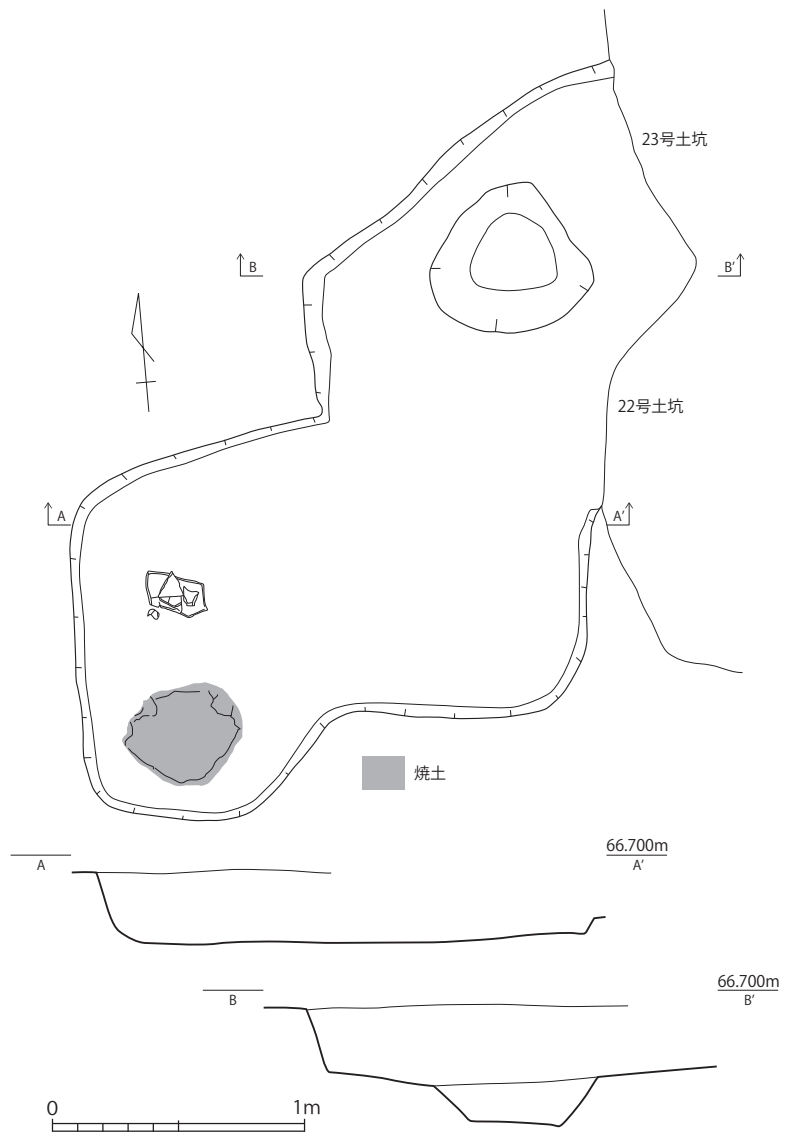
第273図 7次18号土坑出土遺物③

20) 19号土坑 (第274図)

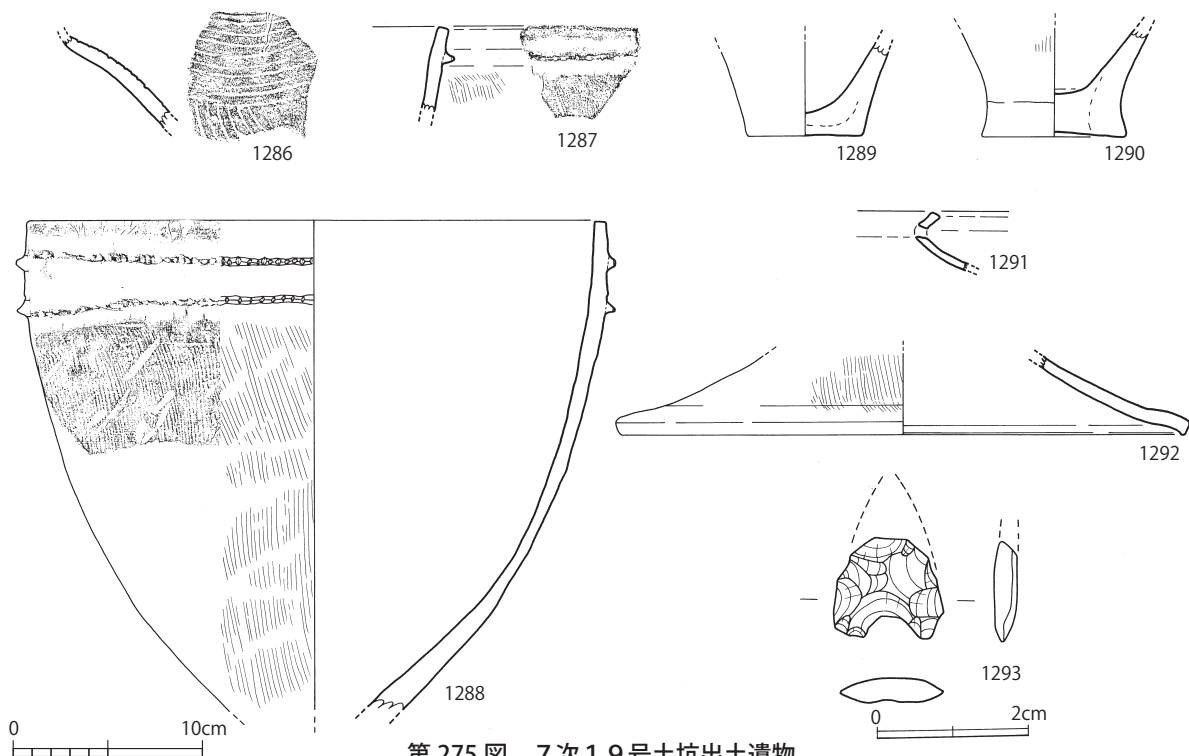
調査区中央やや南東寄りで検出された土坑である。南北1.10m、東西1.37mの不定形をしており、深さは0.28mである。床面近くで焼土が堆積し、炭化した種子(ドングリ類)が出土している。

図示できる出土遺物は8点である。第275図1286は半裁竹管による直線文と重弧文を施す下城式土器壺、1287と1288は刻目突帯文を廻らせる下城式土器甕である。1288はやや内湾気味の口縁部の下に二条の突帯を廻らせる。1289と1290は平底の甕底部、1291は頸部に穿孔のある小型の壺、1292は蓋である。1293は姫島産黒曜石製の打製石鏃である。

この土坑の時期はⅡ期(中期初頭~前葉)からⅢ期(中期中頃)と考えられる。



第274図 7次19号土坑

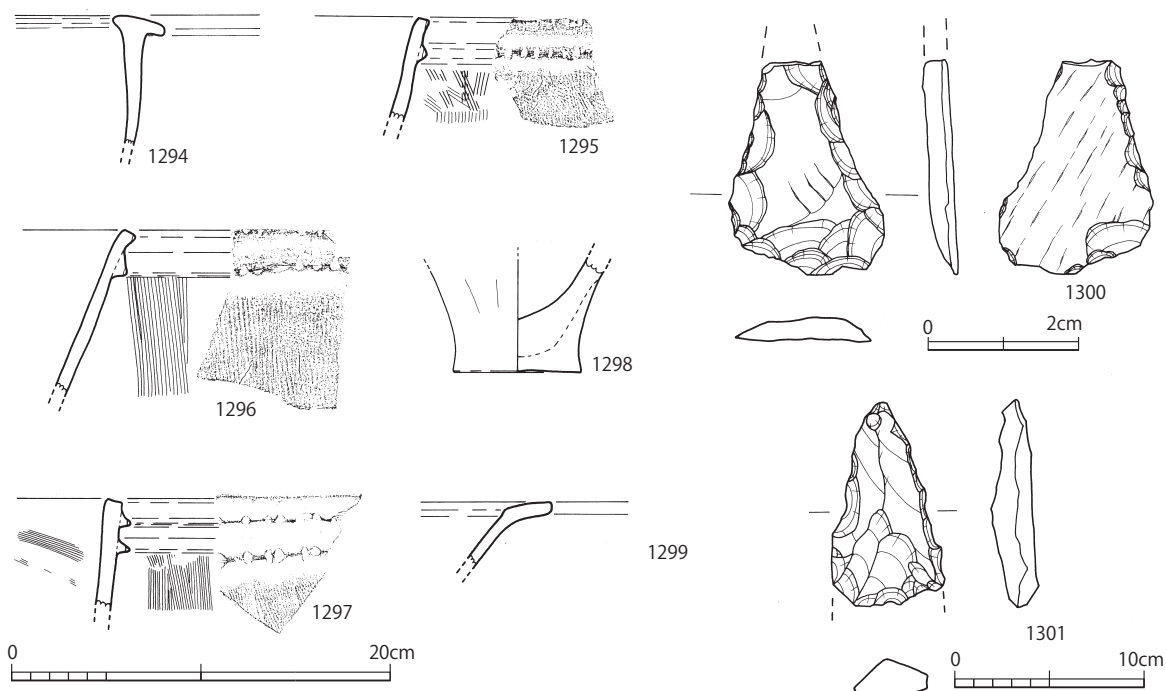


第275図 7次19号土坑出土遺物

21) 20号土坑

「20号土坑」の記載のある一括遺物である。しかしながら、最終的に遺構と確認できなかったものであるが、一括性を優先して、ここでは「20号土坑」出土遺物として扱う。

図示できる出土遺物は8点である。第276図1294は口縁部がやや厚手の鋤先状を呈する壺、1295から1297は刻目突帯文を廻らせる下城式土器甕、1298は平底の甕底部、1299は「く」字折れて開く高坏の坏部か。1300は結晶片岩製の磨製石鏃未成品、1301は姫島産黒曜石製の打製石鏃である。

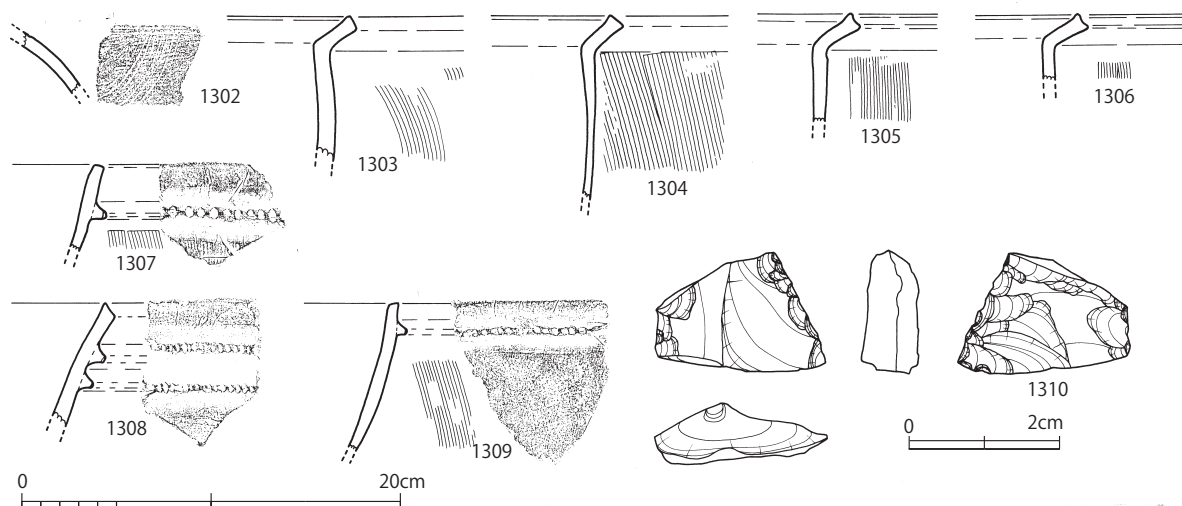


第276図 7次20号土坑出土遺物

22) 21号土坑

「21号土坑」の記載のある一括遺物である。しかしながら、最終的に遺構と確認できなかったものであるが、一括性を優先して、ここでは「21号土坑」出土遺物として扱う。

図示できる出土遺物は9点である。第277図1302は半裁竹管による直線文と重弧文を描く下城式土7壺、1303から1306は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系の甕、1307から1309は刻目突帯文を廻らせる下城式土器甕である。1310は姫島産黒曜石製の二次加工剥片である。



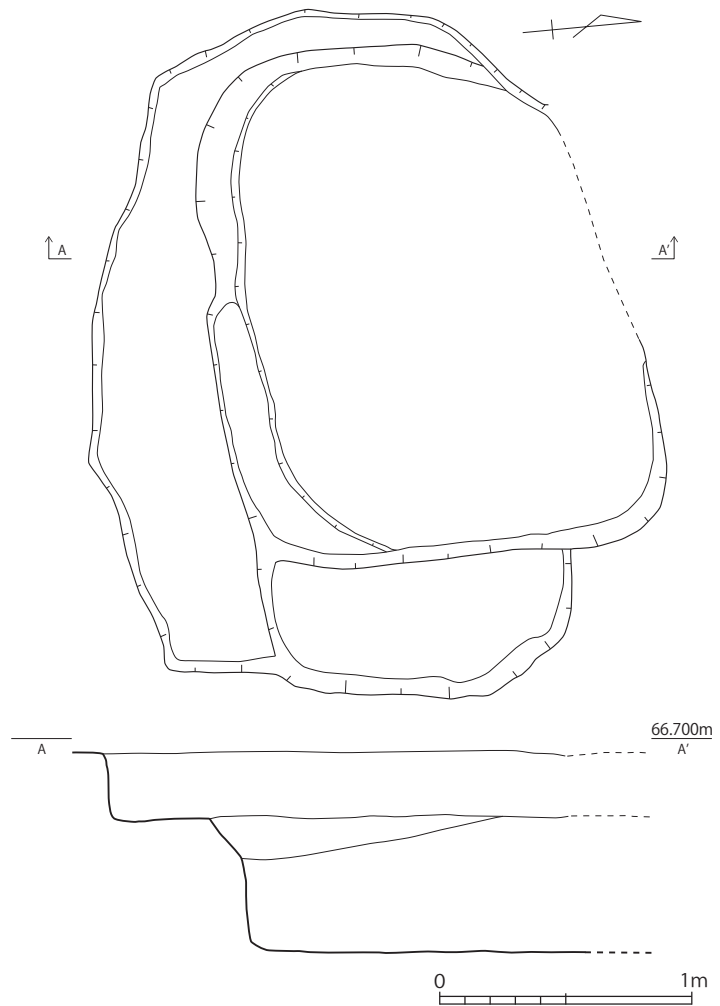
第277図 7次21号土坑出土遺物

23) 22号土坑 (第278図)

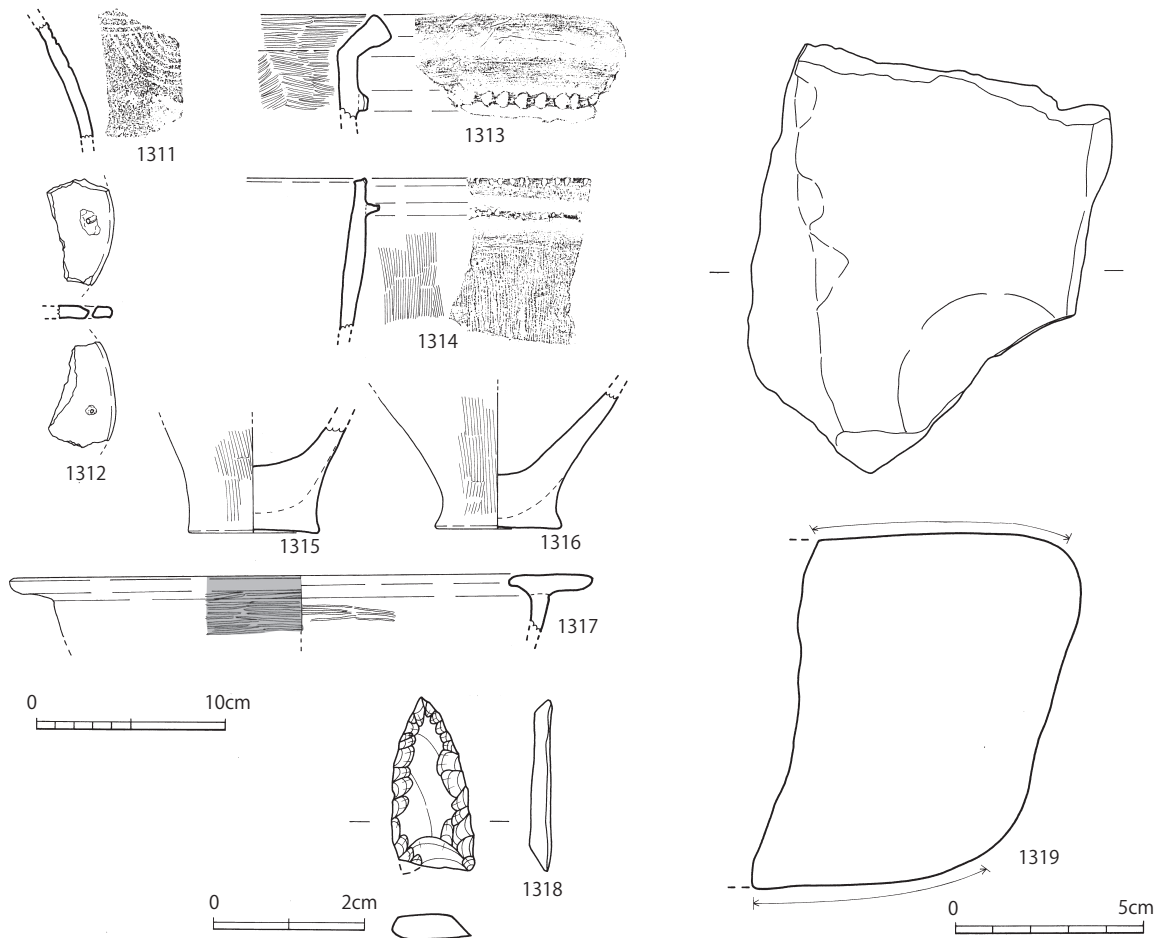
調査区中央やや南東部で検出された土坑である。21号、23号土坑と切り合うが、先後関係は不明である。規模は、南北1.70m、東西2.05m、深さ0.78mの隅丸長方形である。

図示できる出土遺物は9点である。第279図1311は半裁竹管による直線文と重弧文を描く下城式土器壺、1312は水平に開く壺の口縁部で、穿孔がある。1313は口縁部が強く「く」字形に折れ、その下に刻目突帯文を廻らせる甕で、東北部九州系の甕と下城式土器甕の折衷的な甕である。今回報告する中では1733にも近い。1314は一条の刻目突帯文を廻らせる下城式土器甕、1315と1316は平底の甕底部である。1317は外面にベンガラを塗布する高坏で、口縁部は鋤先状をなす。1318は姫島産黒曜石製の打製石鏃、1319は安山岩製の石皿である。

この土坑の時期は、Ⅲ期(中期中頃)と考えられる。



第278図 7次22号土坑



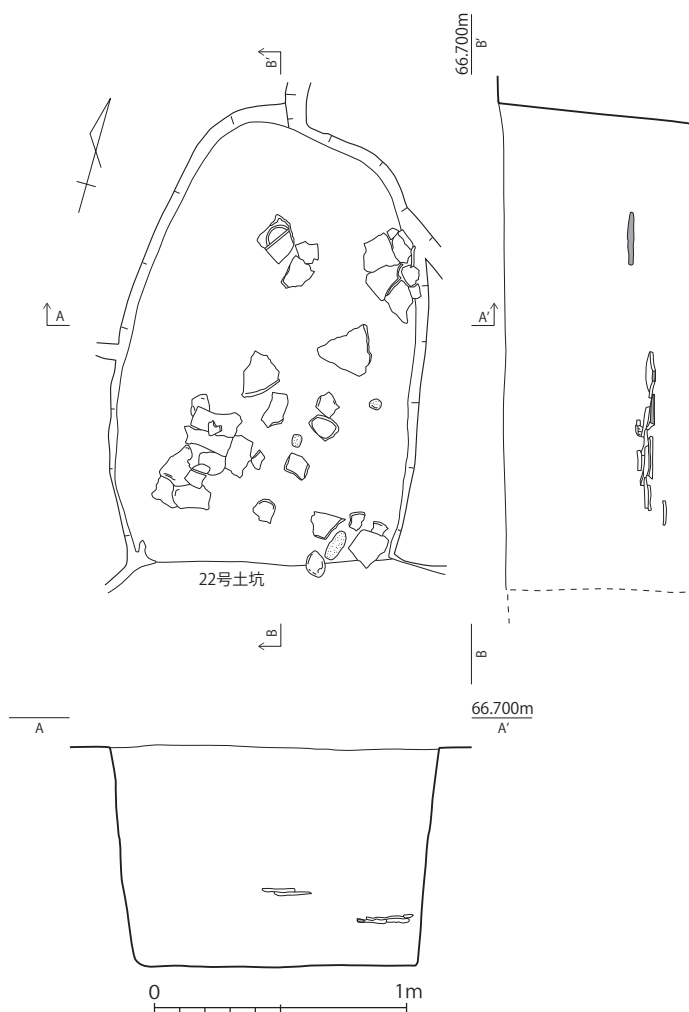
第279図 7次22号土坑遺物出土

24) 23号土坑 (第280図)

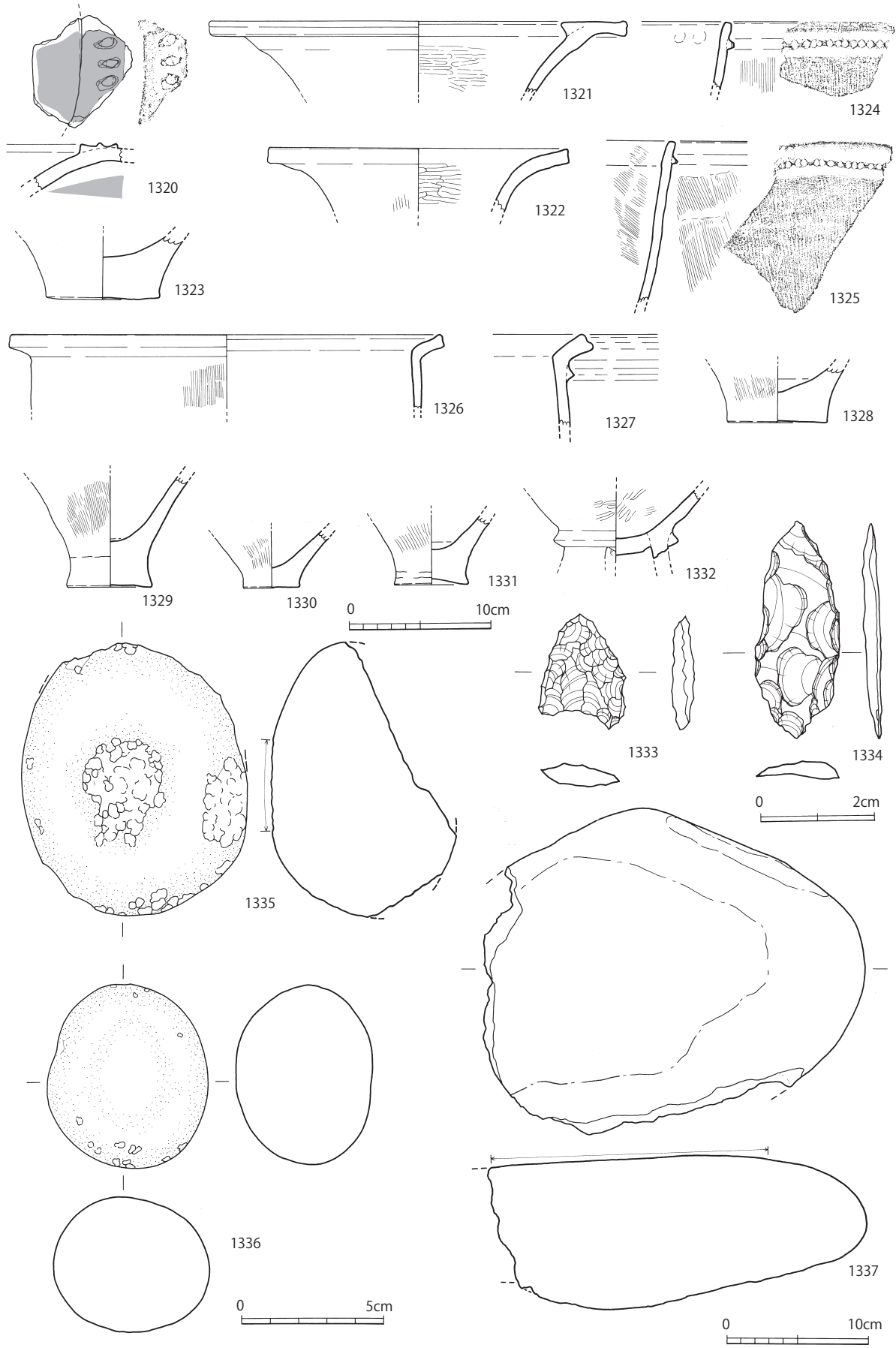
調査区中央からやや南東寄りで検出された土坑である。22号、24号土坑と切り合うが、先後関係は不明である。南北は $1.90 + a$ m、東西は1.22mで、深さは0.80mの楕円形を呈する。遺物は床面から0.1mほど浮いた状態で出土した。

図示できる出土遺物は18点である。第281図1320は鋤先状口縁の上面に勾玉状浮文を付す壺、1321は鋤先状口縁の壺、1322は外反しながら開く壺、1323は平底の壺底部、1324と1325は一条の刻目突帯文を廻らせる下城式土器甕、1326と1327は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系甕で、1327には一条の突帯が廻る。1328から1331は平底の甕底部。1332は脚部に透かしを持つ高坏で、括れ部に一条の突帯を廻らせる。1333は姫島産黒曜石製の打製石鏃、1334は結晶片岩製の磨製石鏃未成品、1335は安山岩製の凹石、1336は安山岩製の投弾、1337は角閃石安山岩製の台石である。

この土坑の時期は、Ⅲ期(中期中頃)と考えられる。



第280図 7次23号土坑



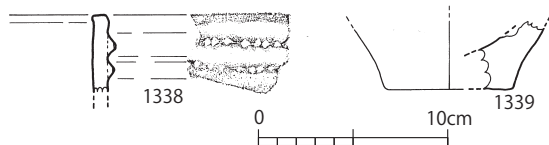
第281図 7次23号土坑出土遺物

25) 24号土坑(第282図)

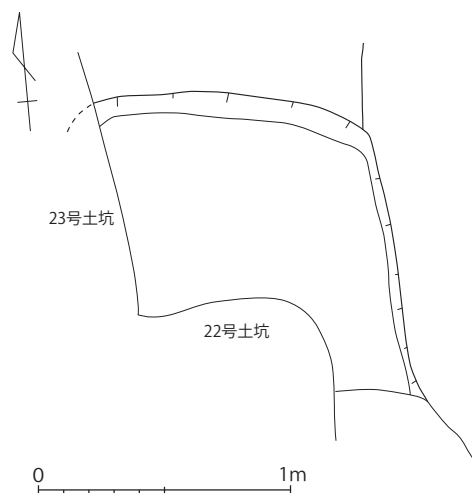
調査区中央やや東南東で検出された土坑で、22号、23号、30号土坑に切られている。そのため、本来の規模、形状は不明である。残存する深さは0.79mである。

図示できる出土遺物は2点である。第283図1338は二条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、1239は平底の甕底部である。

出土遺物が少なく、時期を決めるのは難しいが、Ⅲ期と考えられる22号土坑や23号土坑に切られているので、少なくともⅢ期(中期前半)以前であることは間違いない。1342からⅡ期(中期初頭)と考えておきたい。



第283図 7次24号土坑出土遺物

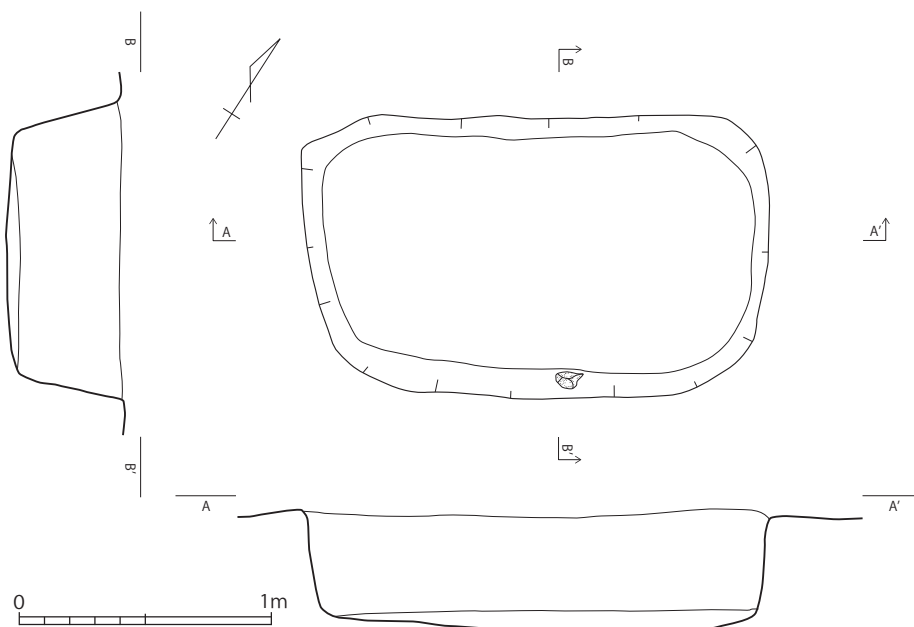


第282図 7次24号土坑

26) 25号土坑(第284図)

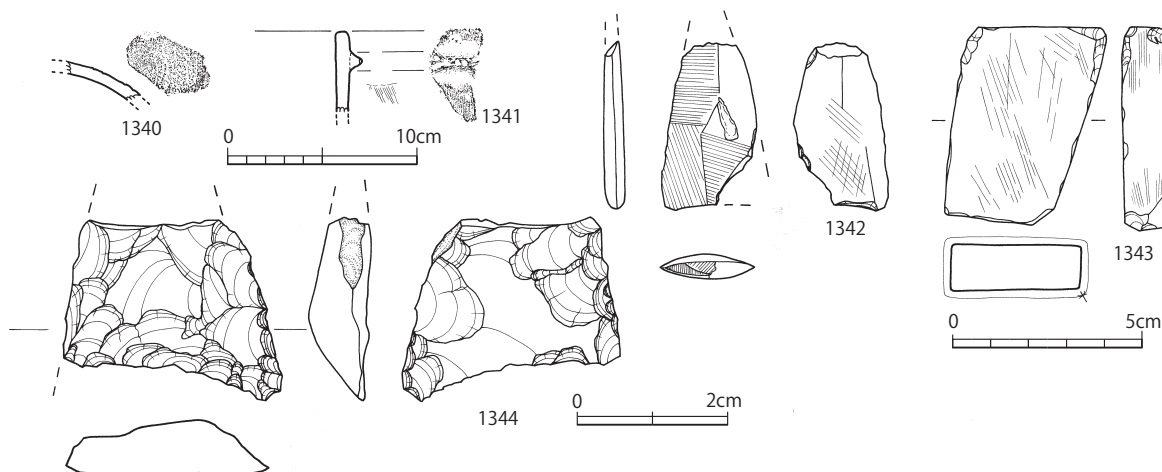
調査区中央南寄り検出された土坑である。7号竪穴建物を切っている。規模は南北1.15m、東西1.15mで、深さ0.45mの長方形を呈する土坑である。

図示できる出土遺物は5点である。第285図1340は半裁竹管による直線文を描く下城式土器壺、1341は一条の刻目突帯文を廻らせる下城式土器甕、1342は結晶片岩製の磨製石鏃、1343は砂岩製の砥石、1344は姫島産黒曜石製の打製石鏃である。



第284図 7次25号土坑

この土坑の時期は、遺物が少なく確定できないが、少なくとも7号竪穴建物のⅡ期(中期初頭)以降である。



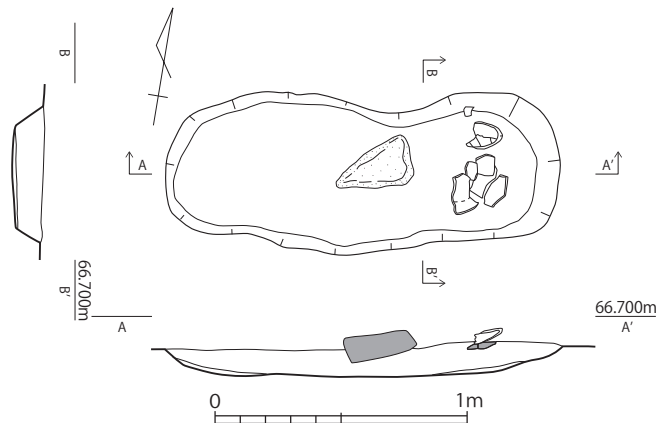
第285図 7次25号土坑出土遺物

27) 26号土坑 (第286図)

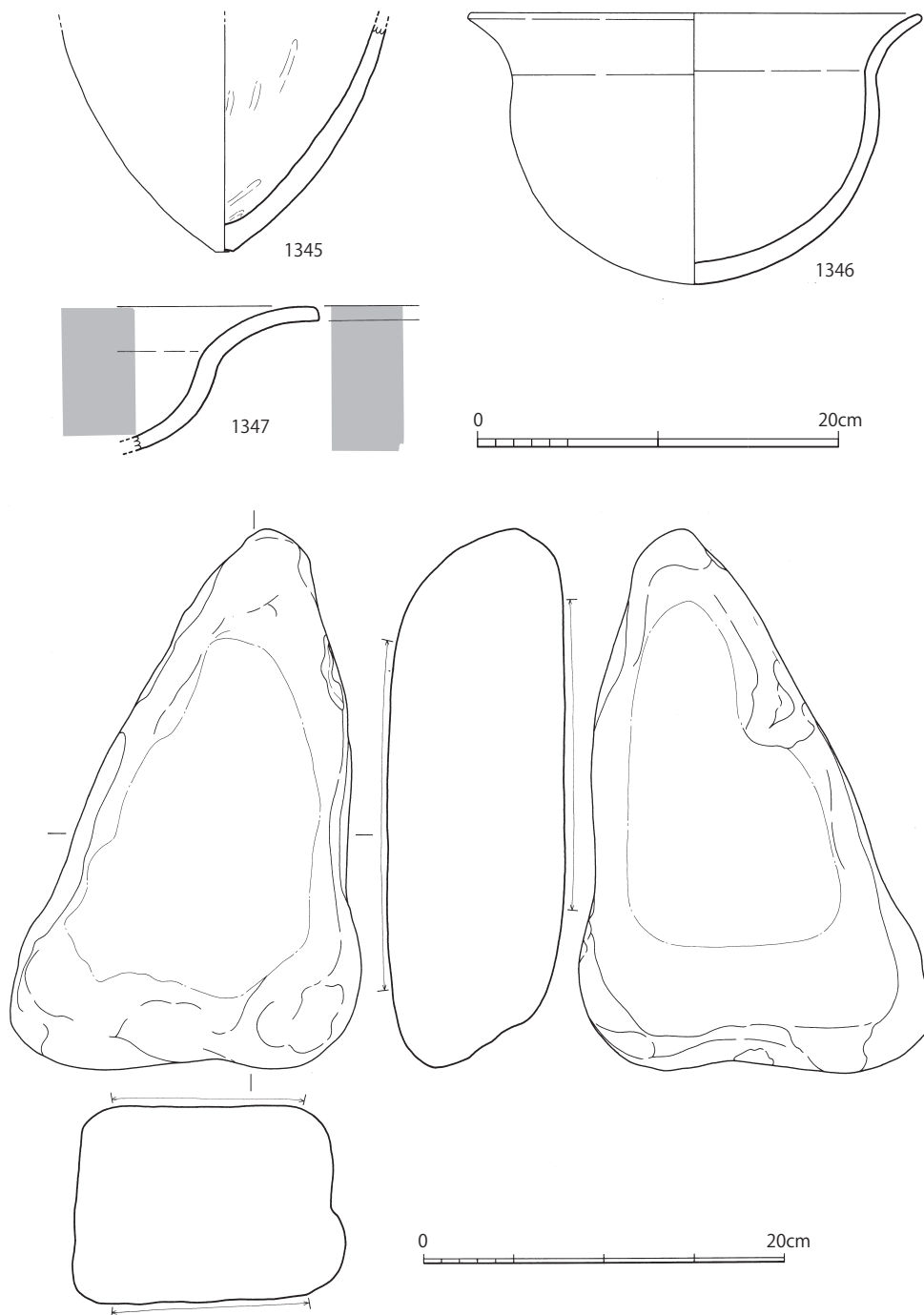
調査区中央やや南西側で検出された土坑である。規模は南北0.60m、東西1.56mの隅丸長方形で、残存する深さは中央付近で0.12mである。床面は東西断面では皿状を呈す。

図示できる出土遺物は4点である。第287図1345は僅かに上げ底状の小さな底部の甕、1346は丸底の鉢、1347は内外面にベンガラを塗布する高坏で、口縁部は外反しながら大きく開く。1348は安山岩製の石皿である。

この土坑の時期は、Ⅷ期（後期後葉）と考えられる。



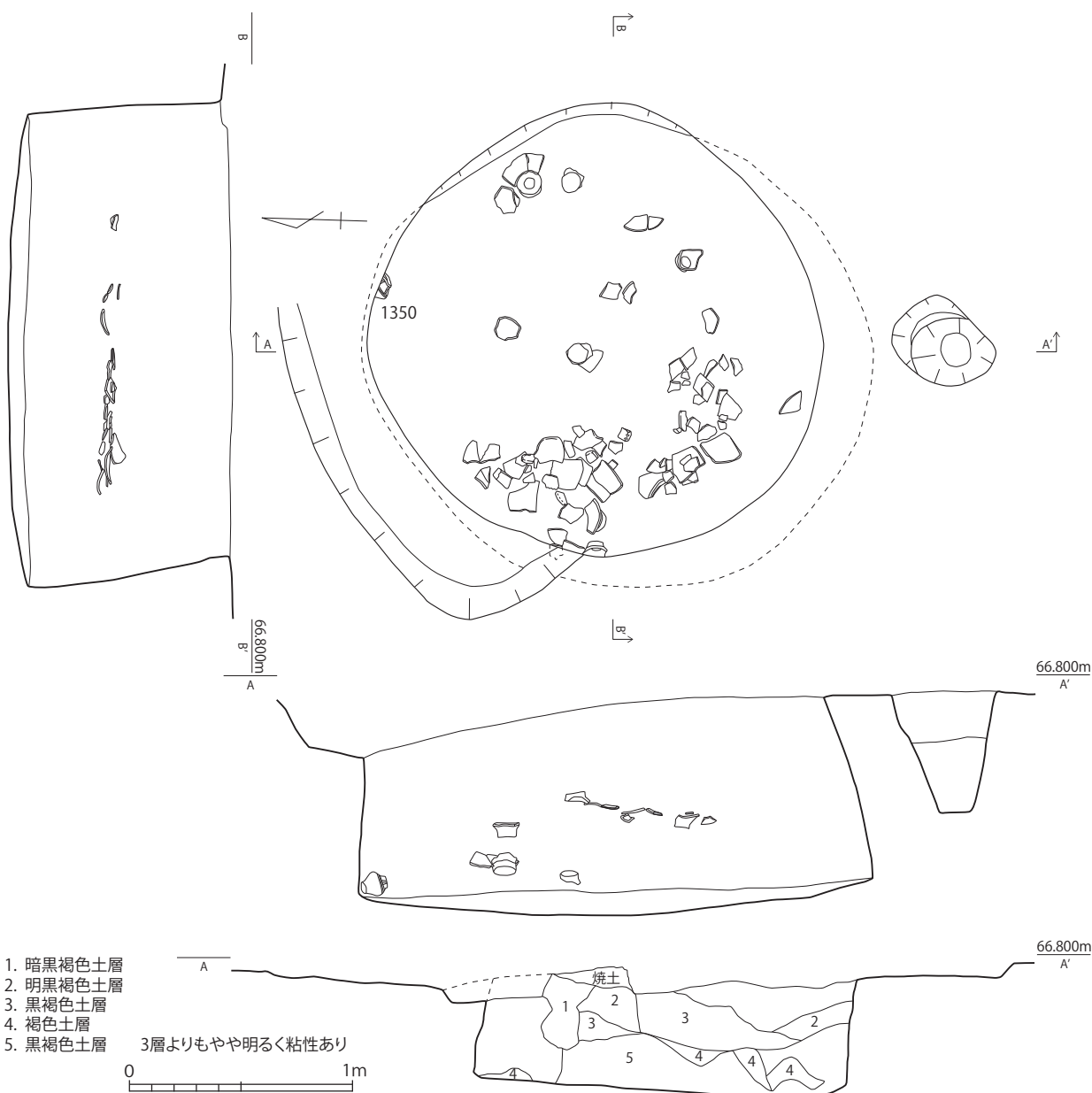
第286図 7次26号土坑



第287図 7次26号土坑出土遺物

28) 27号土坑 (第288図)

調査区南西部で検出された土坑である。3号竪穴建物に切られている。上端の直径は2.03mの円形、下端は径が2.30m～2.10mのやや楕円形を呈する。残存する深さは1.0mで、断面は袋状を呈する。遺物は1350が壁際床面直上で出土した他は、堆積土の中位から出土している。

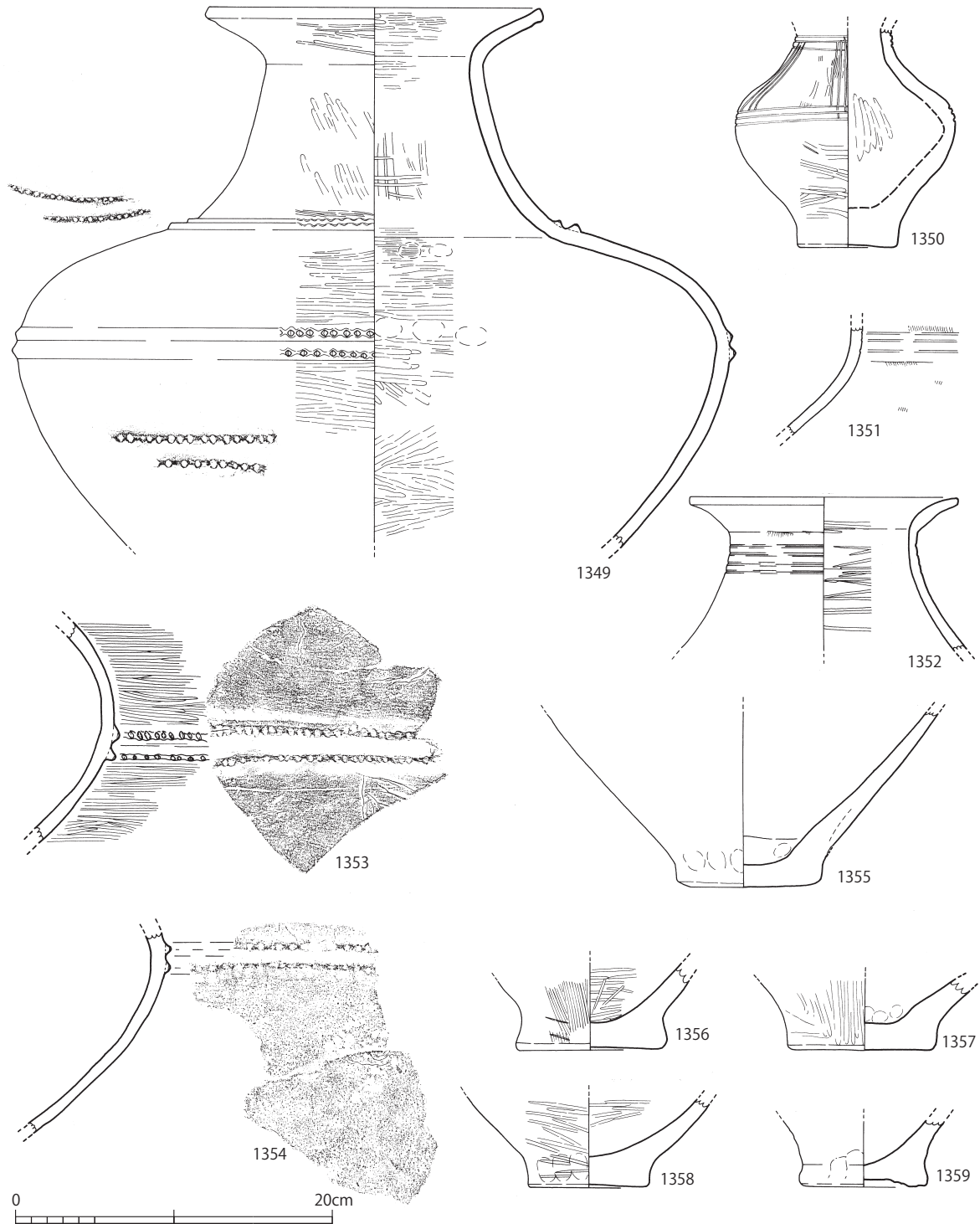


第288図 7次27号土坑

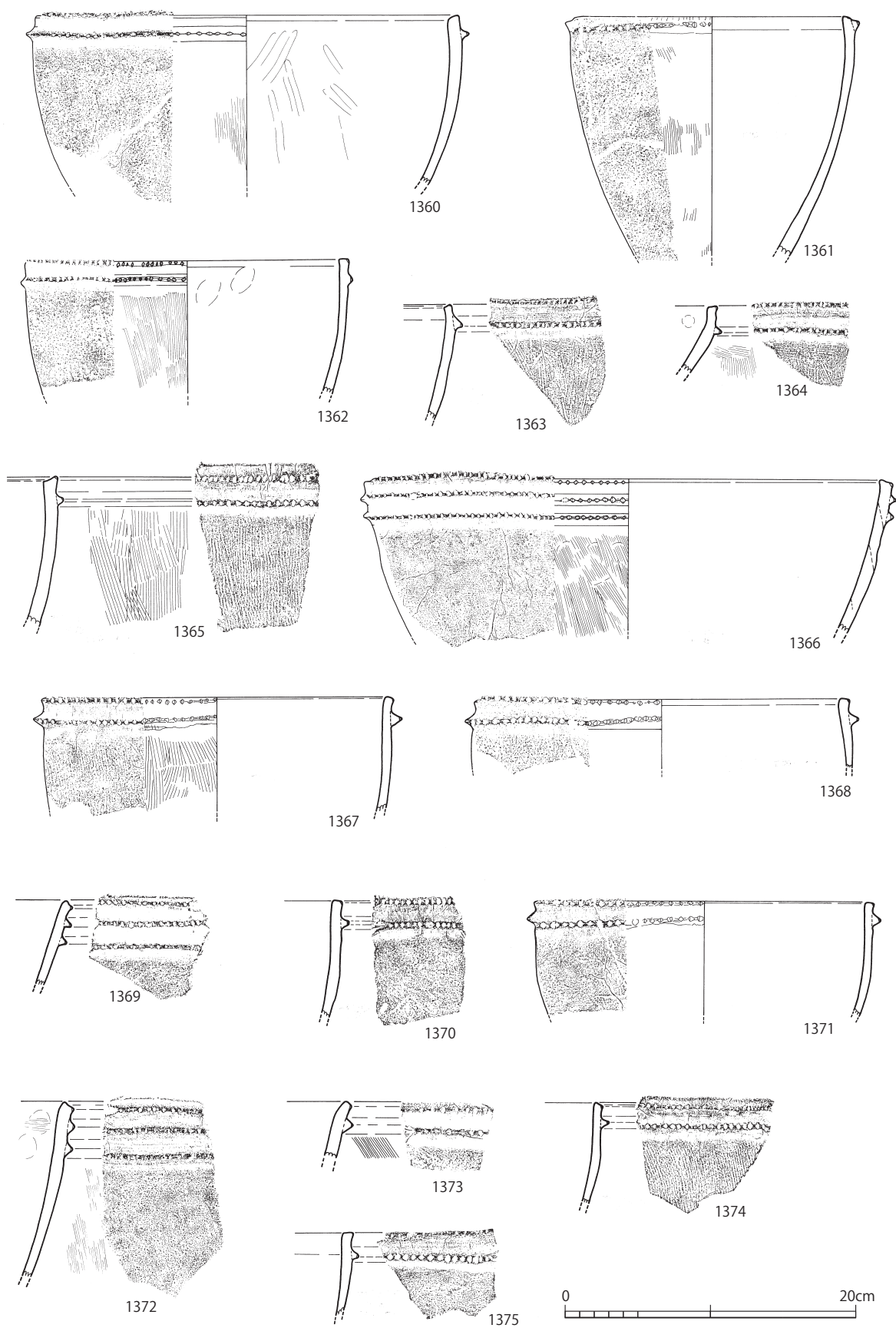
図示できる出土遺物は36点である。第289図1349は口縁部と頸部、体部の境が明瞭な壺で、頸部と体部の境には二条の刻目突帯文を廻らせ、胴部最大径の部分にも二条の刻目突帯文を廻らせる。内外面ともヘラミガキされている。1350は小型の壺で、頸部と体部の境と、体部の最大径の部分に三条の沈線を廻らせ、それを縦の三条の沈線でつなぐ。外面はヘラミガキ。1351は体部に三条の沈線を廻らせる壺、1352はやや肥厚させる口縁部から頸部上半部分に四条の沈線を廻らせる壺。1353と1354は1349と同様の壺で、二条の刻目突帯を廻らせる。1353は突帯の下部に一条の沈線を廻らせ、内外面ともヘラミガキされているが、1354は摩耗が激しく確認できない。1355から1359は壺の底部で、1355円盤状の底部をなす。1356も裾がやや外に張り出す。1358は内外面ともヘラミガキが施される。第290図1360から1375は刻目突帯を廻らせる下城式土器甕で、突帯の位置が比較的口唇部に近いものも多く、極端に下がるものはない。二条の突帯を持つものも、比較的口唇部に近い部分に廻らせている。第

291 図 1376 から 1380 は平底の甕底部である。1381 から 1383 は姫島産黒曜石製で、1381 は打製石鏃、1382 は石匙、1383 は二次加工剥片である。1384 は厚さ 2.5mm で、残存長 6.6cm の円盤状の粘板岩で、図の矢印で示す間は磨かれている。表裏面は加工は見られないが平滑である。用途は不明。

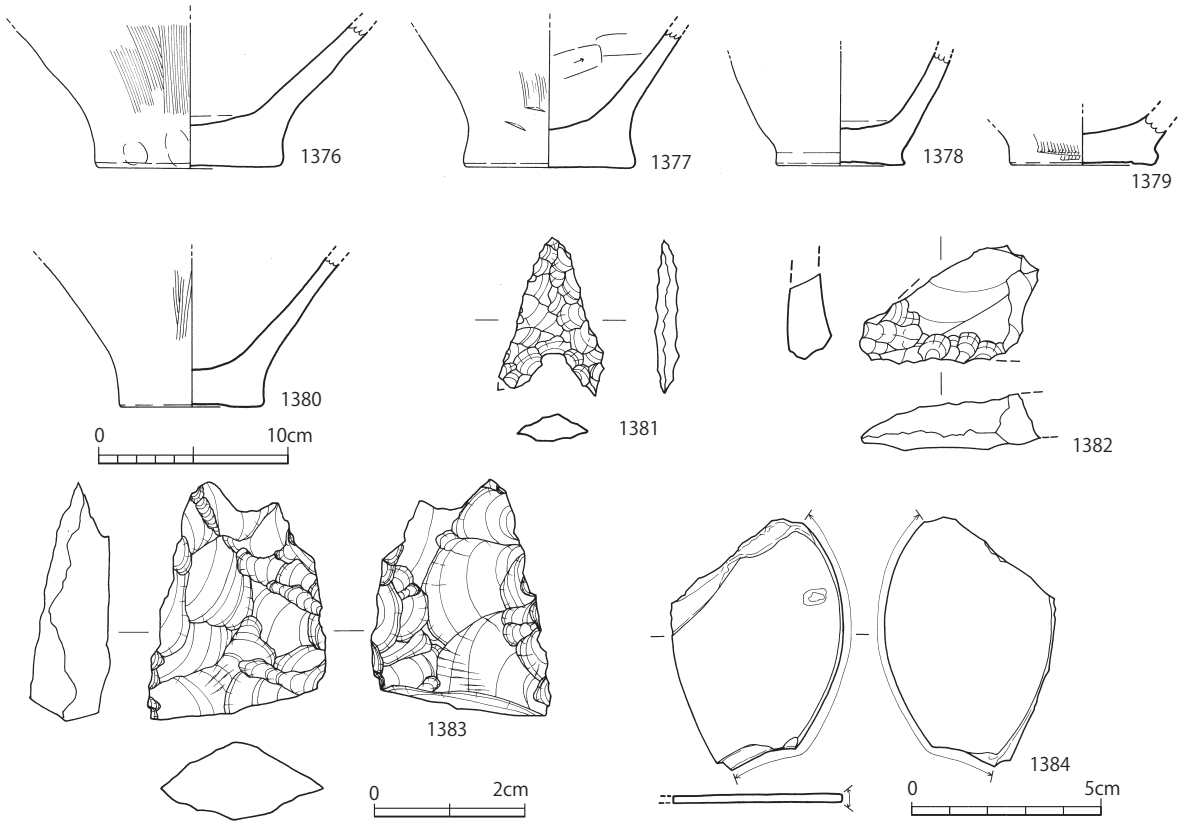
この土坑の時期は I 期（前期後葉～末）である。



第 289 図 7 次 27 号土坑出土遺物①



第290图 7次27号土坑出土遺物②

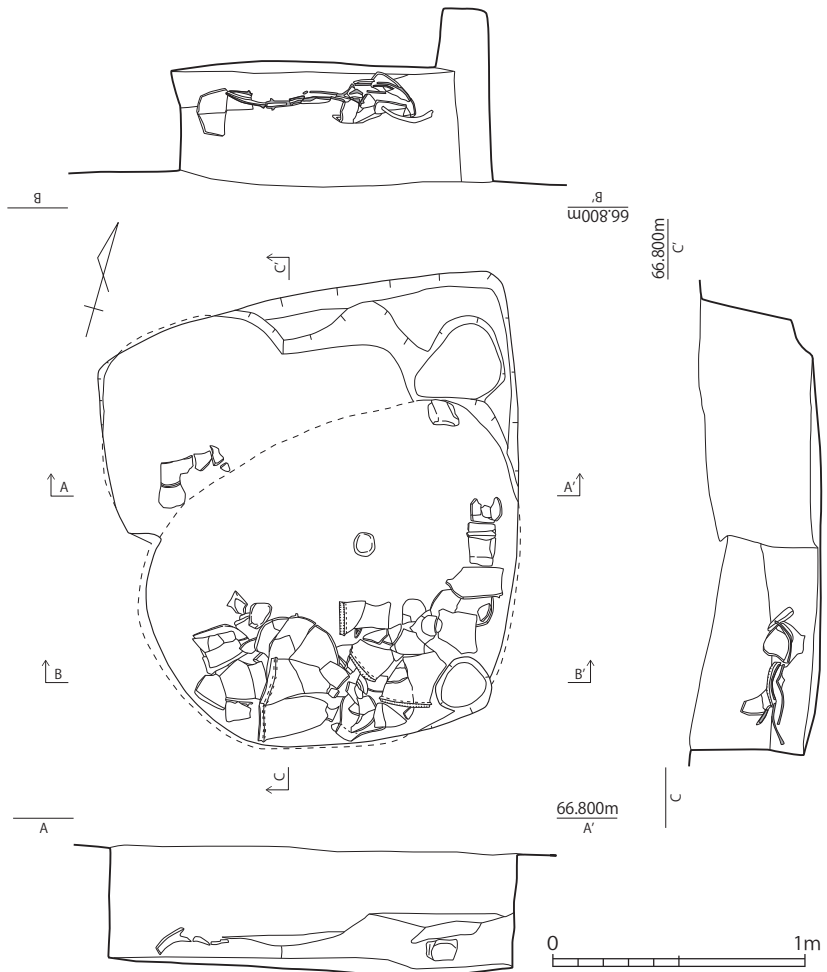


第291図 7次27号土坑出土遺物③

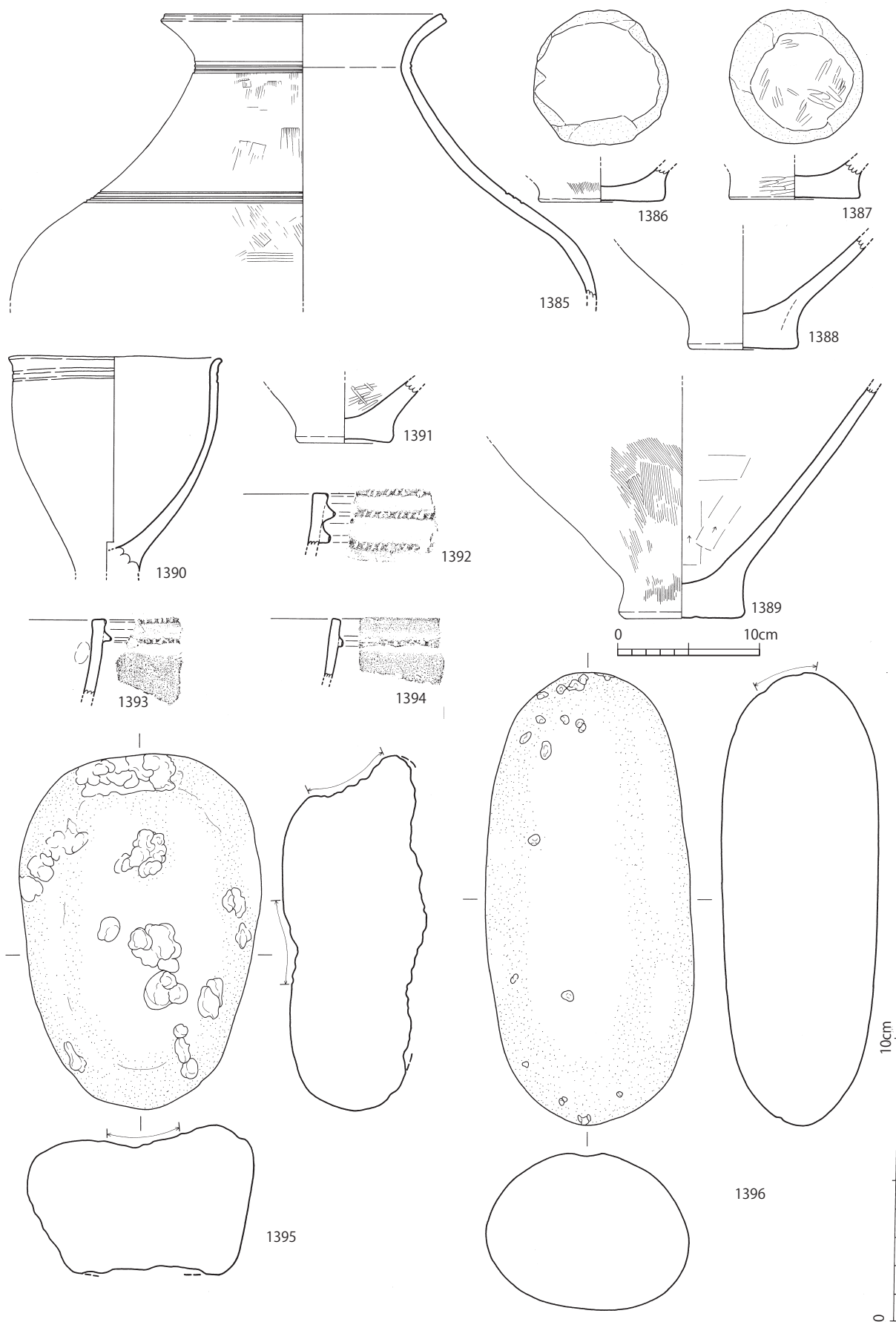
29) 28号土坑 (第292図)

調査区中央からやや南西寄りで検出された土坑である。長方形の土坑と円形土坑が切り合っているが、同一番号で取り上げている。長方形の方は、長軸1.65m、短軸推定で0.8m、深さは0.44mで、円形の方は上端の長軸1.60m、短軸推定で1.28mのやや不整な楕円形で、残存する深さは0.48mである。円形の方の壁は垂直か、やや内傾して立ち上がるので、本来は袋状をなしていたことが推測できる。遺物は床面の南側半分で集中的に出土している。

図示できる出土遺物は12点である。第293図1385は口縁部と頸部の間、頸部と体部の境にそれぞれ2本と3本の沈線を入れ、口縁部、頸部、体部の境がなだらかな壺である。外面はヘラミガキされている。1386と1387はいずれも壺の底部で、意図的に割られて円盤状になっている。1388と1389は平底の壺底部で、裾部がわずかに張り出す。1390は緩やかに小さく開く（如意形）口縁部の甕



第292図 7次28号土坑



第 293 図 7 次 2 8 号土坑出土遺物

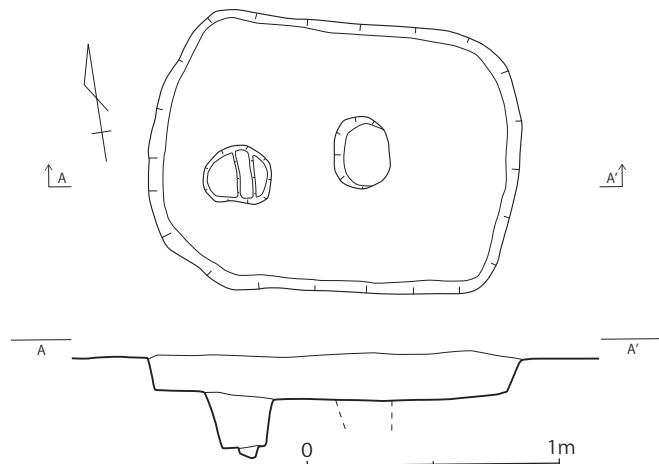
で、頸部下に二条の沈線を廻らせる。底部は厚い平底になると思われる。1391は平底の甕底部、1392から1394は刻目突帯を廻らせる下城式土器甕で、比較的口唇部に近いところに突帯を廻らせる。1395と1396は安山岩で、凹石と敲石である。

この土坑の時期は、I期（前期後葉～末）である。

30) 29号土坑（第294図）

調査区中央のやや南東部あたりで検出された、南北1.08m、東西1.45m、残存する深さ0.17mの長方形を呈する土坑である。床面には二つのピットがあるが、この土坑に伴うものかどうかは不明である。

出土遺物はなく、時期の比定はできない。



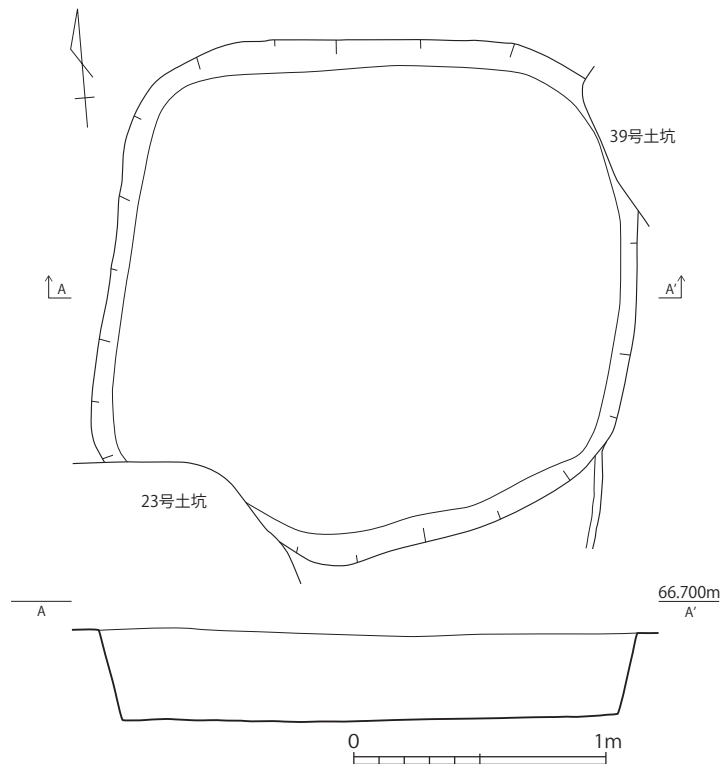
第294図 7次29号土坑

31) 30号土坑（第295図）

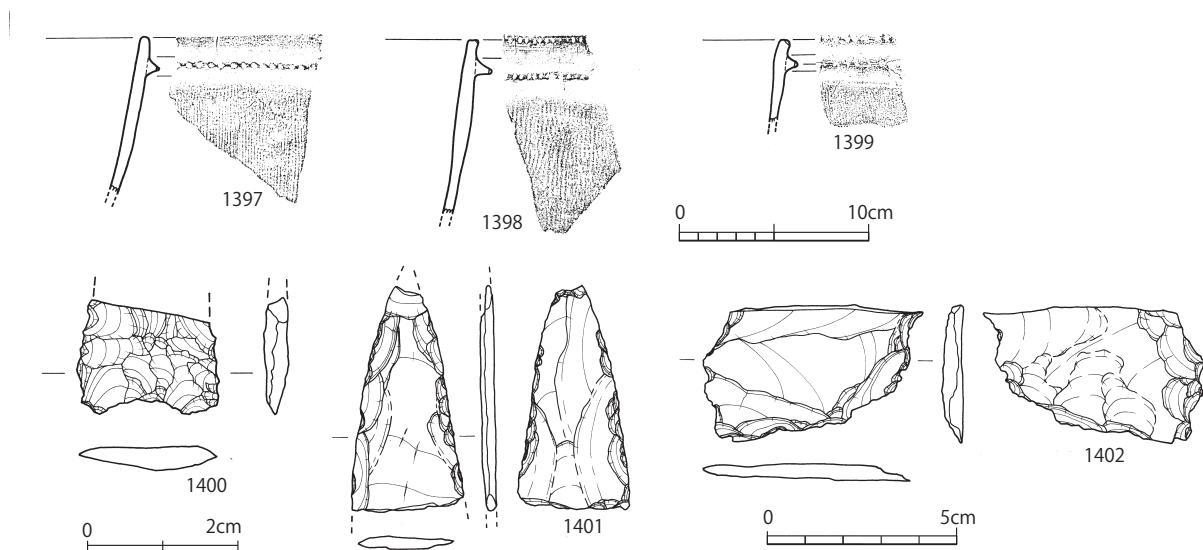
調査区中央のやや南東部あたりで検出された土坑である。23号土坑に切られ、24号土坑を切っている。南北2.05m、東西2.10mのほぼ正方形を呈し、残存する深さは0.33mである。壁は開きながら立ち上がる。

図示できる出土遺物は6点である。第296図1397から1399は一条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕である。いずれも比較的口唇部に近い部分に突帯を廻らせる。1400は姫島産黒曜石製の打製石鏃、1401は結晶片岩製の磨製石鏃未成品、1402は結晶片岩の剥片である。

この土坑の時期は、比較的古手の下城式土器甕の存在から、II期（中期初頭～前葉）と考えておきたい。



第295図 7次30号土坑

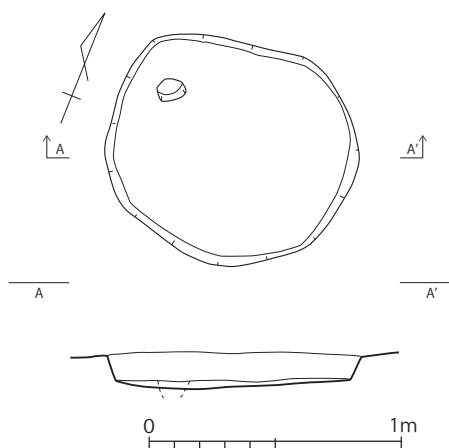


第296図 7次30号土坑出土遺物

32) 31号土坑 (第297図)

調査区南西部で、3号竪穴建物の床面で検出された土坑で、1.00m × 0.92m のやや楕円形を呈する。残存する深さは0.12m ほどである。

出土遺物はなく、時期の比定はできない。



第297図 7次31号土坑

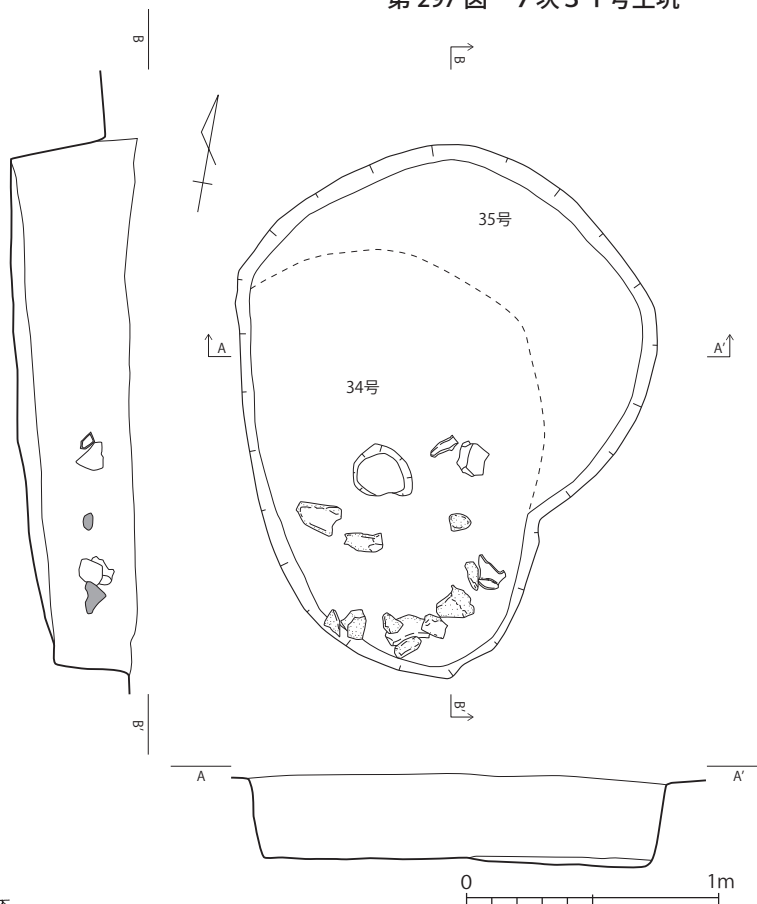
33) 32号土坑 (第205図)

調査区中央やや南寄りで検出された土坑で、7号竪穴建物に切られている。南北1.65m、東西2.56m、深さ0.25mの長方形を呈する土坑である。床面には複数のピットがあり、焼土も検出されたが、時期を示すような遺物はなかった。

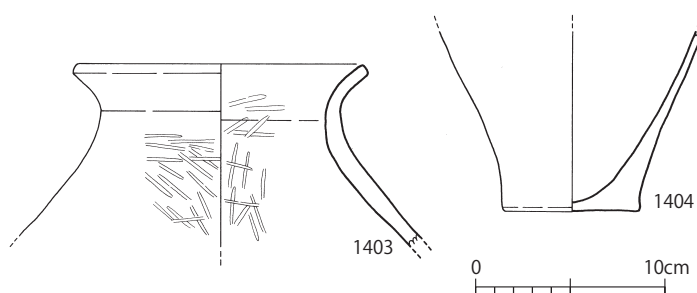
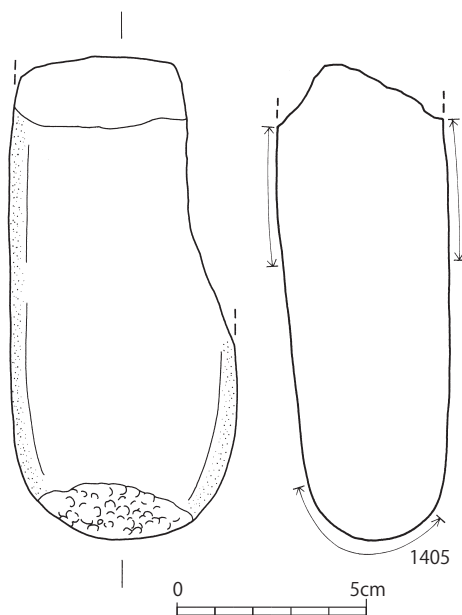
35) 34号、35号土坑 (第298図)

調査区のほぼ中央で検出された土坑である。二つの土坑が切り合っており、北側が35号、南側が34号である。35号は34号に切られている。35号は長軸が1.58mで深さは0.35m、34号は長軸が推定1.70m、短軸が1.15mで深さは0.33mである。遺物はBの南側で、床面より浮いた状態で出土している。

34号出土遺物は3点である。第299図1403は内外面ともヘラミガキが施される板付系統の壺である。1404は底径の比較的大きな甕の底部で、器表面の調整は摩滅してわからない。1405は砂岩製の敲石である。この土坑の時期は、I期（前期後葉～末）と考えられる。



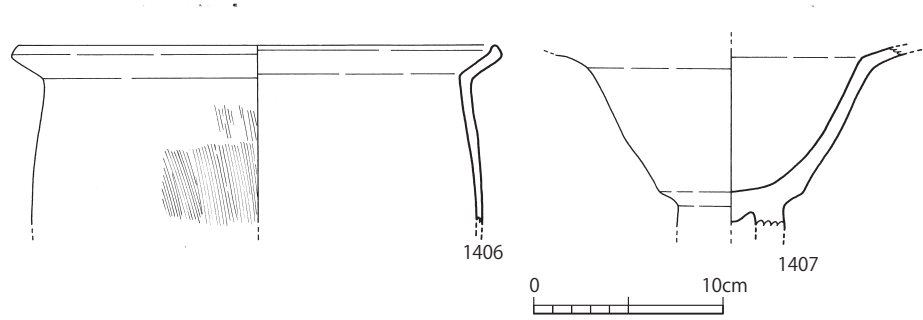
第298図 7次34号、35号土坑



第299図 7次34号土坑遺物

35号土坑出土遺物は2点である。第300図1406は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系甕、1407は底部が平らで、坏部が直線的に開く高坏である。口縁部は外に折れて開く。

この土坑の時期は、Ⅱ期（中期初頭）と考えられる。



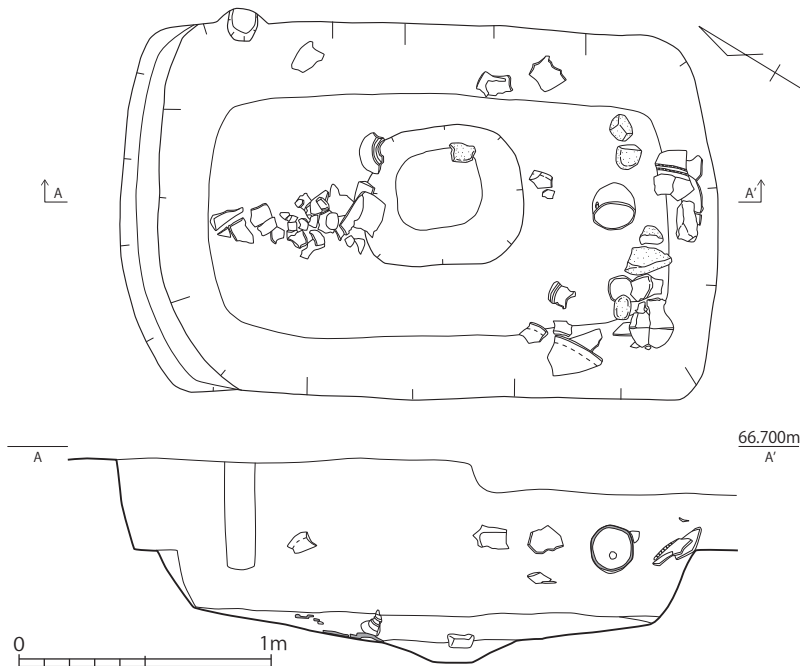
第300図 7次35号土坑出土遺物

38) 37号土坑（第301図）

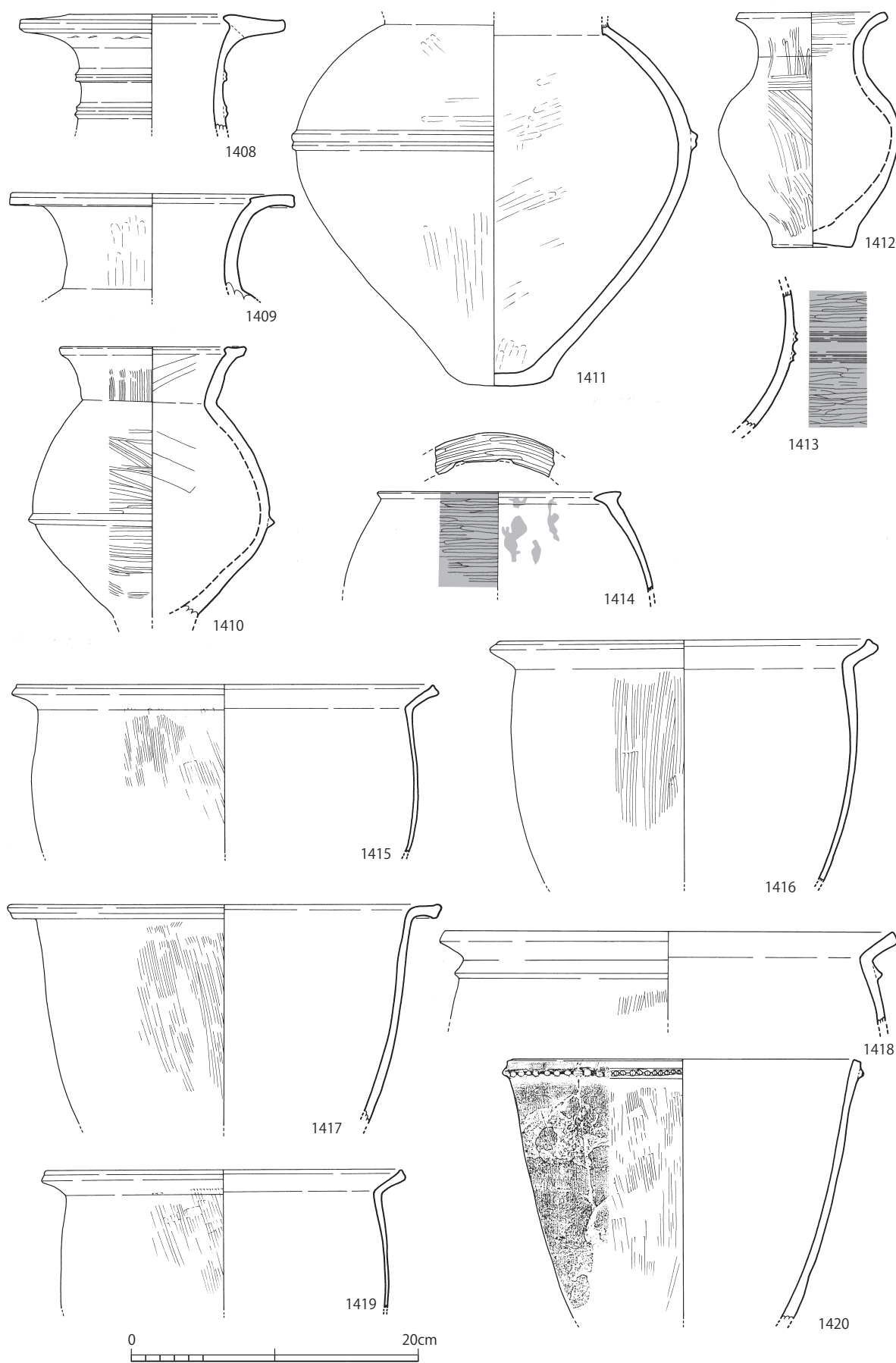
調査区の中央東寄りで検出した土坑である。47号、48号土坑と切り合い関係を有するが、先後関係は不明である。長軸2.22m、短軸1.48mの長方形を呈し、残存する深さは中央付近で0.70mである。床面は中央付近で一辺0.6m、深さ0.10mほど皿状に窪んでいる。また、北西側は二段掘りとなっている。

図示できる出土遺物は25点である。第302図1408は口縁部が鋤先状になる長頸の壺で、頸部には断面が薄い台形の突帯が二条巡っている。1409は口縁部が鋤先状になる壺である。1410は脚台が付くと思われる壺で、口縁部は小さく鋤先状となる。胴部最大径の部分に一条の突帯を巡らす。1411は胴部に断面台形の突帯を一条巡らす壺で、底部は僅かに突出する平底である。1412は緩やかに外反しながら開く口縁部の壺で、内外面ともヘラミガキが施される。底部は平底である。1413は外面にベンガラが塗布された壺で、ヘラミガキの後二条の突帯を廻らせる。1414は内外面ともベンガラが塗布された無頸壺で、口縁端部は内外に小さく突出する。外面はヘラミガキが施される。1415から1419は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系甕で、1418には頸部下に一条の突帯が廻る。1420は一条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、第303図1421は平底の甕、1422は縦方向の把手をつける鉢、1423は口縁端部を四角く仕上げる鉢で、内外面ともヘラミガキが施される。1424は平底の鉢で、ミガキはない。1425は台付鉢（高坏）の脚部で、鉢の底部は円盤充填技法である。1426と1427は高坏で、口縁部は両者ともやや内側に突出する逆「L」字形をしており、内外面ともベンガラを塗布し、ヘラミガキが施される。1428は結晶片岩製の磨製石鏃、1429から1432はいずれも姫島産黒曜石製の打製石鏃である。

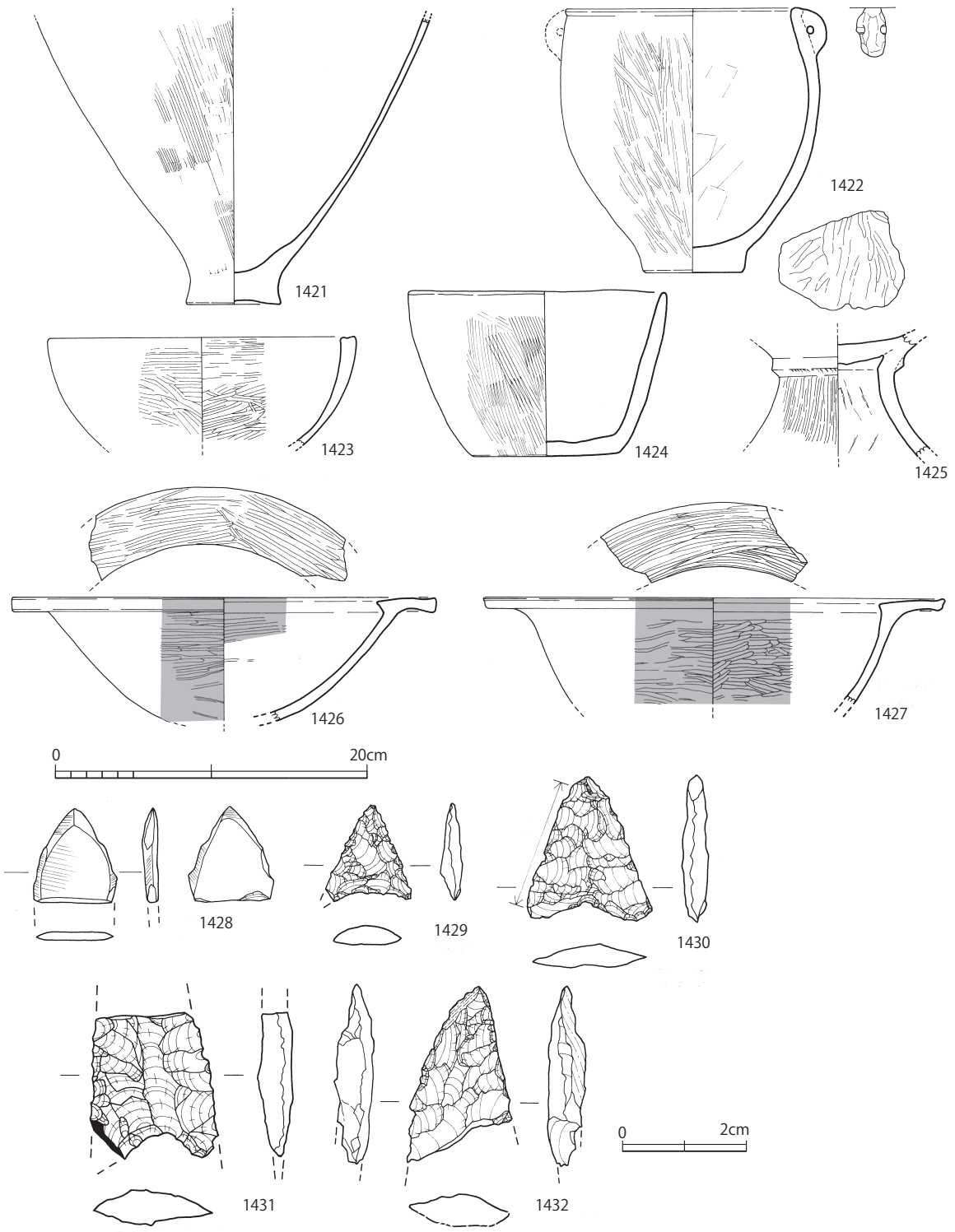
この土坑の時期は、Ⅲ期（中期中頃）と考えられる。



第301図 7次37号土坑



第 302 図 7 次 3 7 号土坑出土遺物①



第303图 7次37号土坑出土遺物②

39) 38号土坑 (第304図)

調査区のほぼ中央部で検出された土坑で、南北1.10m、東西1.50mの楕円形を呈する。残存する深さは0.32mである。小さなピットと切り合い関係を有するが、先後関係は不明である。

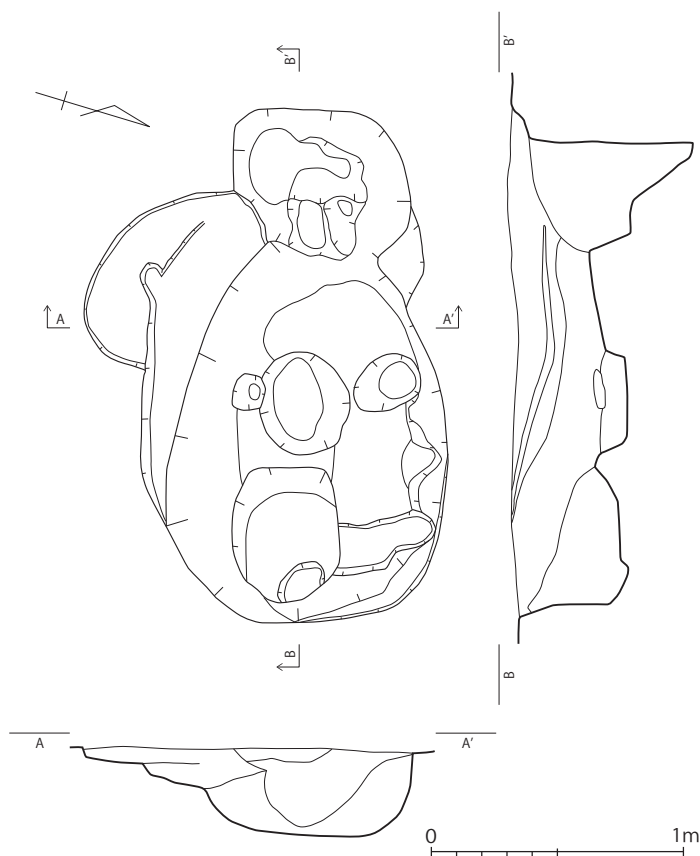
出土遺物はなく、時期の比定はできない。

40) 39号土坑 (第305図)

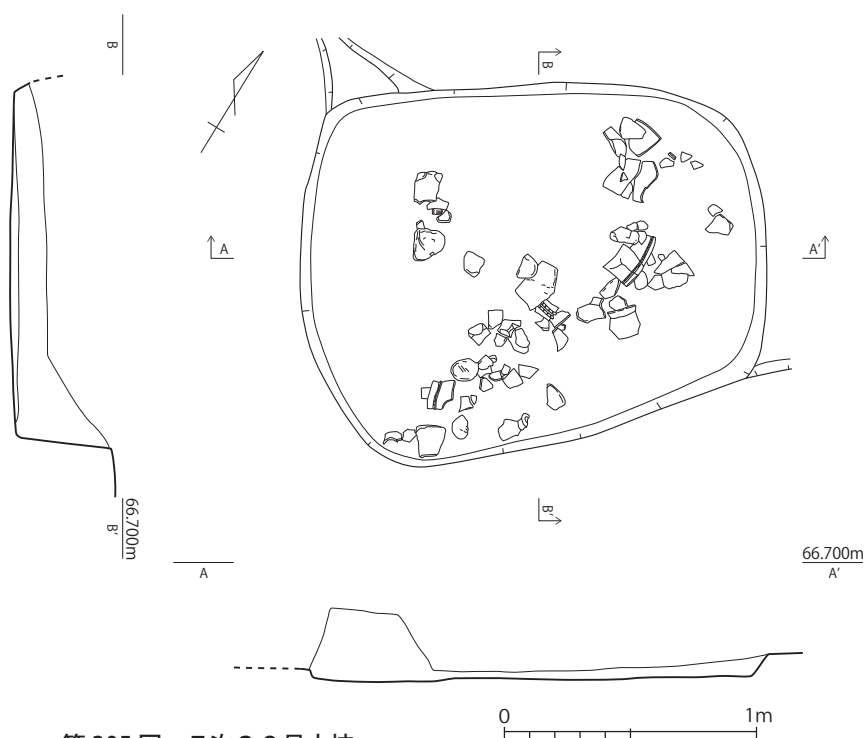
調査区中央やや東南東で検出された土坑で、47号土坑と切り合うが、先後関係は不明である。南北は1.30～0.45m、東西は1.85mのやや台形気味の隅丸長方形を呈する。残存する深さは0.08mほどと僅かである。遺物は床面直上で出土している。

図示できる出土遺物は26点である。第306図1433は口縁部外面に三日月型の刺突文を入れ、肩部には半裁竹管で四条(8本)平行線を廻らせる下城式土器壺、1434と1435も口縁部外面に円形の刺突文を施す。1436と1437は平底の壺底部で、1437は外面にベンガラが塗布されている。1438は高台状になる底部で、外面にミガキが施される壺である。1439から1443はゆるやかに「く」字形に折れて開く甕で、いずれも胴部最大径は口径を超えない。1444から1450は刻目突帯を廻らせる下城式土器甕で、突帯は二条のもの一条のものがある。1447は口縁部が内傾しながら強く外反して開く。第307図1451から1454は平底の甕底部で、非常に厚いもの(1451)がある。1455と1456は高坏(鉢)の脚部で、1455には縦長長方形になると思われる透かしがある。1457は安山岩製の扁平打製石斧、1458は安山岩製の凹石である。

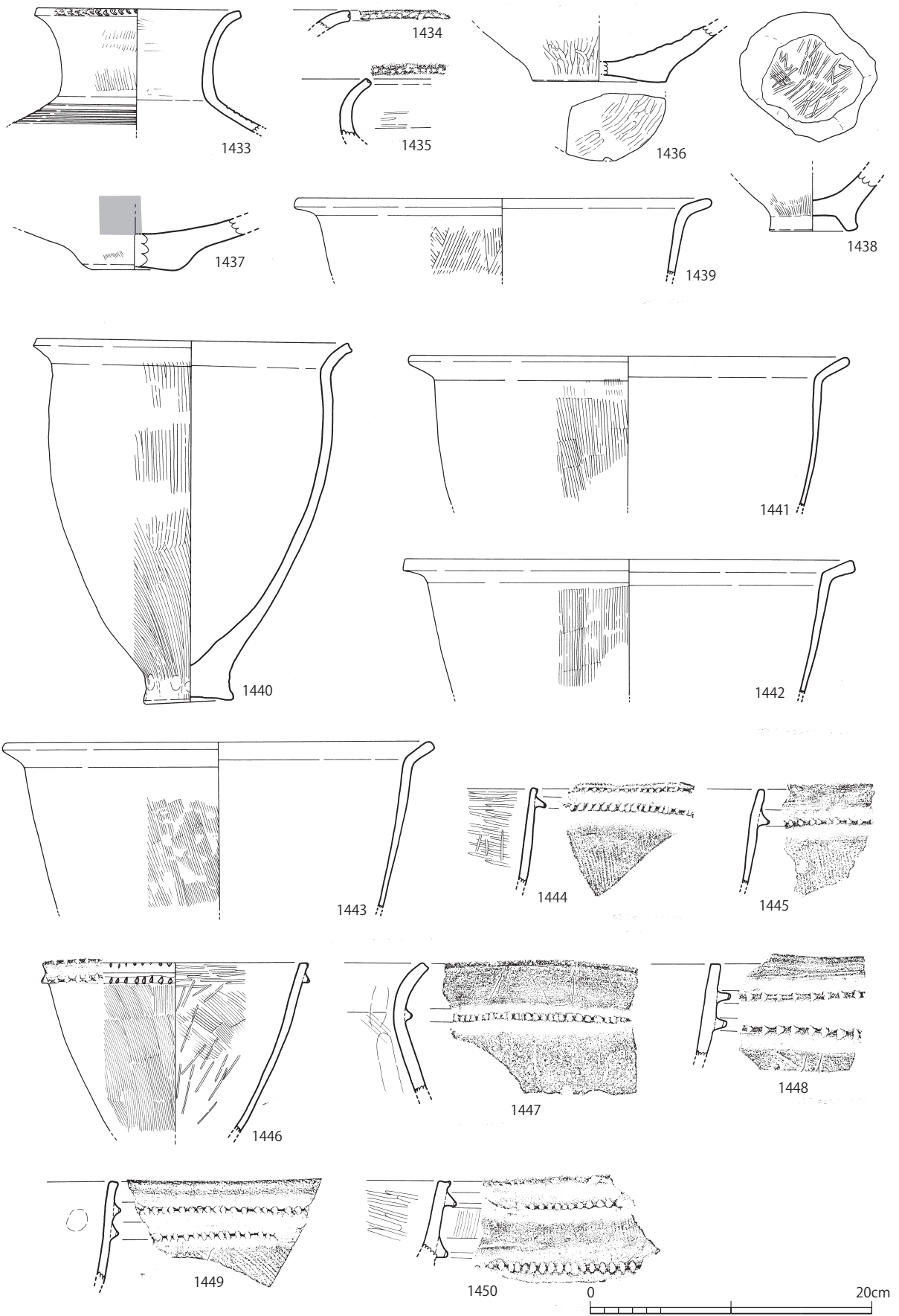
この土坑の時期は、Ⅱ期(中期初頭～前葉)と考えられる。



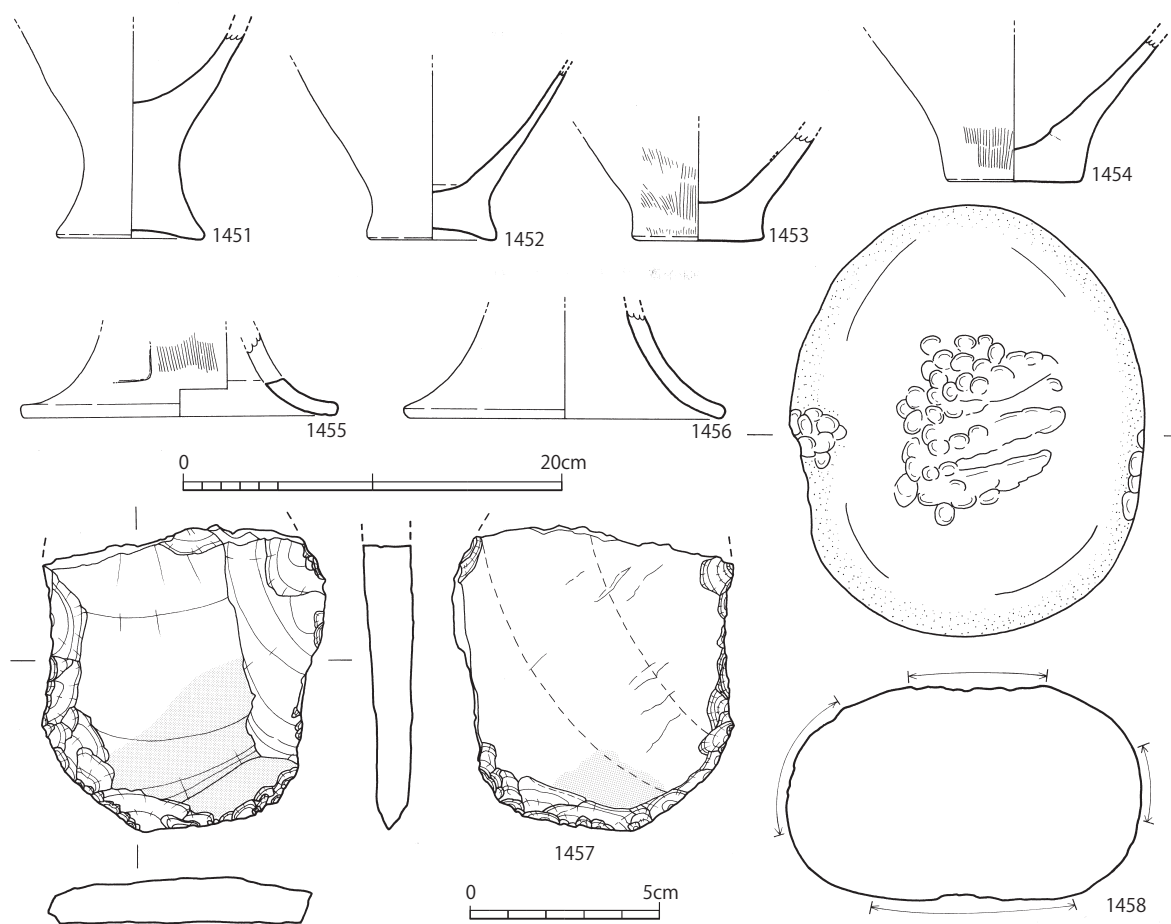
第304図 7次38号土坑



第305図 7次39号土坑



第306图 7次39号土坑出土遺物①



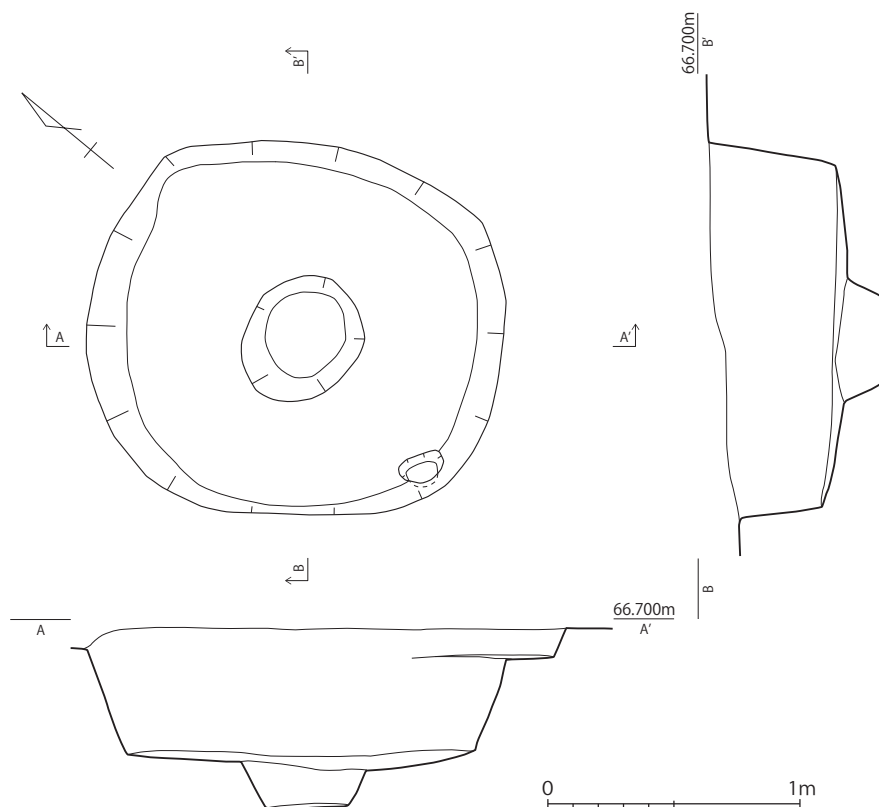
第307図 7次39号土坑出土遺物②

41) 40号土坑 (第308図)

調査区東端の中央付近で検出された土坑である。南北1.65m、東西1.48mの隅丸方形を呈し、残存する深さは0.50mである。床面中央には直径0.45m、深さ0.17mのピットがある。

図示できる出土遺物は1点である。第309図1459は口縁端部を折り返して下方に垂らせ、外面に一条の櫛描波状文を描く安国寺式土器壺である。

図示できた土器が1点のみで遺構の時期を決めがたいが、1459はVI期(後期前葉)のものなので、この土坑の時期はVI期以降となる。

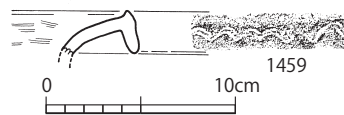


第308図 7次40号土坑

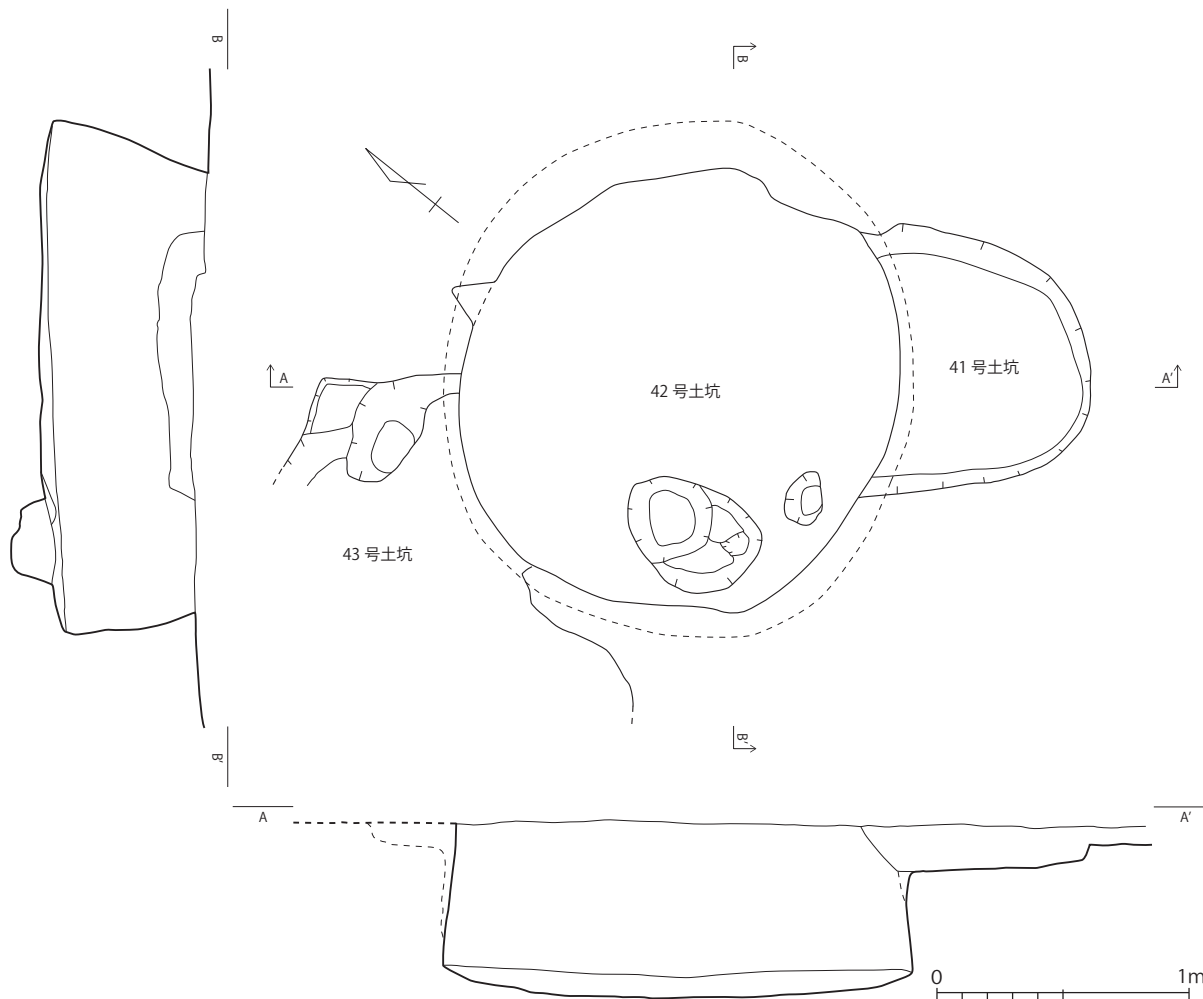
42) 41号土坑(第310図)

調査区中央で検出された土坑で、42号土坑と切り合うが、先後関係は不明である。略南北は1.00 + a m、略東西は1.05mで、残存する深さは0.18mである。

図示できる出土遺物は3点である。第311図1460は平底の壺底部、1461は二条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、1462は姫島産黒曜石製の打製石鏃である。
この土坑の時期は中期と考えられるが、出土遺物が少なく細かな時期比定はできない。



第309図 7次40号土坑出土遺物



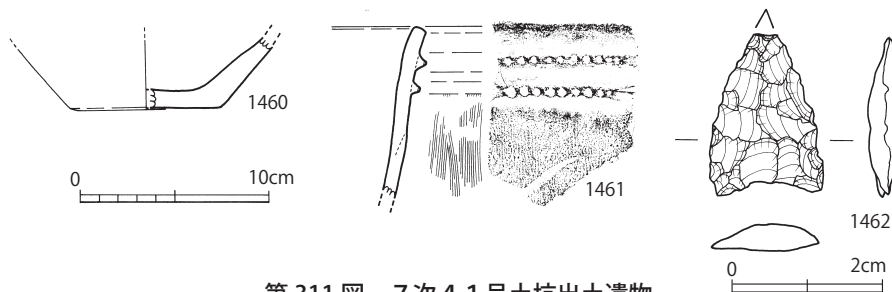
第310図 7次41、42号土坑

43) 42号土坑(第310図)

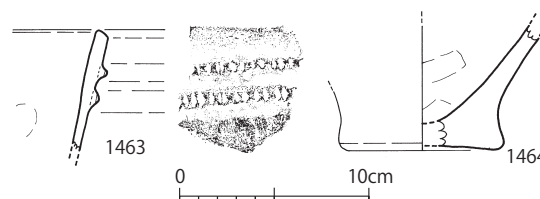
調査区中央で検出された土坑で、41号土坑と切り合うが、先後関係は不明である。長軸1.75m、短軸1.70mのほぼ円形を呈し、深さは0.70mである。床は袋状に広がり、長軸2.00m、短軸1.85mとなる。

図示できる出土遺物は2点である。第312図1463は二条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、1464は平底の甕底部である。

この土坑の時期は中期と考えられるが、出土遺物が少なく細かな時期比定はできない。



第311図 7次41号土坑出土遺物

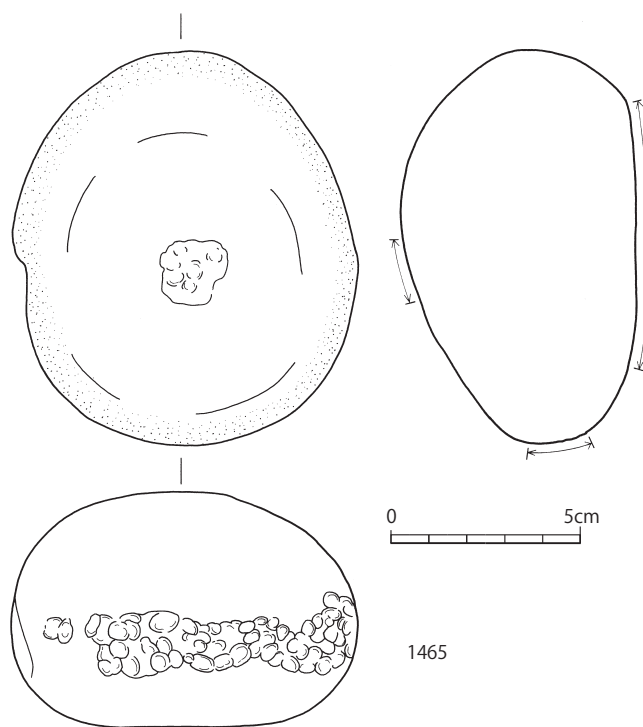


第312図 7次42号土坑出土遺物

44) 43号土坑

「43号土坑」の記載のある遺物である。しかしながら、最終的に遺構と確認できなかったものであるが、ここでは「43号土坑」出土遺物として扱う。

図示できる出土遺物は1点である。第313図1465は安山岩製の敲石（磨石）である。



46) 45号土坑

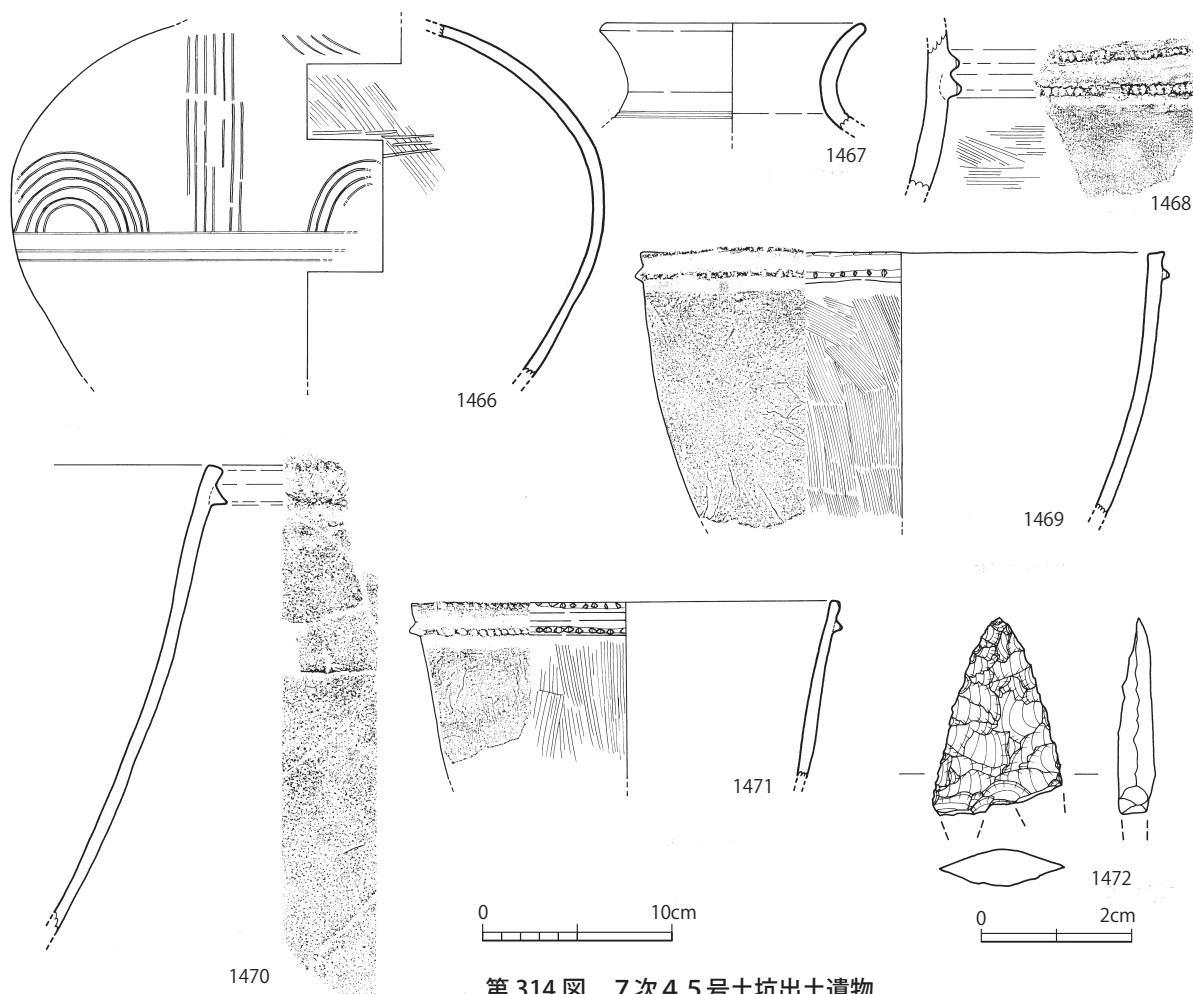
「45号土坑」の記載のある一括遺物である。しかしながら、最終的に遺構と確認できなかったものであるが、一括性を優先して、ここでは「45号土坑」出土遺物として扱う。

図示できる出土遺物は7点である。第314図1466は半裁竹管で直線文と重弧文を描く下城式土器壺で、体部は最大径を中位に持つ。1467は頸部下に現状で二条の沈線を廻らせ、口縁部は緩やかに外反しながら開く壺、1468は1353と同一個体と思われる刻目突帯を二条廻らせる壺、1469から1471は一条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕である。突帯は比較的の口唇部に近い部分に巡らされる。1472は姫島産黒曜石製の打製石鏃である。

この土坑の時期はⅡ期（中期初頭～前葉）である。

第313図 7次43号土坑出土遺物

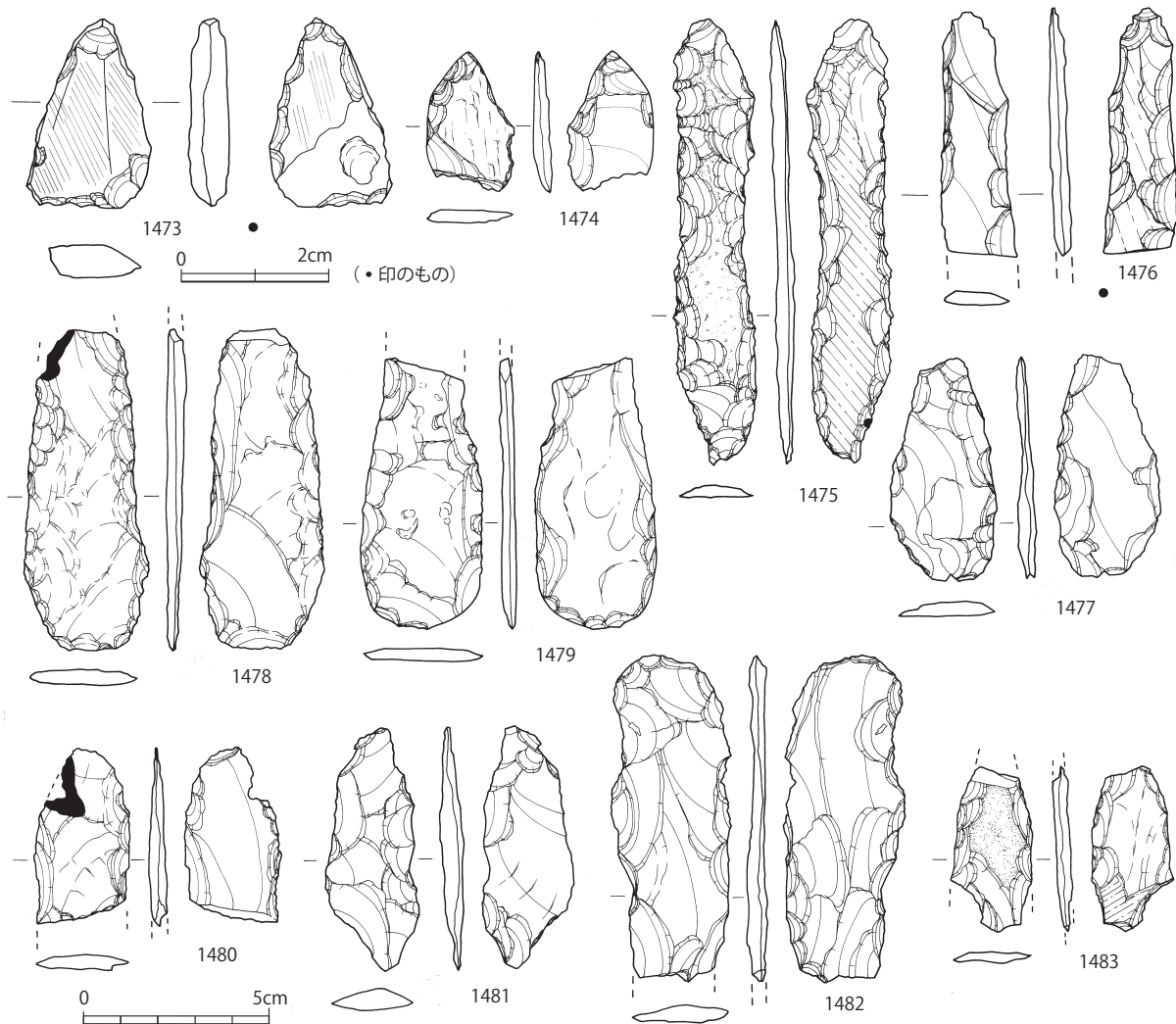
47) 46号土坑



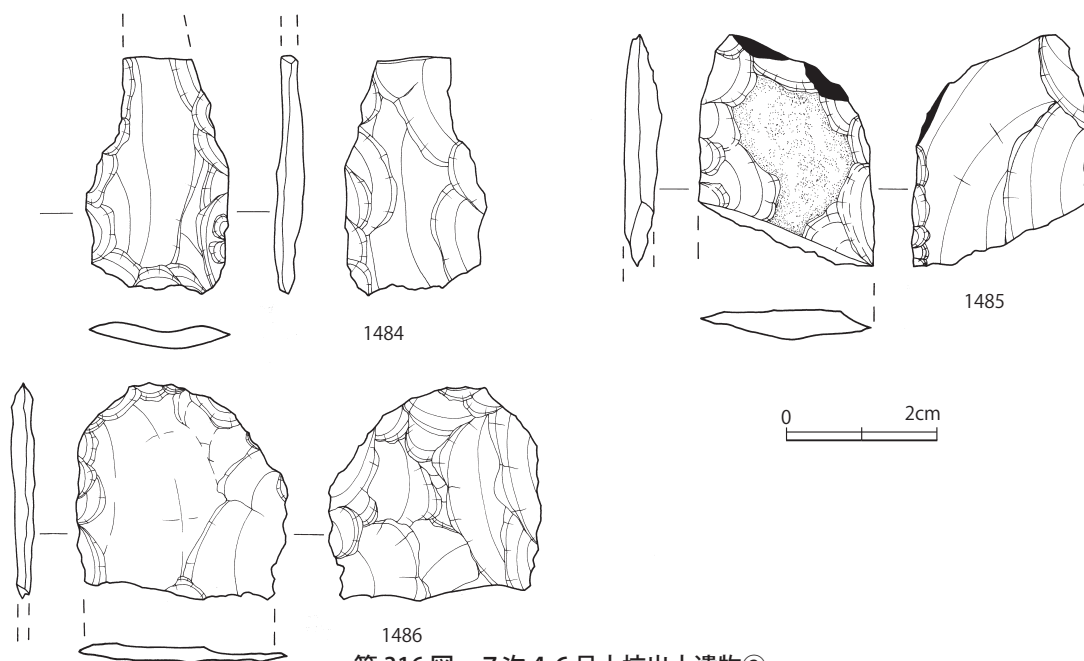
第314図 7次45号土坑出土遺物

「46号土坑」の記載のある一括遺物である。しかしながら、最終的に遺構と確認できなかったものであるが、一括性を優先して、ここでは「46号土坑」出土遺物として扱う。

図示できる出土遺物は14点である。第315図1473は安山岩製の磨製石鏃未成品、1474は結晶片岩製の磨製石鏃未成品である。1475から1486は同質の暗灰色の安山岩による石器で、一括資料と捉えられる。1475と1476は石槍、1477から1486は石鎌としたが、類例の少ない石器群であり、検討が必要な資料である。



第315図 7次46号土坑出土遺物①



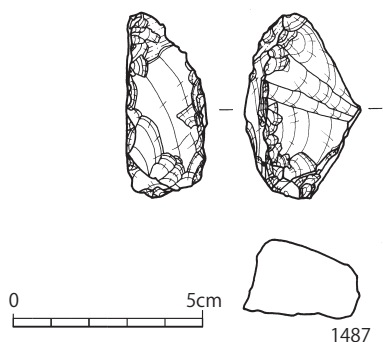
第316図 7次46号土坑出土遺物②

48) 47号土坑 (第317図)

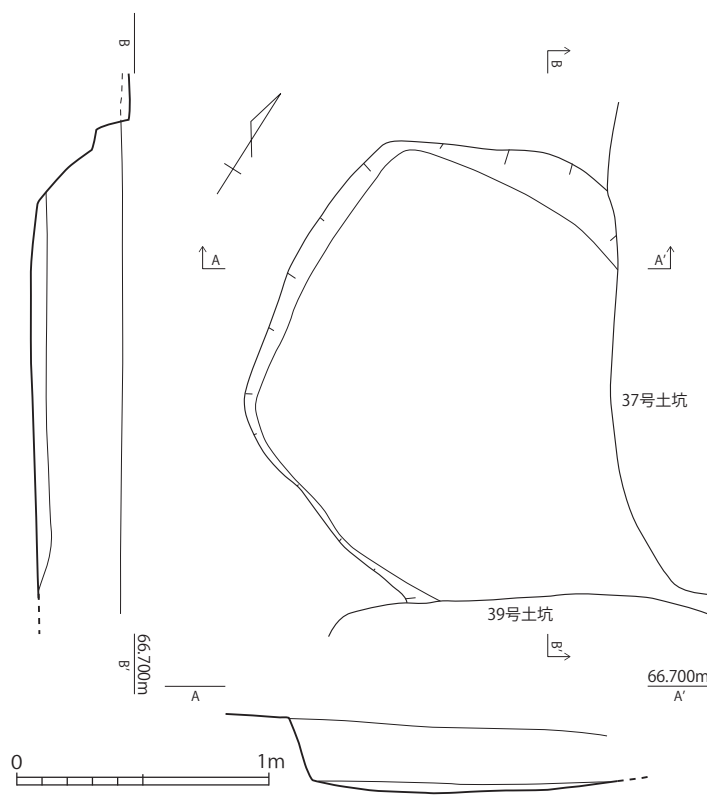
調査区中央やや東寄りで検出された土坑である。37号、39号土坑と切り合い関係があるが、先後関係は不明である。南北1.70m、東西1.15m + aの隅丸方形を呈し、深さは0.36mである。

図示できる出土遺物は1点である。第318図1487は赤褐色をした鉄石英の火打石である。

この土坑の時期は、土器の出土がなく不詳である。



第318図 7次47号土坑出土遺物



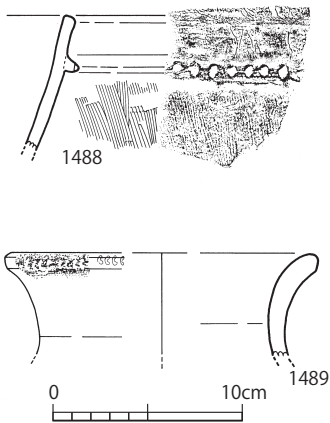
第317図 7次47号土坑

49) 48号土坑 (第319図)

調査区中央東寄りで検出された土坑で37号土坑と切り合い関係があるが、先後関係は不明である。長軸1.65m、短軸1.57mのほぼ円形を呈し、残存する深さは0.30mである。

図示できる出土遺物は2点である。第320図1488は刻目突帯を一条廻らせる下城式土器甕、1489は爪形の刺突文を口縁部外面に入れる壺である。

出土遺物が少なく土坑の時期を決めたいが、土器は中期のものである。

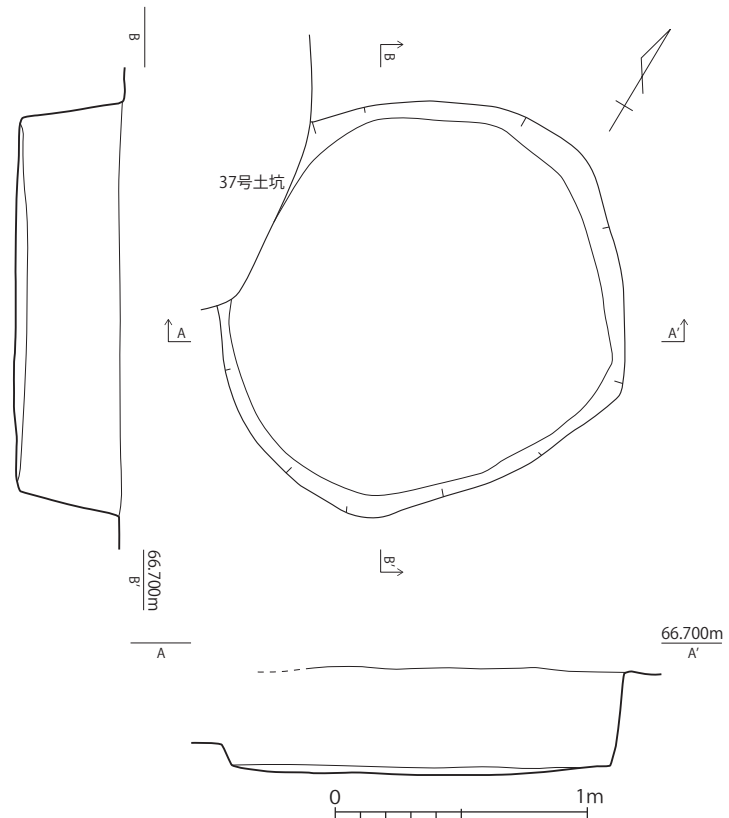


第320図 7次48号土坑出土遺物

50) 49号土坑 (第321図)

調査区東端のやや北よりで検出された土坑である。南北1.70m、東西1.20mの長方形を呈する。残存する深さは0.18mである。床面には浅いピットがある。

図示できる出土遺物は1点である。第322図1490は円形の土器片加工品である。この土坑の時期は不詳である。

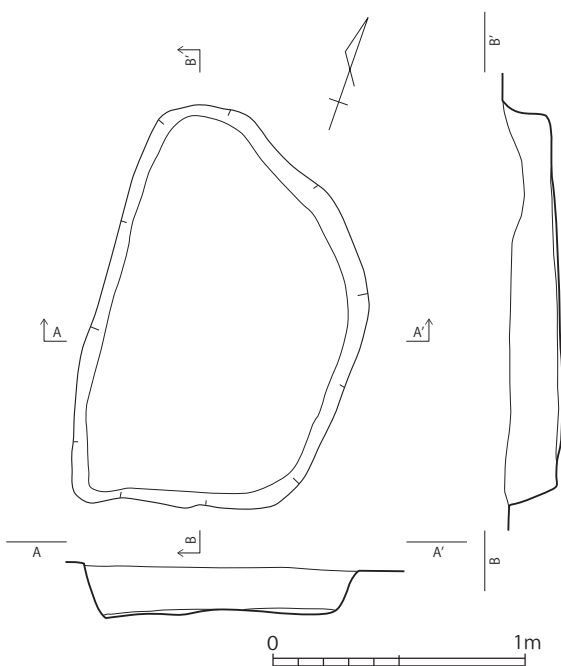


第319図 7次48号土坑

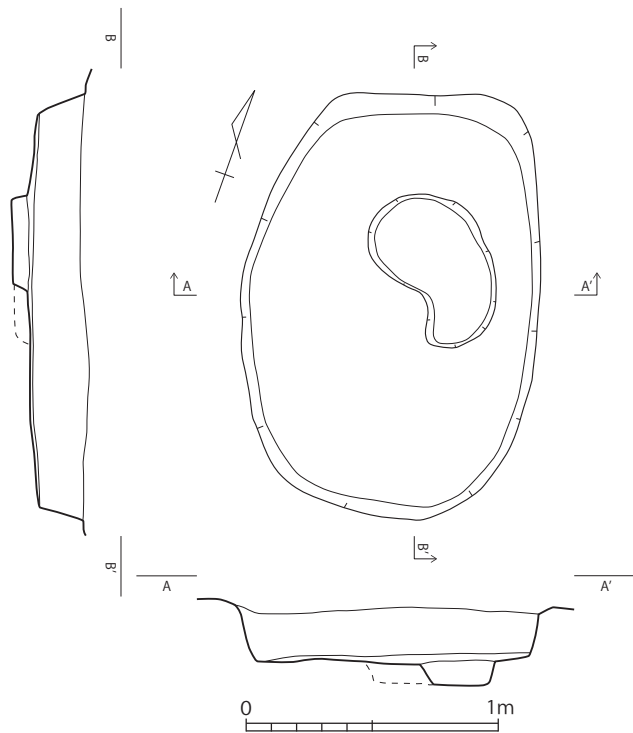
51) 50号土坑 (第323図)

調査区中央から北東寄りで検出された土坑である。南北1.60m、東西1.10mの不整な長方形を呈する。残存する深さは0.18mである。

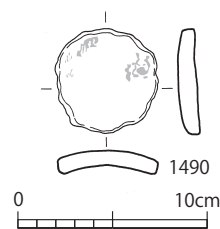
出土遺物はなく、時期の比定はできない。



第323図 7次50号土坑



第321図 7次49号土坑

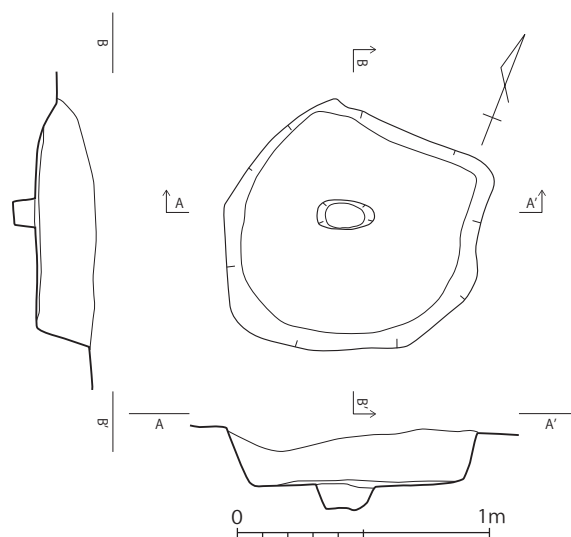


第322図 7次49号土坑出土遺物

52) 51号土坑 (第324図)

調査区中央から北東寄りで見出された土坑である。東西、南北とも1.00mの不整な円形を呈する。残存する深さは0.20mである。

出土遺物はなく、時期の比定はできない。

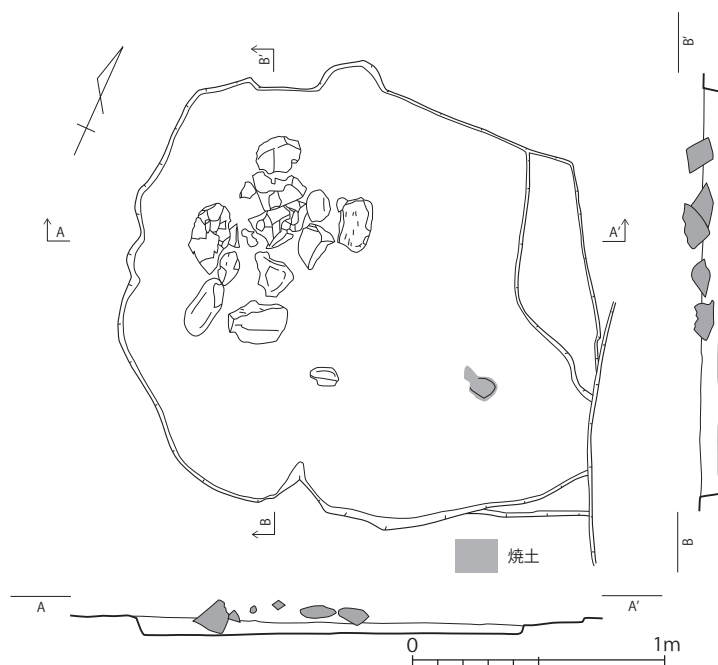


第324図 7次51号土坑

53) 52号土坑 (第325図)

調査区中央から北寄りで見出された土坑である。南北1.72m、東西1.85mの不整な方形を呈し、残存する深さは0.10mである。

床面からは礫が出土しているが、時期を示す遺物は出土していない。



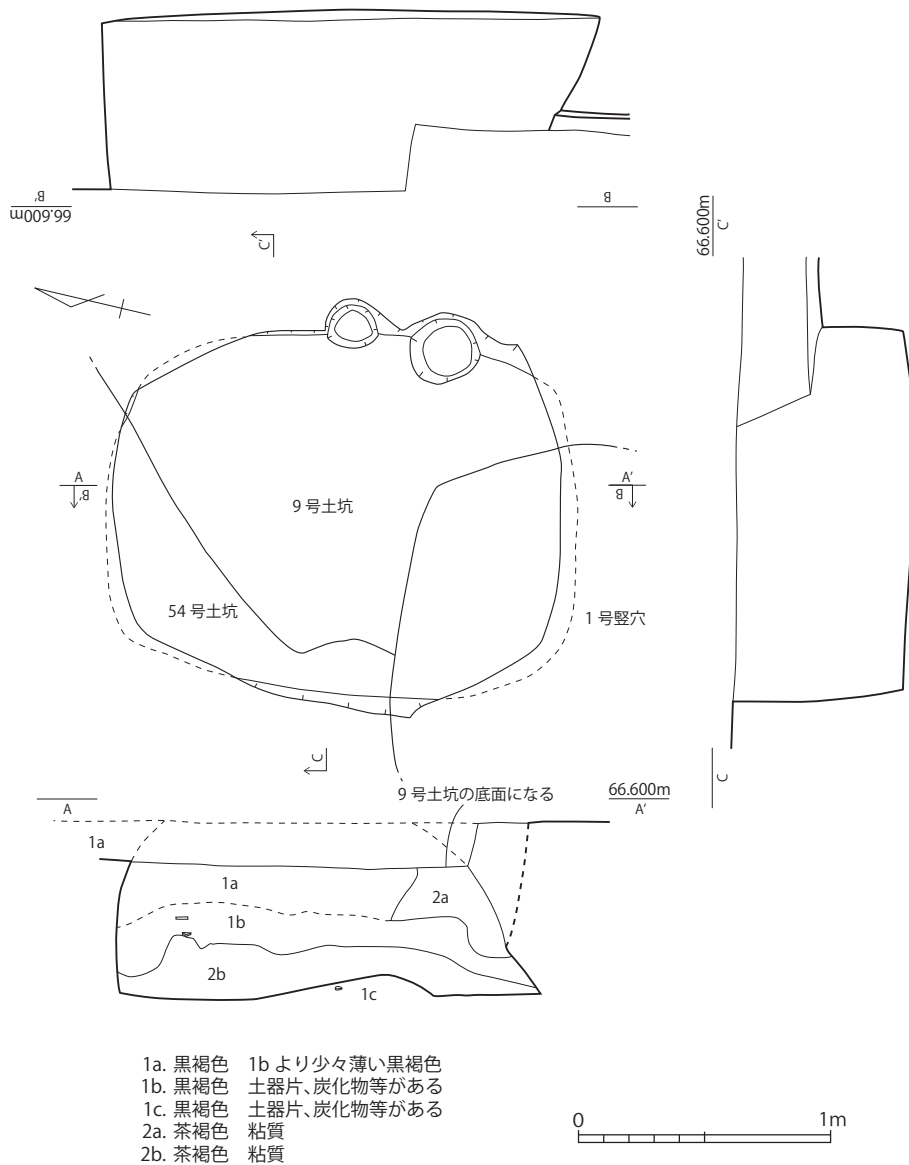
第325図 7次52号土坑

55) 54号土坑 (第326図)

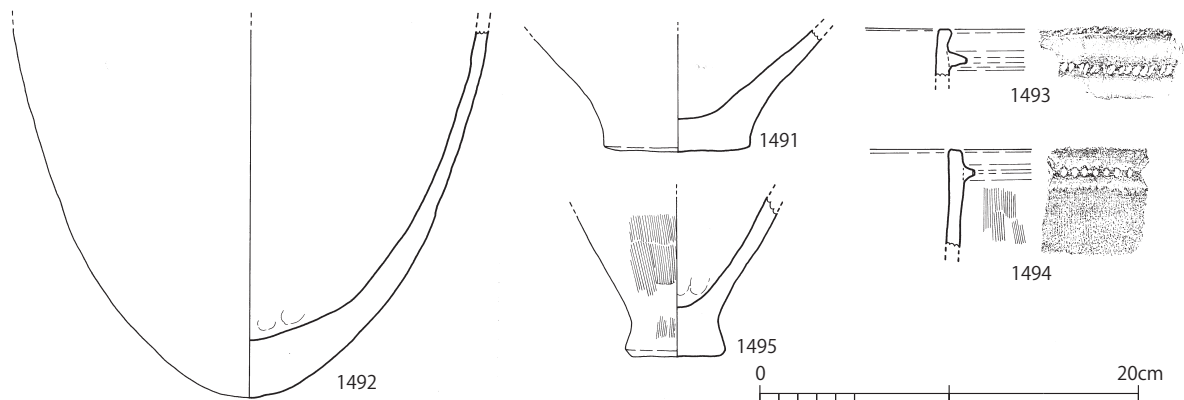
調査区南西部で見出された土坑で、1号竪穴建物と9号土坑に切られている。上端は南北1.75m、東西1.47m、下端は南北1.87m、東西1.40mのほぼ長方形を呈し、断面は袋状に立ち上がる。残存する深さは0.72mである。

図示できる出土遺物は5点である。第327図1491は平底の壺底部、1492は丸底の甕、1493と1494は一条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、1495はやや外側に踏ん張る形の平底の甕底部である。

この土坑の時期はⅨ期(弥生時代終末)と考えられる。



第326図 7次54号土坑



第327図 7次54号土坑出土遺物

56) 55号土坑 (第328図)

調査区北端の中央付近で検出された土坑である。25号竪穴建物、58号土坑と切り合うが、先後関係は不明である。南北1.20m、東西1.05m、深さ0.68mの方形を呈する。遺物は床面近くから出土している。

図示できる出土遺物は4点である。第329図1496と1497は平底の甕底部、1498は二条の刻目突帯を廻らせる

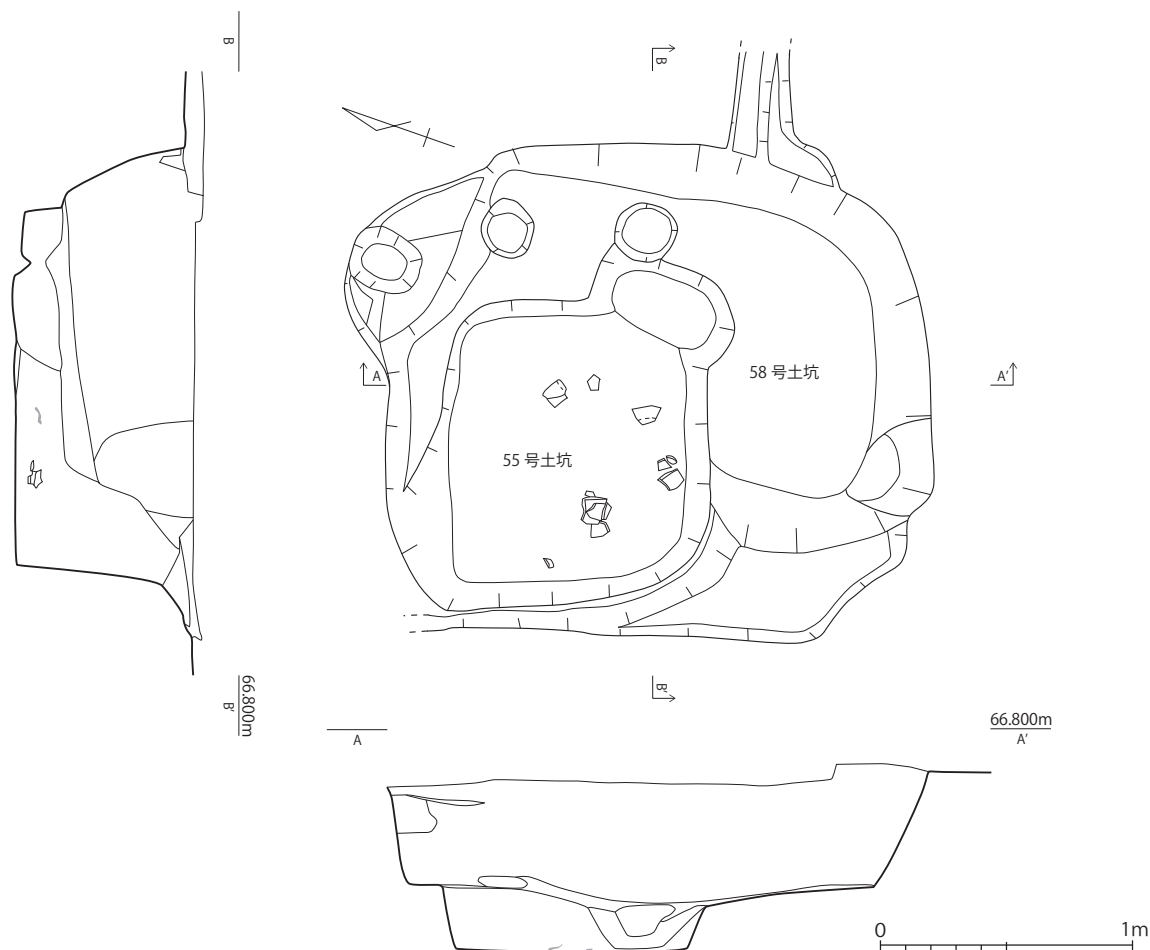
下城式土器甕、1499は脚台の付く鉢で、括れ部分には突帯が廻る。鉢は内外面ともヘラミガキされている。

この土坑の時期を決めるには1499の帰属時期が問題となるが、下ってもV期（後期初頭）と考えられるので、この土坑の時期もⅢ期（中期中頃）からV期となろう。この土坑を切っている25号竪穴建物がⅥ期であることもそれを支持する。

59) 58号土坑（第328図）

調査区北端の中央付近で検出された土坑である。25号竪穴建物、55号土坑と切り合うが、先後関係は不明である。南北2.00m、東西1.50mの長方形を呈し、残存する深さは0.45mである。

時期を示す出土遺物がなく、時期比定はできない。



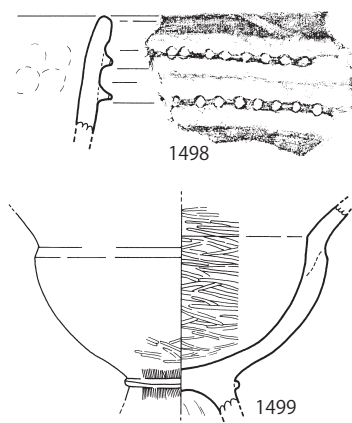
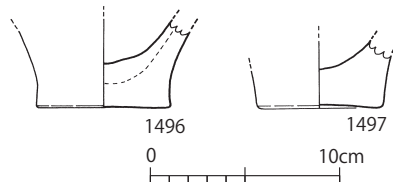
第328図 7次55、58号土坑

61) 60号土坑（第330図）

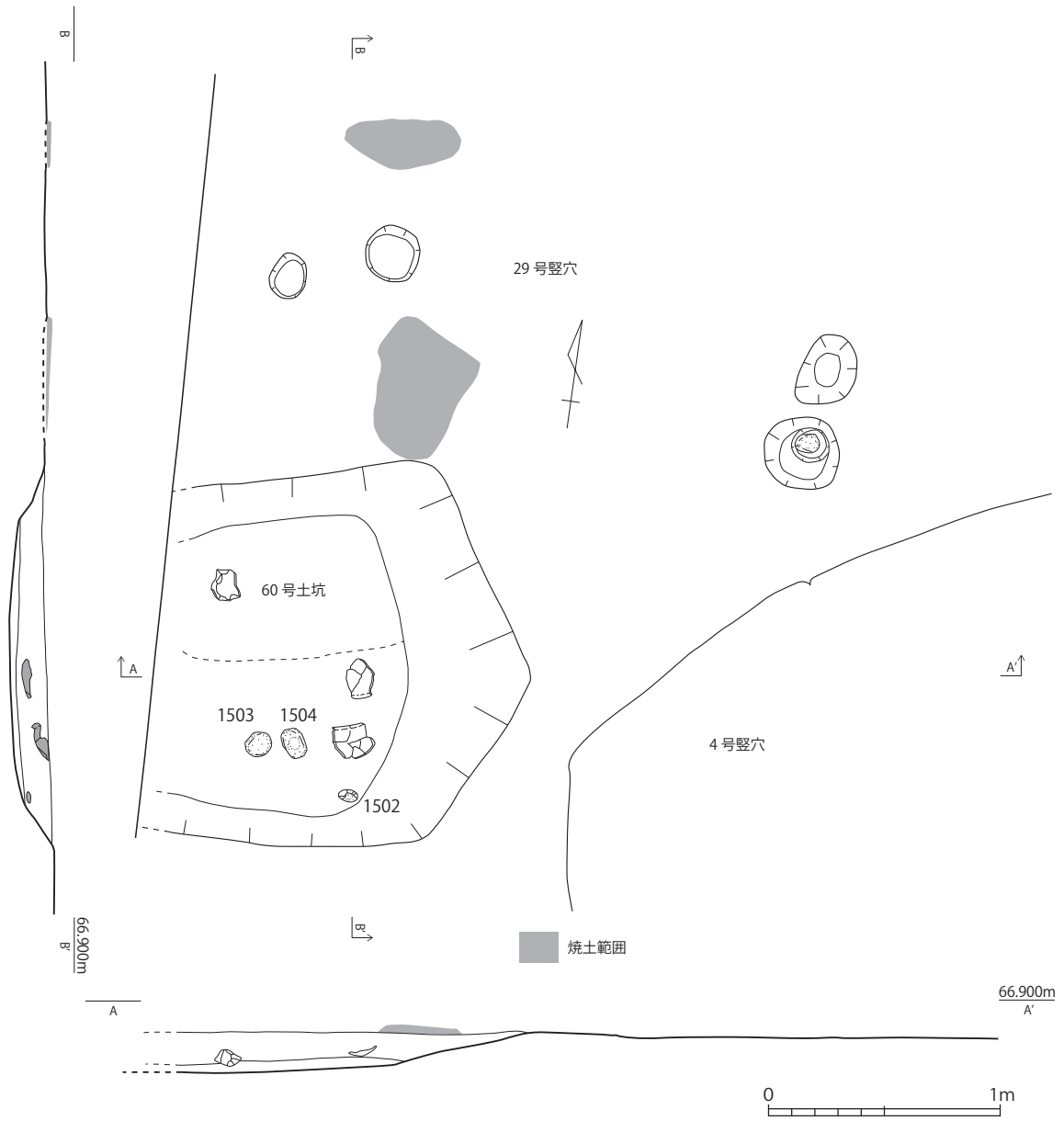
調査区西端のやや南寄りで検出された土坑である。西側は調査区外に延びるため、東西の規模は分からない。南北は1.58mで、深さは0.15mである。床面からやや浮いて遺物が出土している。

図示できる出土遺物は5点である。第331図1500は胴部最大径を上位に持つやや上げ底気味の平底の甕、1501は平底の甕底部である。1502は蛇紋岩製の石錘、1503と1504は安山岩製の敲石である。

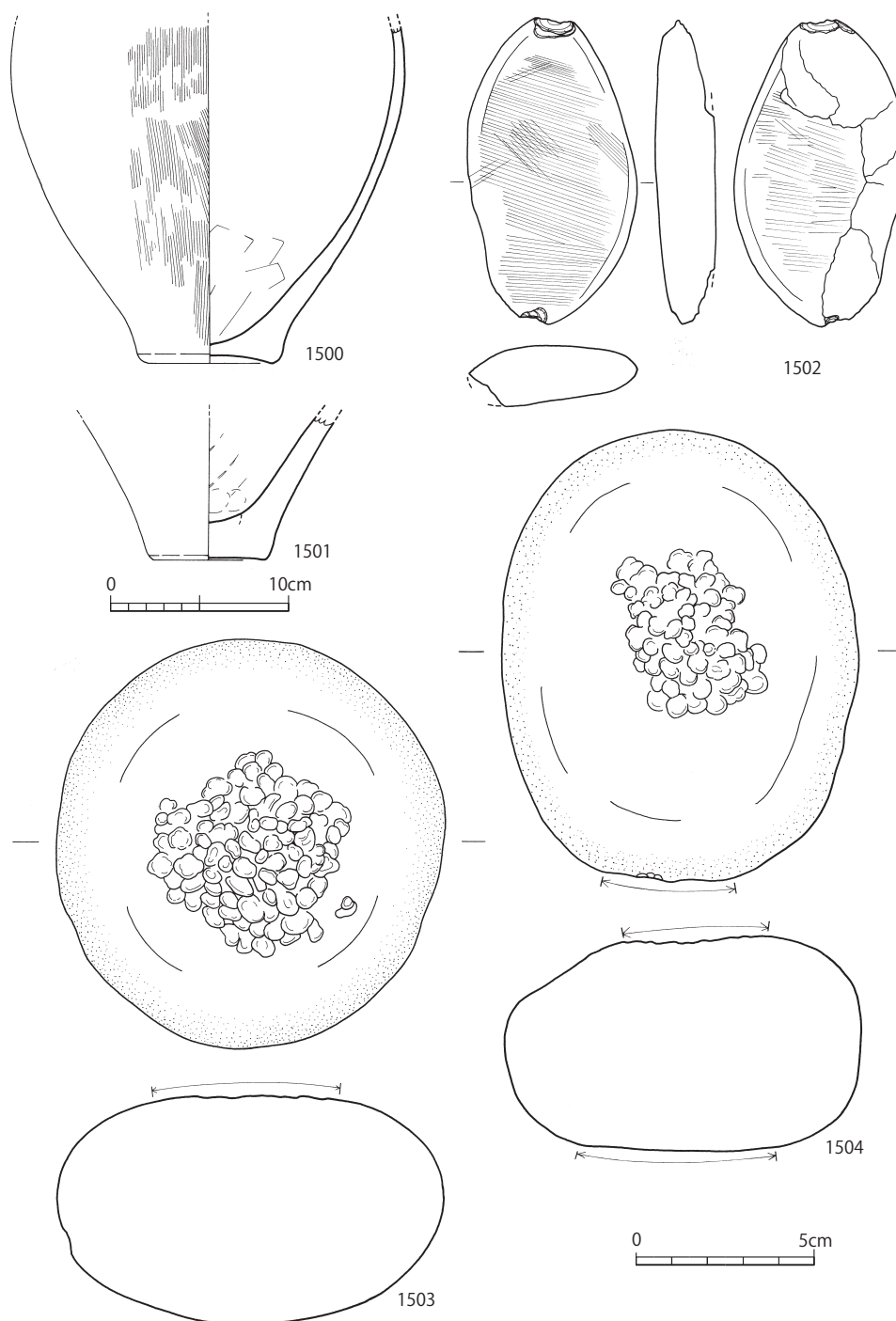
この土坑の時期は、土器が少なく決めがたいが、Ⅲ期（中期中頃）と考えておきたい。



第329図 7次55号土坑出土遺物



第330図 7次60号土坑



第331図 7次60号土坑出土遺物

62) 1号住西土坑 (第333図)

調査区の南西端で確認された土坑で、溝に切られて半分以上が壊されている。床面の直径は2.45m、残存する深さは1.10m、上端で1.3m程度と考えられる。

出土遺物はなく、時期は不明である。

62) 9号住東南土坑 (第209図)

調査区中央やや西寄りで見出された土坑である。9号竪穴建物と切り合うが、先後関係は不明である。南北1.00m、東西0.78m、深さ0.10mの楕円形を呈する。北側はピットにより壊されている。

図示できる出土遺物は4点である。第332図1505は一条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、1506と1507は平底の甕底部、1508は摘みの付いた蓋である。

この土坑の時期は、Ⅲ期(中期中頃)と考えられる。



第332図 7次9号住東南土坑出土遺物

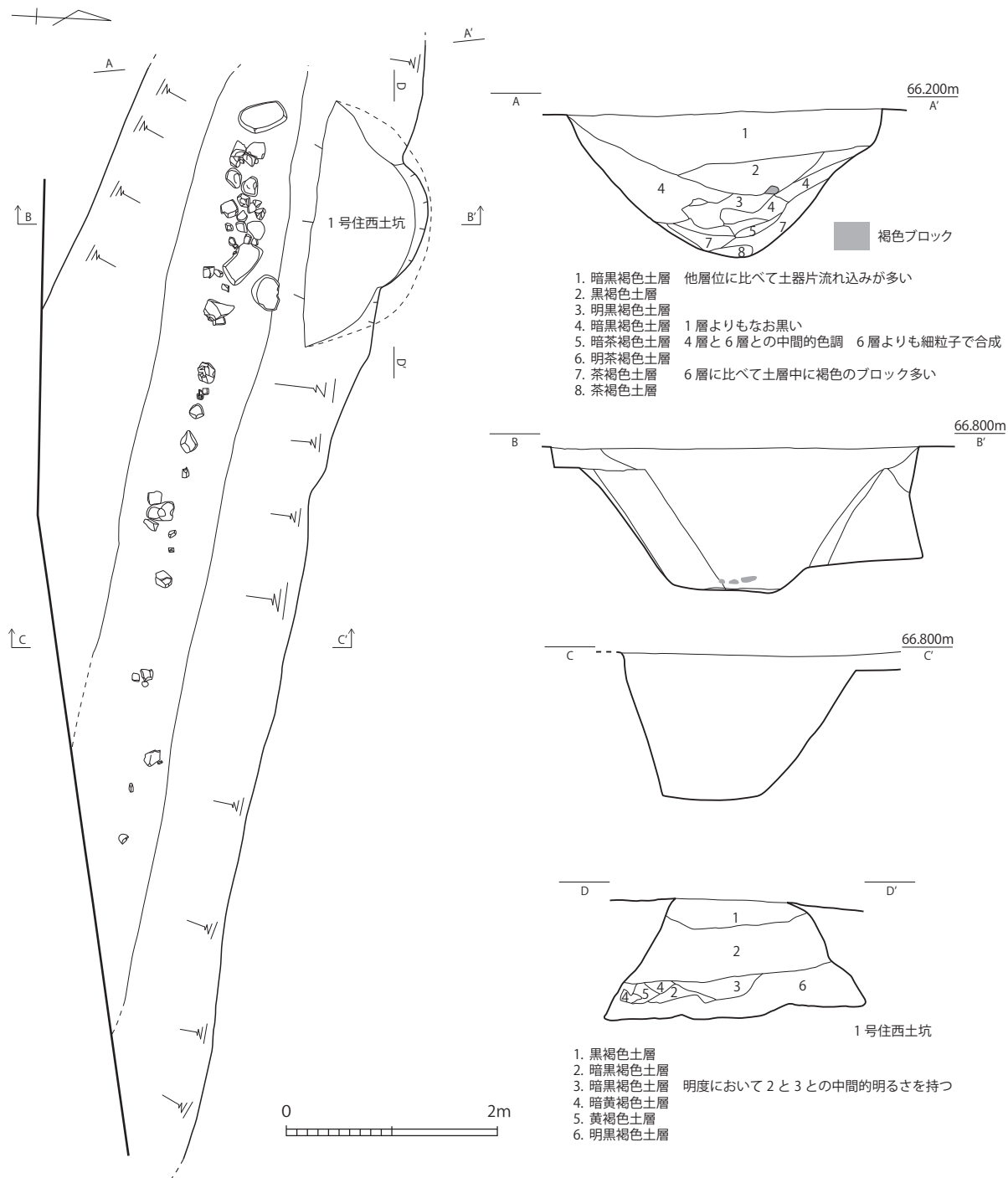
溝

1) 2号溝 (第333図)

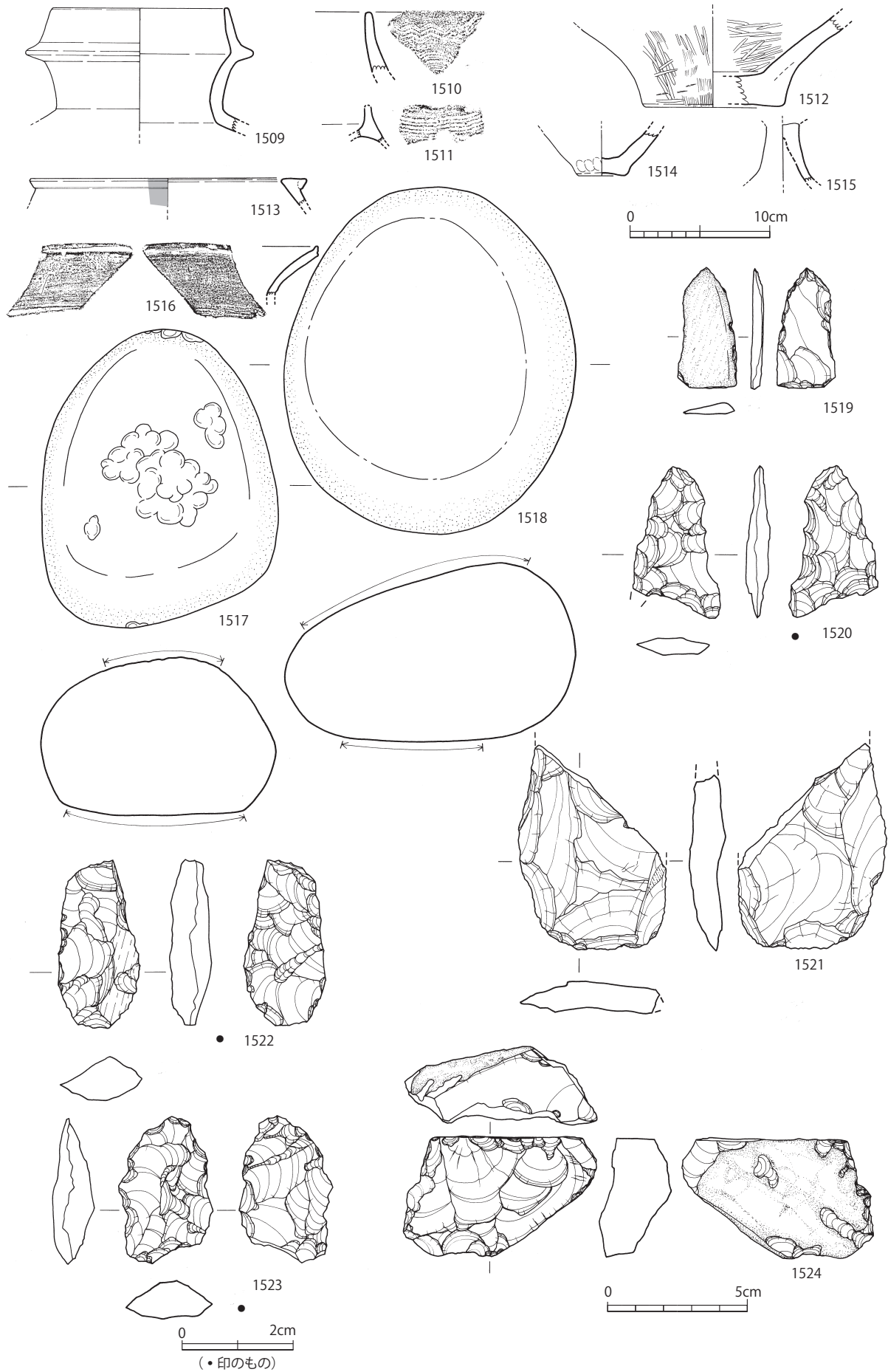
調査区の南西端で確認された略東西方向に直線的に伸びる溝である。1号竪穴建物を切っている。幅2.55m前後、深さは1.36m前後である。断面形は箱形を呈し、底面の幅は0.9m～1.0mである。土層図を見ると、最低一度の掘り直しが認められる。堆積土は北側からの流入が多い。

図示できる出土遺物は23点である。このうち第334図1525から1531は2号竪穴建物として取り上げた一群で、上層出土遺物である。1525と1526は半裁竹管で平行線を描く下城式土器壺である。1527は三条の突帯を廻らせる壺の体部、1528と1529は刻目突帯を巡らす下城式土器甕である。1530は貫通する孔があいている。1531は凝灰岩製の石皿である。1509から1511は安国寺式土器壺で、口縁部上半はあまり長くは伸びない。1512は内外面ともよくヘラミガキされた平底の壺底部、1513は口縁端部を小さく外側に張り出す壺で、内外面ともベンガラが塗布されている。1514はやや上げ底気味の平底の甕底部、1515は裾が大きく開く高坏の脚部である。1516は口縁端部内外面に沈線が廻る縄文晩期土器の浅鉢である。1517と1518は安山岩製の磨石、1519と1520は磨製石鏃未成品で、1519は結晶片岩、1520はガラス質安山岩である。1521は粘板岩製の扁平打製石斧、1522と1523は姫島産黒曜石製の二次加工剥片、1524は姫島産黒曜石製の石核である。

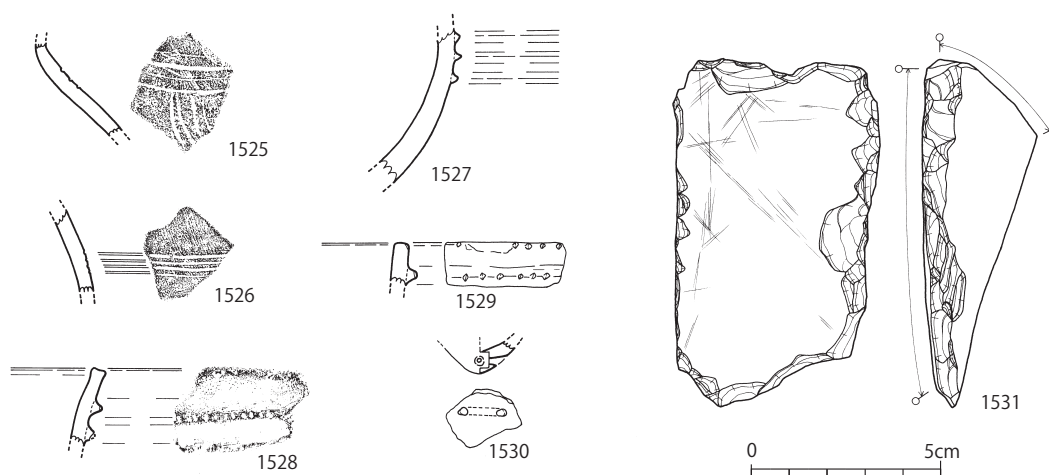
この溝の時期は、図示した遺物からだけだと時期を決めがたいが、この溝が切っている1号竪穴建物がⅨ期と考えられることから、Ⅸ期以降であるのは間違いない。そうすれば、1510の安国寺式土器の口縁部は大きく伸びるものかもしれない。



第333図 7次2号溝



第 334 図 7 次 2 号溝出土遺物①



第335図 7次2号溝出土遺物②

(3) その他の遺物

ここでは、遺構に伴わないで出土した遺物について説明する。第336図1532は半裁竹管で直線文を描く下城式土器壺、1533は鋤先状口縁部を持つ壺で、頸部には断面が薄い台形の突帯が廻る。1534は頸部に三条の断面が薄い台形の突帯が廻る壺、1535と1537から1539は口縁部上半に櫛描波状文を描く安国寺式土器壺、1536と1542は体部にベルト状突帯が廻る安国寺式土器壺、1540は壺の肩部で、浅い重弧文様の曲線と、×印のような文様をヘラ描きする。1732に近い文様か。1541は頸部に廻る突帯を指で摘んで凹凸をつける壺、1543は三条の突帯を廻らせる壺である。1544から1552は刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、1553は平底の甕底部、1554は小さな上げ底の甕底部である。第337図1555は蓋、1556は口縁部を外反しながら開く壺、1559は脚、1558は逆L字形に折れて開く口縁部に穿孔を持つ壺、1559は低い脚台、1560は口縁部が外形して伸びる平底の鉢、1561は小さな平底を持つ鉢か。1562から1564は壺の底部、1565と1566は縄文土器で、1565は後期、1566は手向山式土器。1567から1571は須恵器で、1567は口径8.9cmの坏蓋で天井部は回転ヘラケズリ、1568は口径9.3cmの坏身で底部は回転ヘラケズリ、1569は口縁端部に段を持つ壺、1570は口縁端部を外側に折り返して肥厚させる壺、1571は甕である。

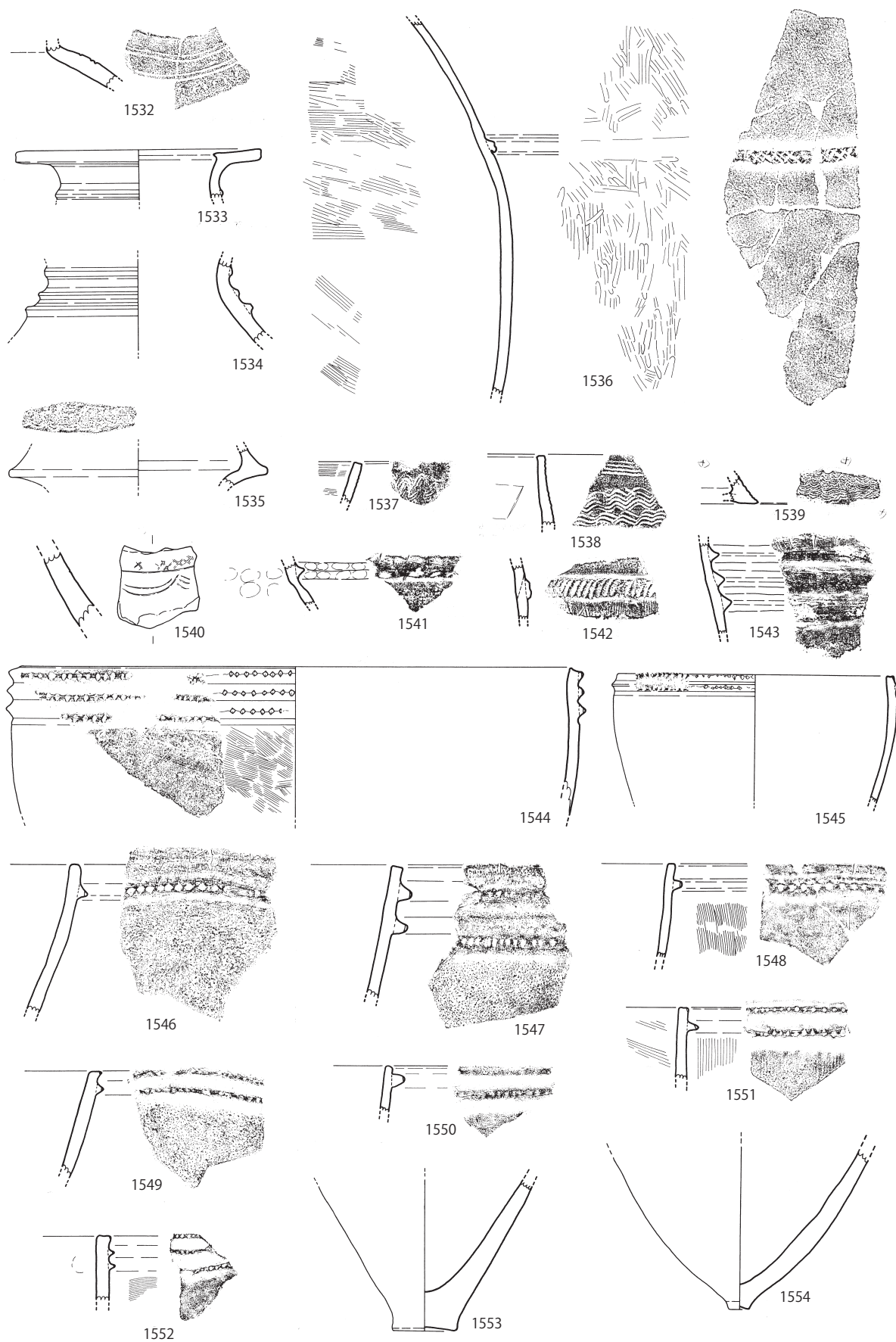
1572から1577は鉄器で、1572は刃幅4.2cmの板状鉄斧、1573は刀子、1574から1576は鉄鎌、1577は断面が正方形に近い茎を持つ鉄鎌、または鉈か。残存長9.6cm。1578はクロム白雲母製の小玉で、直径は0.5cmである。

1579から1607は石器である。1579から1581は頁岩製の柱状片刃石斧で、1579と1581には抉りが入る。1582は粘板岩(?)製の石包丁で4か所に孔があいている。1583と1584は安山岩製の磨製石鎌、1585と1592は結晶片岩製の磨製石鎌未成品である。1586から1590までは打製石鎌で、1586はサヌカイト、1589はチャート、その他は姫島産黒曜石製である。1591は姫島産黒曜石の火打石、1593から1595は砥石で、1592は凝灰岩、1594は砂岩、1595は粘板岩でできている。第339図1596と1597は姫島産黒曜石で、1596は二次加工剥片、1597は石核である。1598は角閃石安山岩の台石、1599は角閃石安山岩の磨石、1600は凝灰岩の砥石、第340図1601は角閃石安山岩の台石、1602は角閃石安山岩の敲石、1603は粘板岩の磨石、1604は凝灰岩の石錘か。1604は角閃石安山岩の敲石、1606は砂岩の敲石(磨石)、1607は安山岩製の台石である。

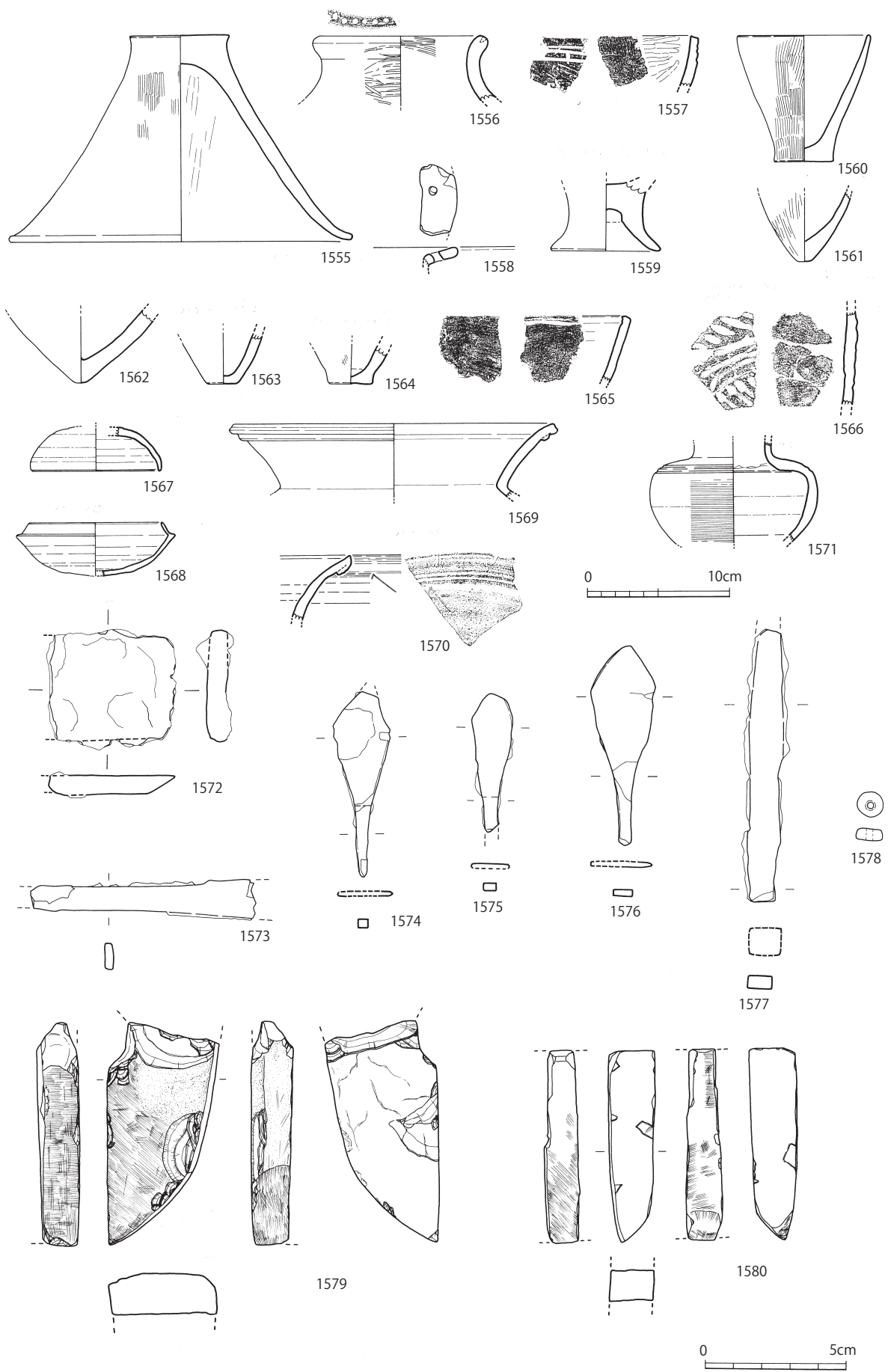
(4) まとめ

1次から7次までの調査区の中では最も南側に位置する。台地全体で見たときには、台地のほぼ中央ということになる。この調査区では主に北西部は竪穴建物、南東部は土坑という分布の偏りが見られる。竪穴建物は後期、土

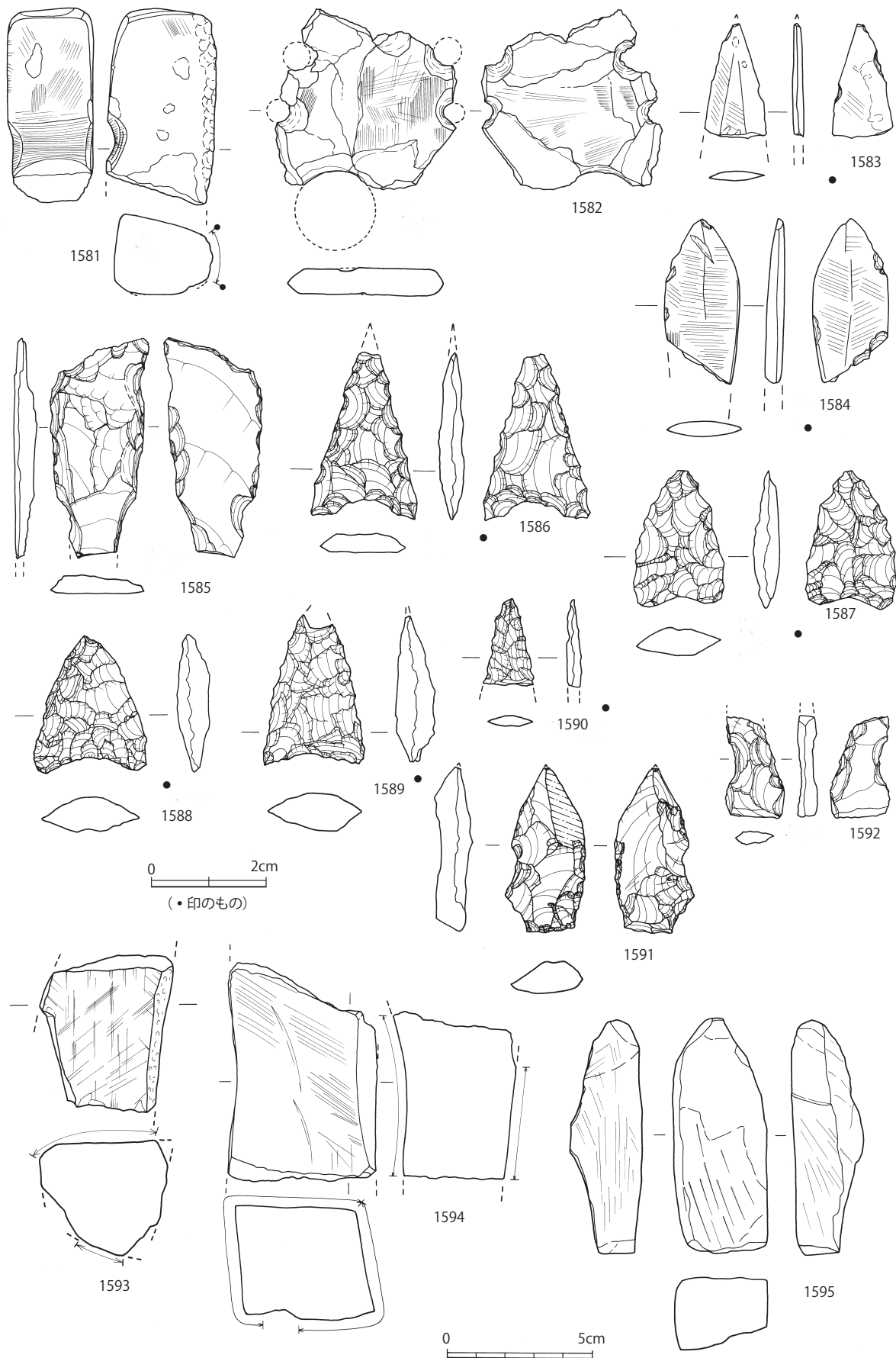
坑は中期が中心なので、同時存在というわけではないが、何らかの規制が働いていたと考えられるのではなかろうか。特に、土坑群はサークル状を呈しており、大分市下郡遺跡などで検出されているものと同様の形状を呈する。また、後期の堅穴建物にとって、この場所が何らかの規制の働いた場所であるとすれば、それは1号堅穴建物を切っ
て掘られている溝の存在が作用した可能性がある。台地全体で見れば、台地を南北に分けるように台地のほぼ中央を東西に延びる形になる。この溝が調査区外でどのように伸びていたのかについては分からないので、これ以上確
実なことは言えないが、次の章で述べる9次調査の溝との関係性もポイントになる。仮に、同一の溝ということ
になると、溝で囲まれた台地南側と、溝を持たない可能性の高い北側という集落を二分する装置であった可能性も
でてくる。日田市小迫辻原遺跡では、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて環濠が順を追って3か所築かれたが、
環濠の内側だけでなく、外側にも堅穴建物が作られていた。このことは、環濠内部に住む人々と、環濠内部に入
れない人々との格差が生じていたことを示すが、小迫辻原遺跡では、その後隣接地に居館が成立し、突出した特定
個人の出現を跡付けることができている。雄城台遺跡の場合は、調査区が台地平坦面全体の1割程度であるため、
残念ながら、これ以上言及ができない。



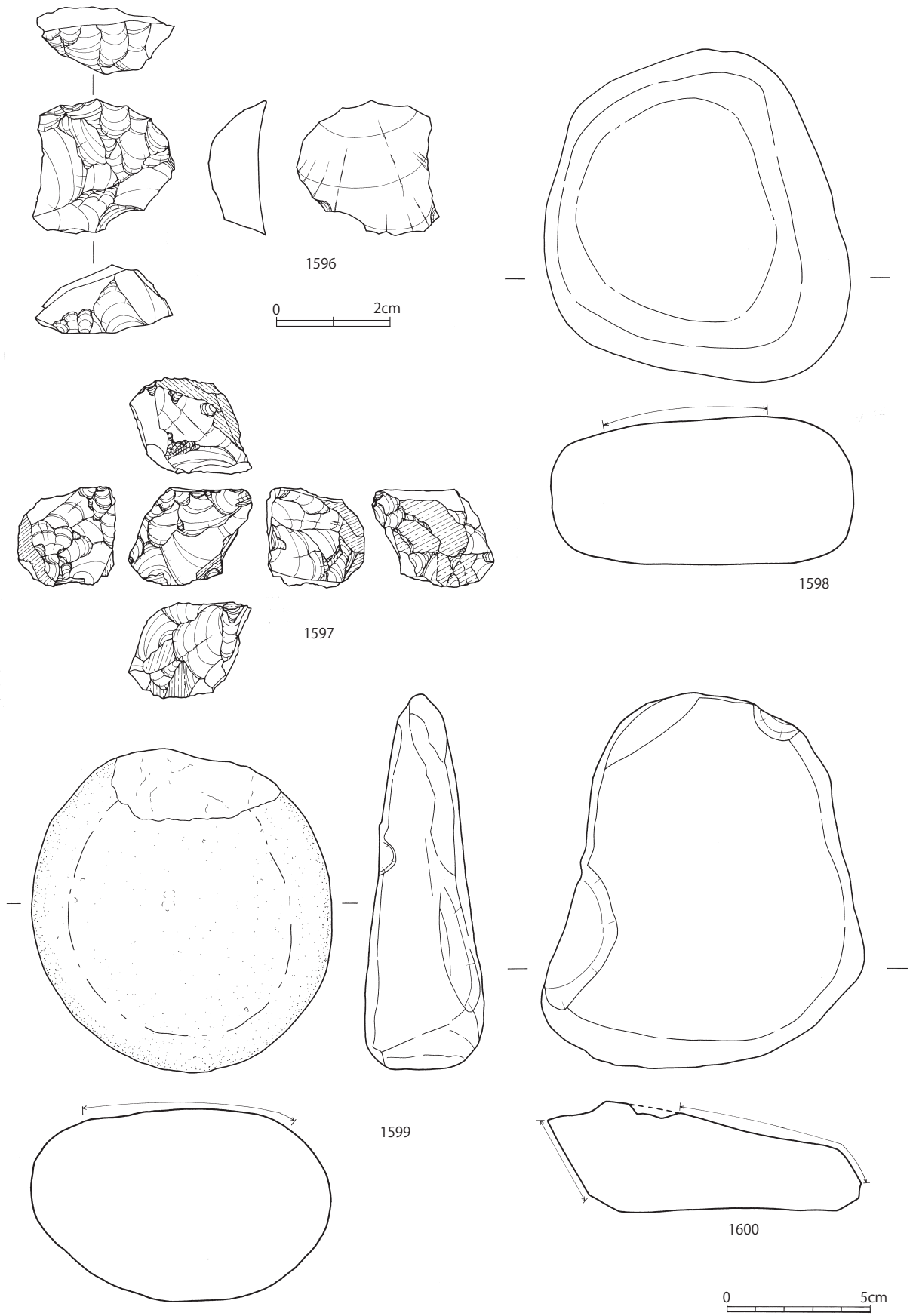
第336図 7次一括遺物①



第337図 7次一括遺物②



第338図 7次一括遺物③



第339図 7次一括遺物④



第340図 7次一括遺物⑤